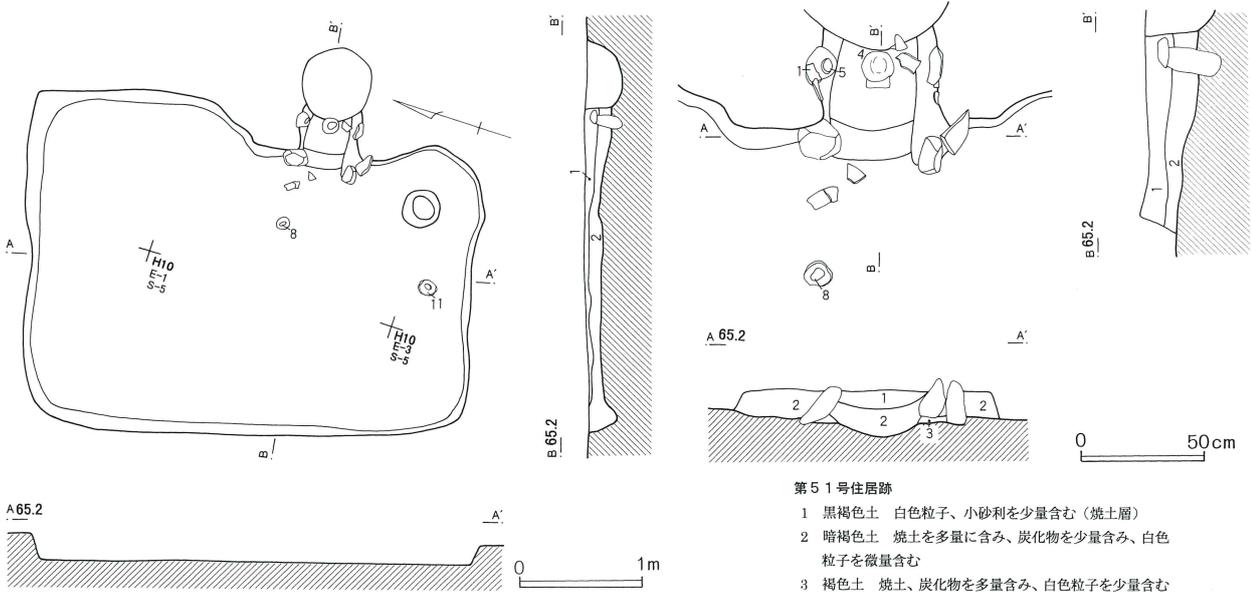
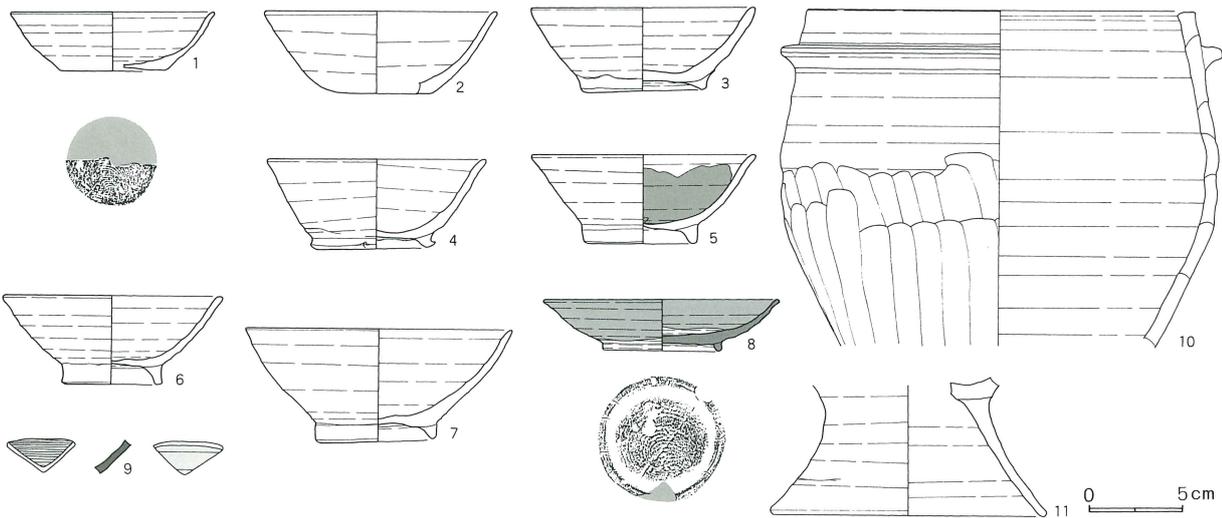


第121図 第51号住居跡・出土遺物



第51号住居跡

- 1 黒褐色土 白色粒子、小砂利を少量含む（焼土層）
- 2 暗褐色土 焼土を多量に含み、炭化物を少量含み、白色粒子を微量含む
- 3 褐色土 焼土、炭化物を多量含み、白色粒子を少量含む



第90表 第51号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	10.6	3.1		5.5	B, C, E, H	良好		橙	25	口縁-100 底部-80。口縁-5
2	椀	HS	12.1				B, E, H	良好		灰黄褐		
3	高台付椀	HS	11.7	4.5		6.3	B, E, I	普通		にぶい黄橙	90	
4	高台付椀	HS HS	11.4	4.8		5.7	B, E	普通		にぶい黄橙	100	
5	高台付椀	HS	11.7	4.7		5.6	B, E, I	普通		橙	100	
6	高台付椀	HS	11.5	4.7		4.9	B, I	普通		にぶい黄橙	20	
7	高台付椀	HS	13.9	6.0		5.9	B, C, E	良好		浅黄橙		
8	高台付皿	K	12.3	2.7		6.1	B, D	良好		灰白	90	
9	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
10	羽B II b	NS	20.2		2.3		B, E, G	良好		灰白	40	
11	高脚高台付大形鉢	HS				14.2	B, E, H	良好		橙	100	

以下が欠損している。11は、高台のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第51号竪穴式住居跡を中堀Ⅸ期に位置付けたい。

第52号住居跡（第122図）

G-10グリッドで確認した。周辺は、土壌や小穴が密集し、切り合いが激しく確認に手間取った。

住居跡の形状は、南東隅のやや張り出す不整形であった。規模は、長辺3.45m・短辺3.27m・深さ0.14mであった。

主軸方位は、N-5°-Eであった。

南壁の中央に円形の土壌を検出した。規模は、長径0.63m・短径0.56m・深さ0.2mであった。

遺構の切り合い関係は、第277号土壌より古く、第276・278より新しかった。

遺物は、土壌内から須恵器の坏(6)・高台付椀(9)が出土した。またこの土壌の西側から石製のはかりの

権(18)が出土した。

1から3は、土師器である。1・2は、坏AⅣである。3は、皿である。

4から6は、椀である。4は須恵器(NS)、5は須恵器(S)、6は須恵器(HS)である。7から12は、高台付椀である。8・9は、須恵器(NS)である。11・12は、須恵器(S)である。ほかは、須恵器(HS)である。12は、底部と高台が欠損している。

13は、須恵器(HS)の高脚高台付大形鉢である。13は、口縁部が欠損している。

14は、須恵器(NS)の皿である。15は、黒色土器の高台付椀である。16は、土錘である。17は、平瓦である。石製のはかりの権である。15は、口縁部破片である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第52号竪穴式住居跡を中堀Ⅸ期に位置付けたい。

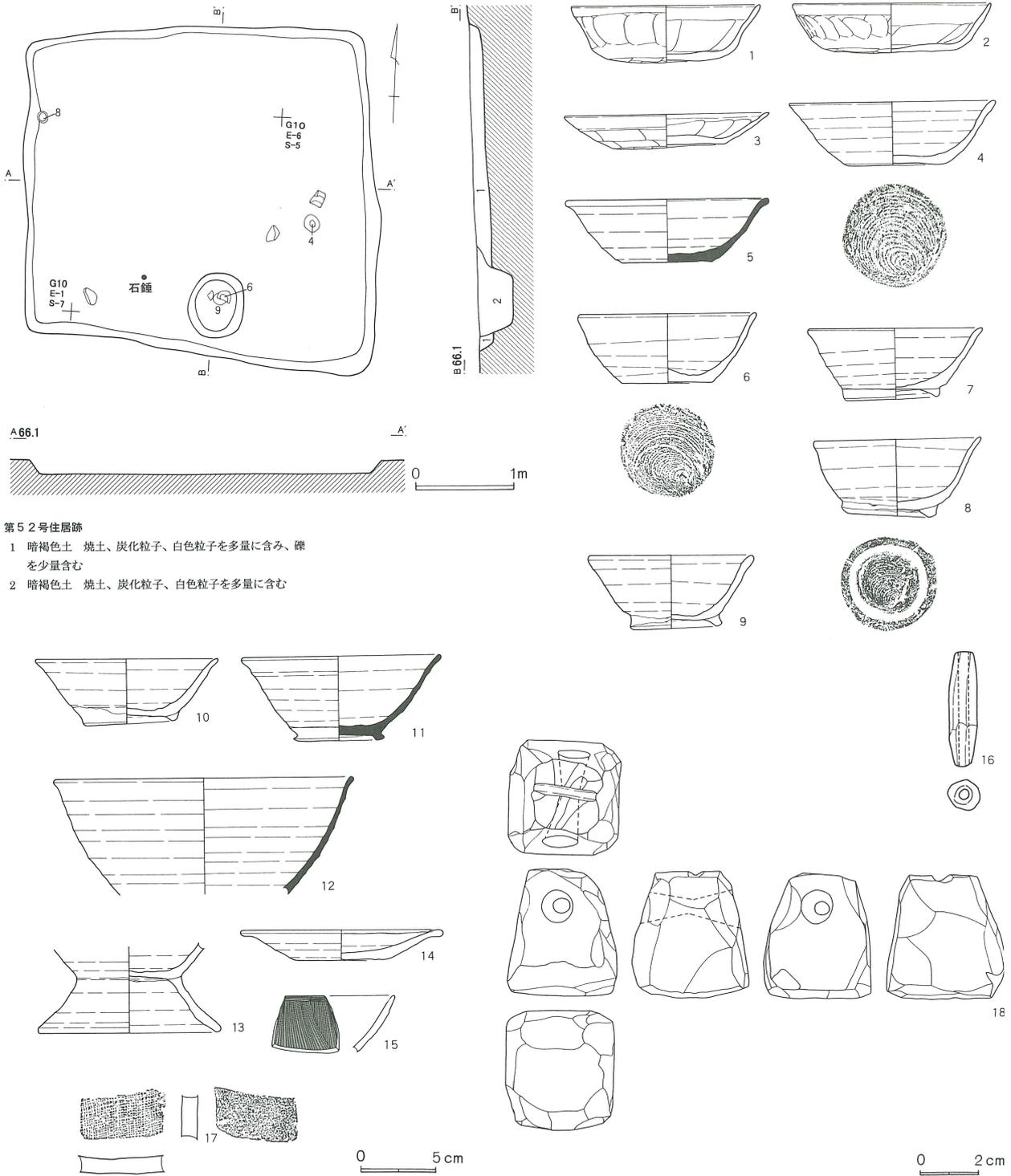
第91表 第52号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏AⅣ	H	12.4	3.8		7.4	B, D, E, H			淡橙		
2	坏AⅣ	H	12.9	3.3		8.2	C, D, E	普通		淡黄土	30	
3	皿	H	13.4	2.3		7.4	B, D, E, H	不良		淡橙	70	
4	椀	NS	13.4	4.1		6.4	B, E, I	普通		灰白	100	
5	椀	S	13.1	4.2		6.0	B	良好		灰	40	
6	椀	HS	11.5	4.6		6.0	B, E, I	良好		にぶい橙	90	
7	高台付椀	HS	11.3	4.8		6.0	B, C, E, H	良好		浅黄橙	70	
8	高台付椀	NS	10.9	5.2		5.5	B, E	普通		黄灰	95	
9	高台付椀	NS	10.7	4.9		5.7	B, E	良好		灰黄	90	
10	高台付椀	HS	11.9	4.4		5.8	B, E	良好		灰黄褐	60	
11	高台付椀	S	12.9	5.6		5.2	B, K	良好		灰	50	
12	高台付椀	S	19.5				B	良好		灰	30	土壌
13	高脚高台付大形鉢	HS				11.8	B, E	普通	R	外-橙。 内-灰黄	30	
14	皿	NS	13.1	2.0		6.0	B, C, F, H	良好		灰白	20	
15	高台付椀	黒色					B, C, E	良好		外-橙。 内-黒		

第92表 第52号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
16	橙	100	3.8	1.1	0.3	3.0	C3	Ia	637	

第122図 第52号住居跡・出土遺物



第52号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土、炭化粒子、白色粒子を多量に含み、礫を少量含む
- 2 暗褐色土 焼土、炭化粒子、白色粒子を多量に含む

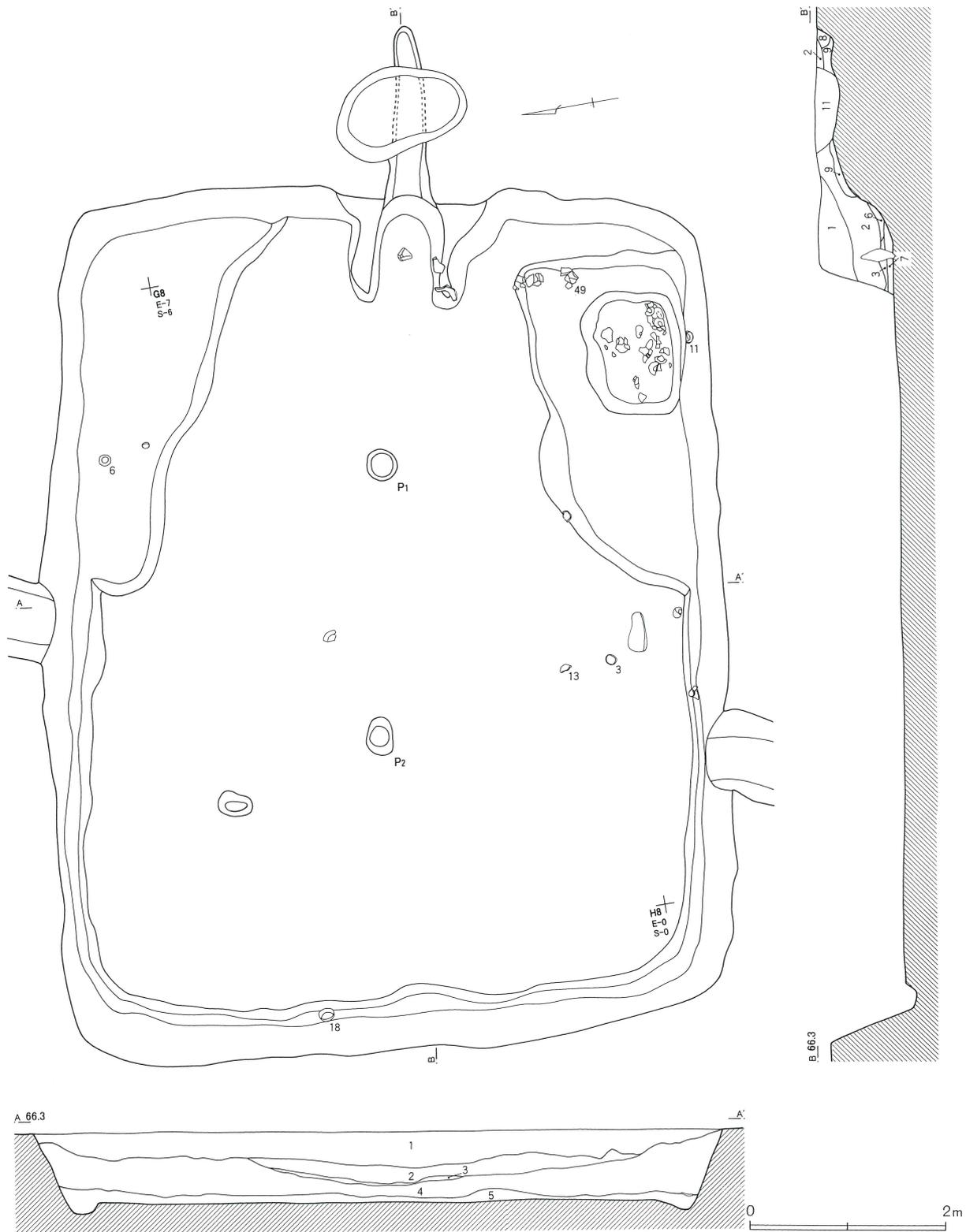
第93表 第52号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
17	平瓦	中間	刷り消し	布	-

第53号住居跡（第123図・第124図・第125図・第126図）

G・H-7・8グリッドで確認した。周辺は土壇・溝・小穴などの遺構が密集するが、上面に焼土、炭化

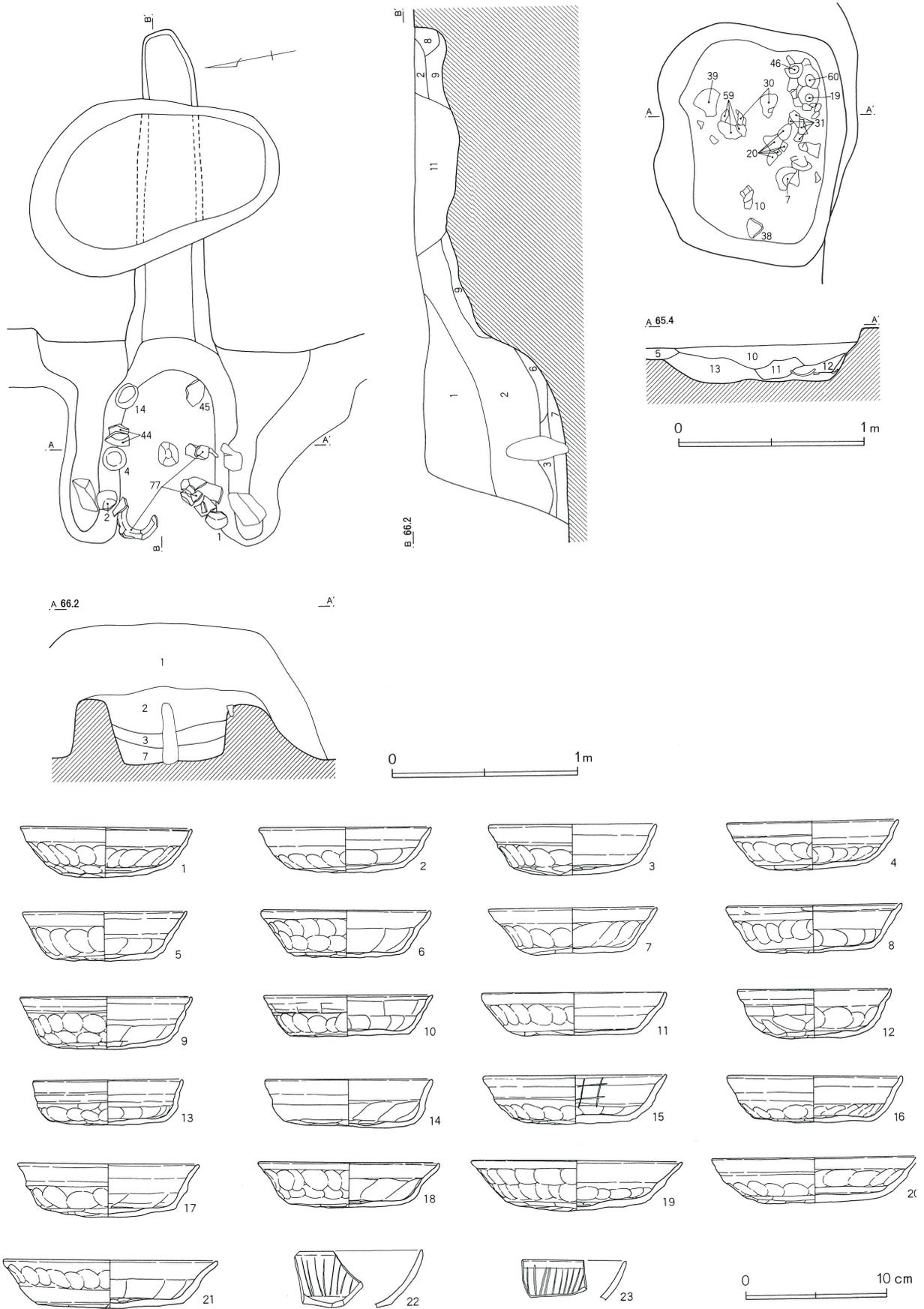
第123図 第53号住居跡



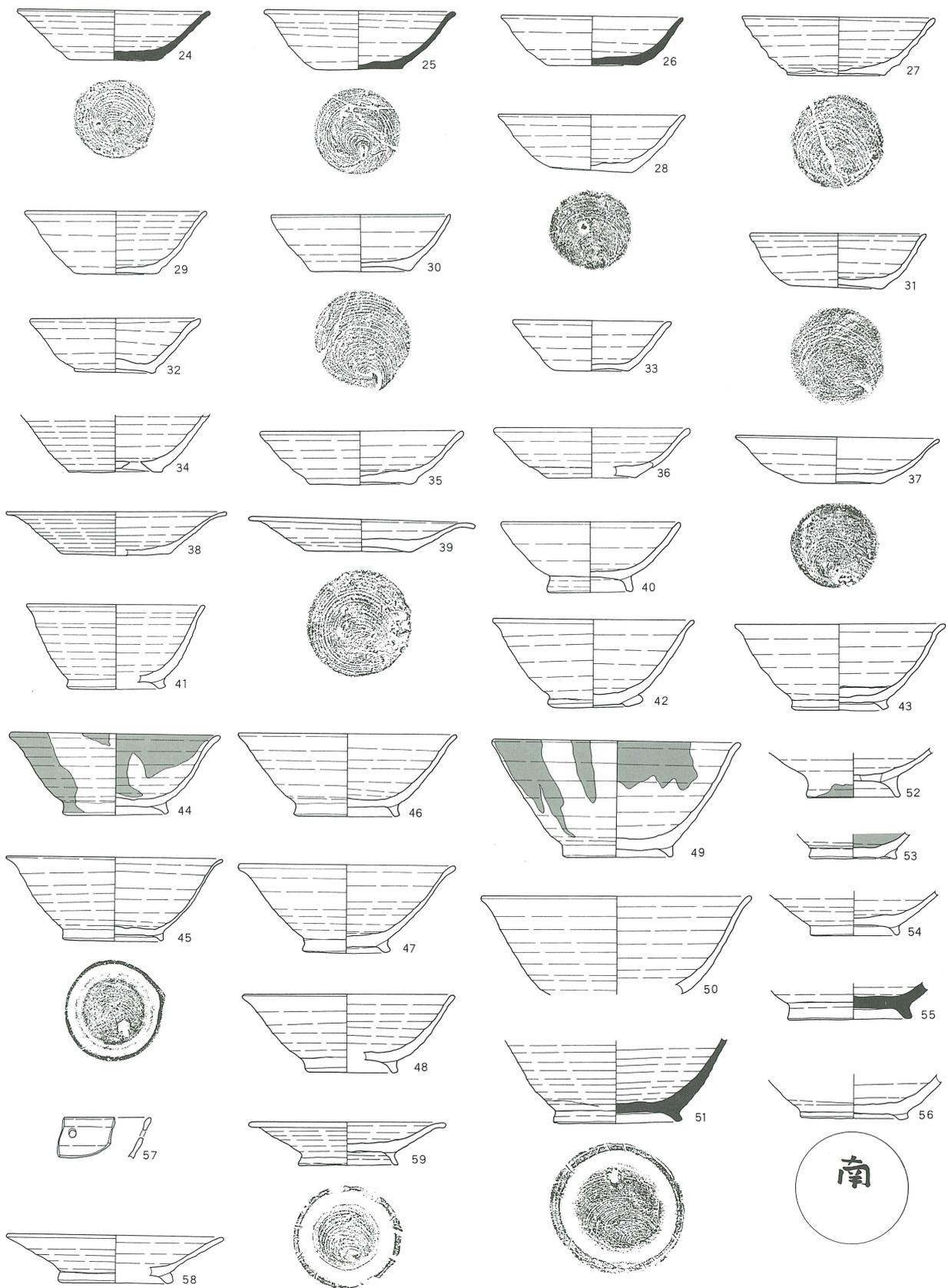
第53号住居跡

- | | | |
|---|---|--|
| <p>1 暗褐色土 焼土ブロック、炭化物を多量に含み、白色粒子、小礫を少量含む 粘性あり</p> <p>2 暗褐色土 焼土、白色粒子、小礫を微量含む 遺物を多量に含む 粘性あり</p> <p>3 暗褐色土 炭化物を多量に含む</p> <p>4 黒褐色土 焼土ブロック、白色粒子を少量含み、礫を多</p> | <p>量に含む 粘性あり</p> <p>5 褐色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり</p> <p>6 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量に含み、炭化粒子を微量含む 粘性あり</p> <p>7 褐色土 炭を多量に含み、黄白色粘土を少量含む 粘性あり</p> | <p>8 暗黄褐色土 炭化粒子を微量含む</p> <p>9 暗黄褐色土 白色粒子を少量含む 粘性あり</p> <p>10 暗灰褐色土 焼土、土器片を含む 粘性あり</p> <p>11 暗灰褐色土 焼土を微量含み、河原石を含む 粘性あり</p> <p>12 暗灰褐色土 焼土を微量含む 粘性あり</p> <p>13 暗黄褐色土 砂利層</p> |
|---|---|--|

第124図 第53号住居跡カマド・貯蔵穴・出土遺物（1）

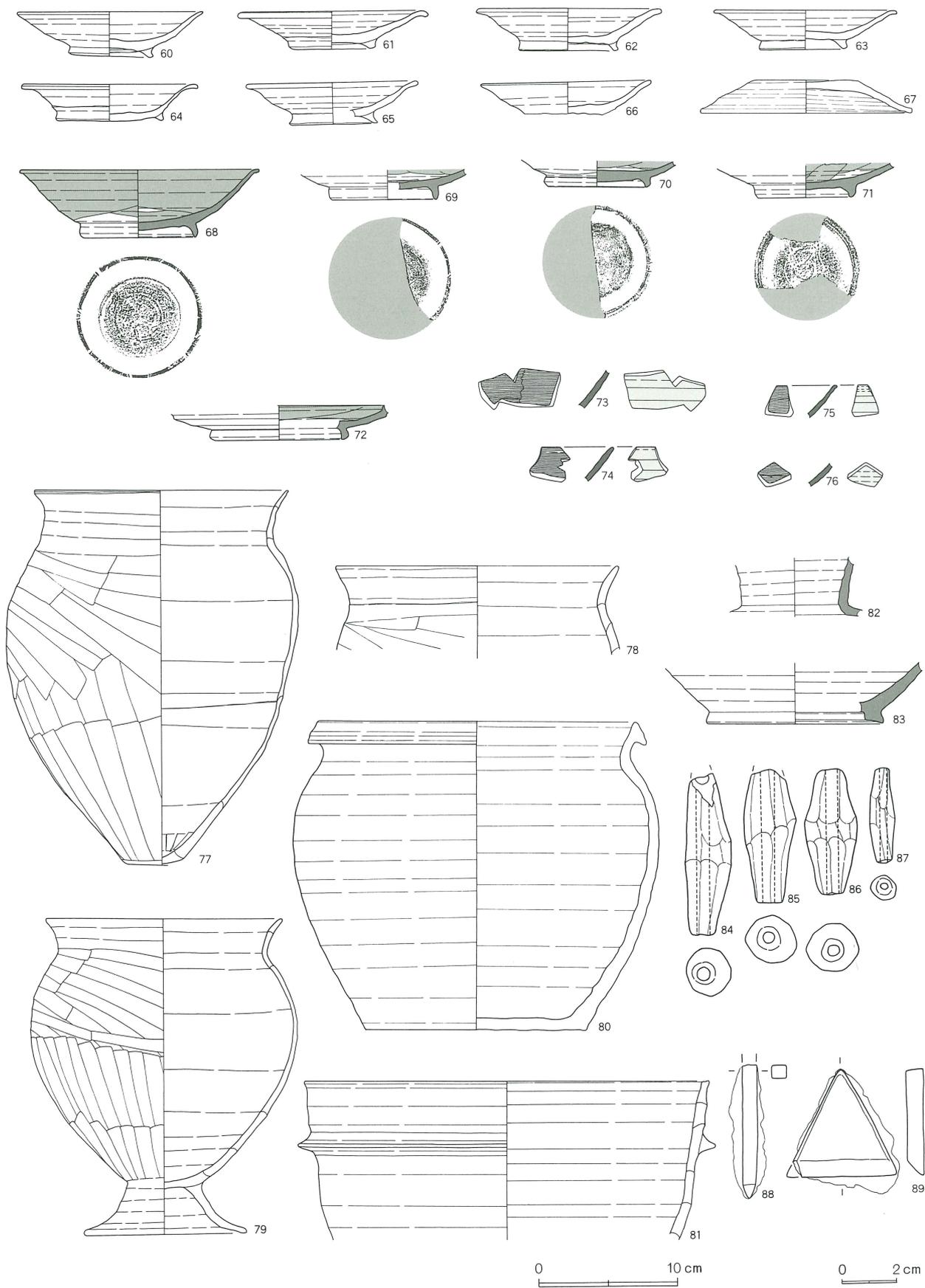


第125図 第53号住居跡出土遺物（2）



0 10 cm

第126図 第53号住居跡出土遺物(3)



物を多量に含む暗褐色の覆土であったことから比較的容易に確認できた。

住居跡の形状は、長方形で規模は長辺8.83m・短辺6.75m・深さ0.90mと、調査区内では最大の住居跡であった。幅25cmの壁溝を、住居西半分から検出した。また北東隅と貯蔵穴のある南東隅には、幅1.5m・深さ0.2mほど壁溝が広がっていた。

住居跡の中央には、長径方向に並んで二基の小穴を検出した。P1は、径0.22m・深さ0.51mの円形、P2は、長径0.38m・深さ0.42mの楕円形であった。柱穴とすれば住居あとの規模に比べて非常に小形である。しかし、配置や確認位置から柱穴と考えたい。

主軸方位は、N-98°-Eであった。

カマドは、東壁のほぼ中央で検出した。左右の袖は

第94表 第53号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A IV	H	11.9	3.6		6.1	B, E	不 良	黄 褐	40	カマド
2	坏	A IV	H	12.0	3.2		7.9	B, D, E	普 通	黄 褐	50	カマド
3	坏	A IV	H	11.8	3.6		8.9	B, E, H	普 通	暗 黄 褐	100	
4	坏	A IV	H	12.0	3.4		6.0	B, E	普 通	淡 橙	100	
5	坏	A IV	H	11.6	3.6		7.0	B, E, H	普 通	淡 橙	50	
6	坏	A IV	H	11.9	3.4		7.6	B, D, E	良 好	淡 橙	90	
7	坏	A IV	H	11.8	3.3		6.6	B, D, E	普 通	淡 黄 橙	100	貯蔵穴
8	坏	A IV	H	12.3	3.4		8.2	B, D, E	普 通	淡 黄 橙	90	
9	坏	A IV	H	12.0	3.6		7.0	B, E, H	普 通	淡 黄 褐	50	
10	坏	A IV	H	11.8	2.9		8.3	B, D, E	普 通	淡 黄 橙	40	貯蔵穴
11	坏	A IV	H	12.8	3.1		9.0	B, E, G, H		淡 橙 褐		
12	坏	A I	H	10.7	3.4		5.8	B, E	普 通	淡 黄 褐	30	カマド
13	坏	A IV	H	10.5	3.2		8.0	B, E	普 通	黄 橙	50	
14	坏	A IV	H	11.7	3.5		7.0	B, E, H	普 通	黄 橙	100	
15	坏	A IV	H	12.8	3.5		7.3	B, E	良 好	茶 黄	80	ヘラ書き「井」
16	坏	A IV	H	12.2	3.3		8.1	B, E, H	普 通	淡 黄 褐	90	
17	坏	A IV	H	12.7	3.8		9.0	B, E, H	普 通	黄 褐	70	
18	坏	A IV	H	12.7	3.2		7.7	B, D, E, H	普 通	黄 橙	100	
19	皿	I	H	14.8	3.6		7.5	B, D, E, H	普 通	暗 褐	90	
20	皿	I	H	14.5	3.2		8.6	B, E, H	普 通	黄 褐	70	貯蔵穴
21	皿	I	H	15.0	3.4		10.0	B, D, E	普 通	淡 橙	60	フク土
22	坏(暗文)		H				B, C, D		不 良	明 橙	10	破片
23	坏(暗文)		H				B, D, E		普 通	明 橙	10	破片
24	椀	S		13.0	3.5		6.0	B, K	良 好	青 灰 褐	25	
25	椀	S		12.9	4.1		6.1	B	良 好	灰	70	
26	椀	S		12.2	3.3		6.1	B, E, I	良 好	青 灰	70	
27	椀	NS		13.0	4.1		6.5	B, E, I	普 通	灰 白	80	フク土
28	椀	NS		12.8	4.0		5.5	B, E, I	普 通	灰 白	95	
29	椀	NS		12.4	4.3		5.4	B, H	良 好	灰 白	25	
30	椀	NS		12.2	3.9		6.7	B, E, H	良 好	灰 白	70	
31	椀	NS		11.9	3.8		6.2	B, E, I	良 好	灰	75	貯蔵穴
32	椀	NS		11.5	3.8		5.4	B, E, I	普 通	灰 白	90	
33	椀	HS		10.8	3.4		5.0	B, E, I	普 通	浅 黄	20	
34	椀	NS					6.3	B, H	良 好	灰 白	70	
35	椀	NS		13.8	3.6		7.0	B, E	良 好	灰 白	40	
36	椀	NS		13.2	3.5		5.9	B, E, H, K	良 好	外-黒。内-灰	25	
37	皿	NS		13.8	3.2		5.4	B, H	良 好	灰 白	60	
38	皿	NS		15.1	3.0		7.1	B, H, K	良 好	青 灰 褐	40	貯穴
39	皿	NS		15.5	2.2		7.1	B, C, H	良 好	灰	60	貯穴
40	高台付椀	NS		12.2	4.9		5.7	B, H	良 好	灰 白	25	底部-100

第95表 第53号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
41	高台付椀	NS	12.1	5.8		6.2	B, D, E	良好		灰白	20	
42	高台付椀	HS	13.8	6.1		5.1	B, H	良好		明灰褐	80	
43	高台付大椀	NS	14.1	5.9		6.1	B, E	良好		灰白	50	
44	高台付大椀	HS	14.3	5.6		6.8	B, I	良好		にぶい橙	90	
45	高台付大椀	NS	14.8	5.8		6.6	B, E, I	普通		灰。一部- 灰白	95	カマド
46	高台付大椀	HS	14.9	5.7		6.7	B, E, I	良好		灰白	60	貯蔵穴
47	高台付椀	NS	14.8	6.1		5.5	B, D, E	良好		灰白	25	
48	高台付椀	NS	14.3	5.4		5.9	B, H, K	良好		灰白	50	
49	高台付大椀	NS	17.0	8.1		7.2	B, E, I	普通			80	貯蔵穴
50	高台付大椀	NS	18.2				B, C, G	良好		灰白	25	貯蔵穴
51	高台付大椀	S				8.2	B, G	良好		灰	100	
52	高台付椀	NS				6.3	B, E, H	良好		灰褐	100	底部のみ
53	高台付椀	NS				5.8	B, E, G, I	普通		にぶい橙	20	
54	高台付椀	NS				5.9	B, E, H	良好		灰白	100	底部
55	高台付椀	S				8.3	B, E	良好		灰	100	底部
56	高台付椀	HS				6.9	B, E, H	良好	L	浅黄橙	60	墨書「南」
57	坏	NS					B, E, H	不良		灰	10	破片
58	高台付皿	NS	14.7	3.3		7.3	B, H	不良		青灰褐	20	
59	高台付皿	NS	13.5	3.5		6.6	B, C, H	良好		灰	50	
60	高台付皿	NS	13.0	3.3		5.4	A, B, E, H, I	良好		黒	100	貯穴
61	高台付皿	NS	13.3	2.7		5.6	B, E, H	良好		外-灰。 内-灰褐		底部-100。口縁-15
62	高台付皿	HS	12.9	3.0		6.9	B, E	良好		灰褐	25	
63	高台付皿	NS	12.9	2.9		6.1	B, E, H	良好		灰白		下層
64	高台付皿	NS	12.3	2.7		7.5	B, E, H	良好		灰褐		
65	高台付皿	HS	12.0	3.0		6.1	E, I	普通		黄灰	20	
66	高台付皿	NS	12.1				B, D, H	良好		灰白	100	
67	蓋	NS	14.9	2.4		7.2	B, C, E, G, H, K	良好		淡黄褐	50	
68	高台付椀	K	16.9	4.9		7.9	B	良好		暗灰緑	30	
69	高台付皿	K				7.5	B, D	良好		淡灰	10	
70	高台付皿	K				7.0	D	良好		淡灰	10	
71	高台付椀	K				6.5	B	良好		淡灰	20	
72	高台付段皿	K				9.1	B, D	良好		淡灰	10	
73	高台付椀	M					B, D	良好		淡緑	5	
74	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
75	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
76	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
77	甕A II c	H	18.2	26.8		3.9	B, E	良好		明褐	80	
78	甕A II c	H	20.2				B, E, H	良好		明褐	20	
79	台付甕	H	16.8	22.8		11.3	B, E, H	良好		褐	70	
80	鉢	NS	22.5	22.1		15.8	B, H	良好		灰白	70	
81	甗B I	NS	28.9		4.7		B, E, G	良好		黒	10	
82	長頸壺	K					B, D	良好		暗黒褐	5	
83	長頸壺	K				12.5	D	良好		暗灰	5	

第96表 第53号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置
84	浅黄	95		1.7	0.5	12.8	C 1	I b	151	
85	橙	85		1.9	0.4	11.9	C 1	II a	152	
86	浅黄	100	4.6	1.9	0.5	11.6	C 1	I a	153	
87	黄橙	100	3.4	0.9	0.2	2.3	C 2	I b	399	

地山を掘り残して造られ、住居跡内に1.05mほど伸びていた。両袖の先端には、川原石を補強材として使用していた。燃焼部の全体が、竪穴内に造られていた。燃焼部の掘り込みはなく、燃焼部の中央からは、川原石を使用した支脚を検出したことから、一つ掛けのカマドと推定した。

燃焼部から煙道部へは、緩く大きく立ち上がっていた。煙道部は、小穴によりほとんど破壊されていたが、確認しただけでも1.6mにおよぶ。長大な煙道であった。

貯蔵穴は、カマド右側の南東付近で検出した。形状は、不整長方形で、規模は、長径1.24m・短径0.98m・深さ0.17mであった。

遺構の切り合い関係は、第54号住居跡よりも古く、第11号溝よりも新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏(1・2・4・14)・須恵器の高台付椀(44・45)・土師器の甕(77)が出土し、貯蔵穴内から土師器の坏(7・10・19・20)・須恵器の坏(30・31)・皿(38・39)・高台付椀(46)・高台付皿(59・60)など供膳具が多量に出土した。

1から21は、土師器である。12は、坏AⅠである。19から21は、皿である。ほかは、坏AⅣである。22・23は、暗文土器である。22・23は、口縁部破片である。

24から36までは、椀である。33は須恵器(HS)、ほかは、須恵器(NS)である。37から39は、須恵器(HS)の皿である。41から57までが、高台付椀である。42・44・46・56は須恵器(HS)、51・55は須恵器(S)である。56は、底部に「南」と墨書されている。58から66までが、高台付皿である。62・65が、須恵器(HS)である。67は、蓋である。34は口縁部と底部、36・38・41・48・58は底部、50は底部と高台、51から56は口縁部、66は高台が欠損している。57は、口縁部破片である。44・49は口縁部から体部にかけて、52は外面高台に黒色の付着物が確認できる。44・49は、油煙の痕跡と考えられる。53は、内面のみ黒色処理が施されている。

68から72は、灰釉陶器である。68・71は高台付椀、

69・70は、高台付皿である。72は、段皿である。69・72は口縁部と底部、70・71は口縁部が欠損している。

73から76は、緑釉陶器の高台付椀である。73・76は体部破片、74・75は口縁部破片である。

77から78は、土師器の甕である。80は、須恵器(NS)の鉢である。81は、須恵器(NS)の甑である。82・83は、灰釉陶器の長頸壺である。78は胴部上位以下、81は胴部中位以下が欠損している。82は頸部のみ、83は底部のみである。

84から87は、土錘である。

88・89は、鉄製品である。88は釘の破片、89は三角形の板状鉄製品である。楔の一種かも知れない。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第53号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第54号住居跡(第127図・第128図)

G-8グリッドで確認した。第53号住居跡の埋没後、その覆土中に構築された。第53号住居跡の覆土第1層を除去中に、第54号住居跡のカマドを確認し、カマドを中心として、平面形態の確認を行った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.93m・短辺2.08m・深さ0.10mであった。

主軸方位は、N-98°-Eであった。

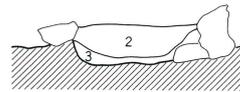
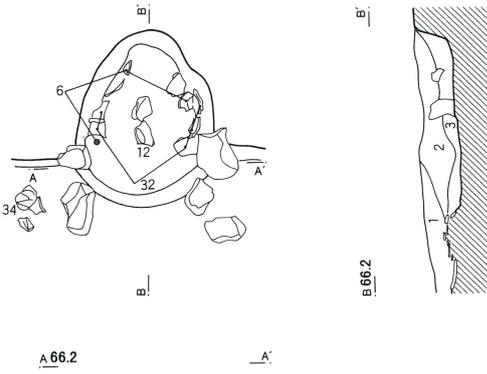
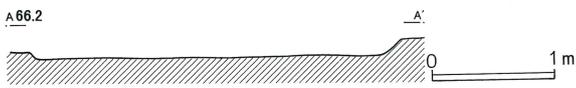
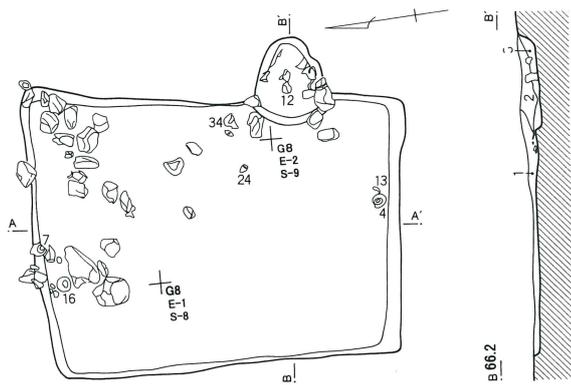
カマドは、東壁の南東隅より検出した。袖は、短く造り付けられていた。両袖先端や焚き口部の両脇に補強材として川原石が使用されていた。燃焼部には、浅い掘り込みがあった。燃焼部中央に川原石の支脚を検出したことから、一つ掛けカマドと推定される。

遺構の切り合い関係は、第53号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀(6・12)・羽釜(32)、焚き口部の周辺から灰釉陶器の高台付椀(24)・羽釜(34)が出土した。また北壁のやや西寄りから須恵器の高台付椀(7)・高脚高台付椀(16)、南壁中央から須恵器の坏(4)・高台付椀(13)が出土した。

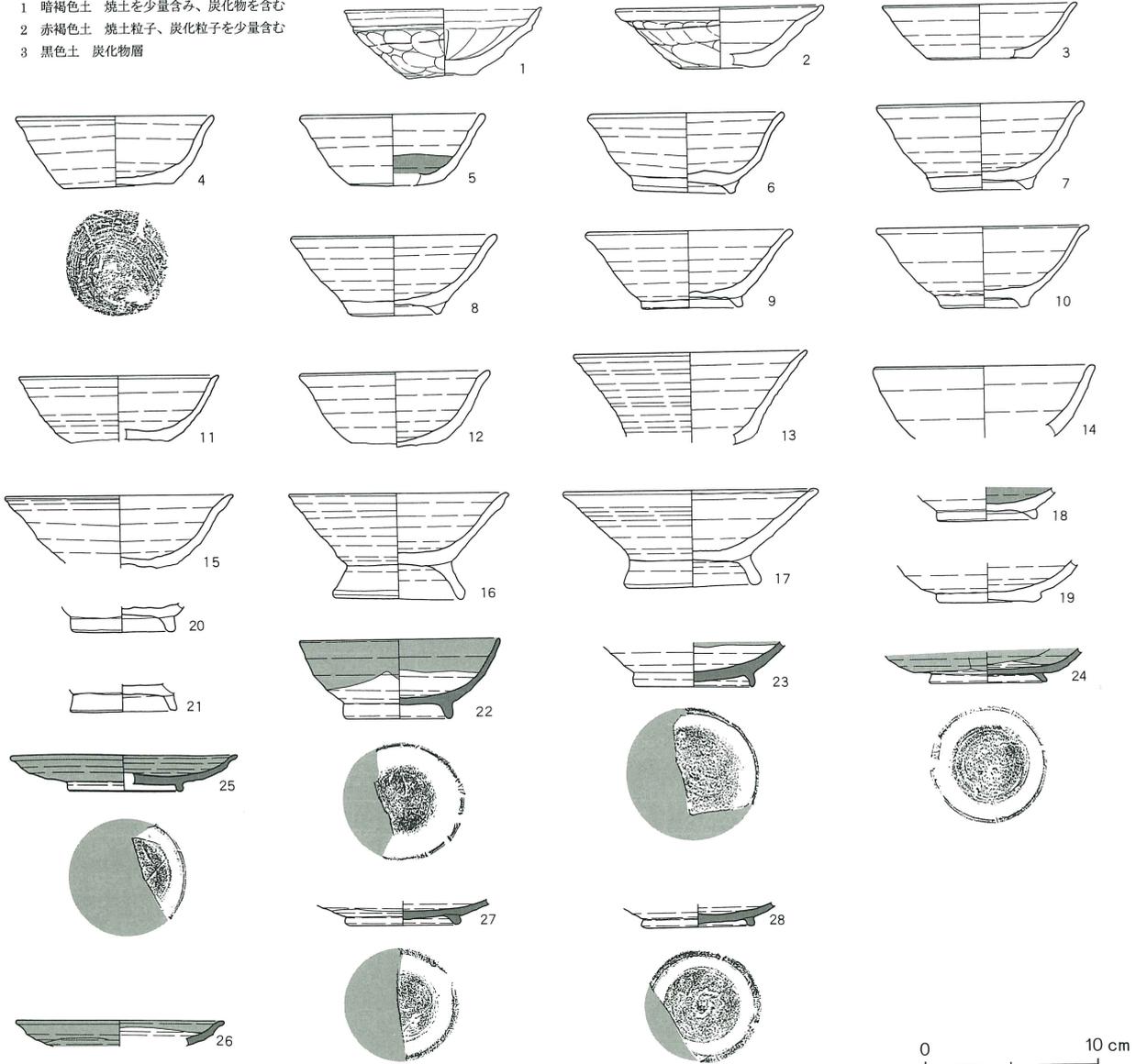
1・2は、土師器である。1は坏BⅤ、2は坏BⅥ

第127图 第54号住居跡・出土遺物(1)

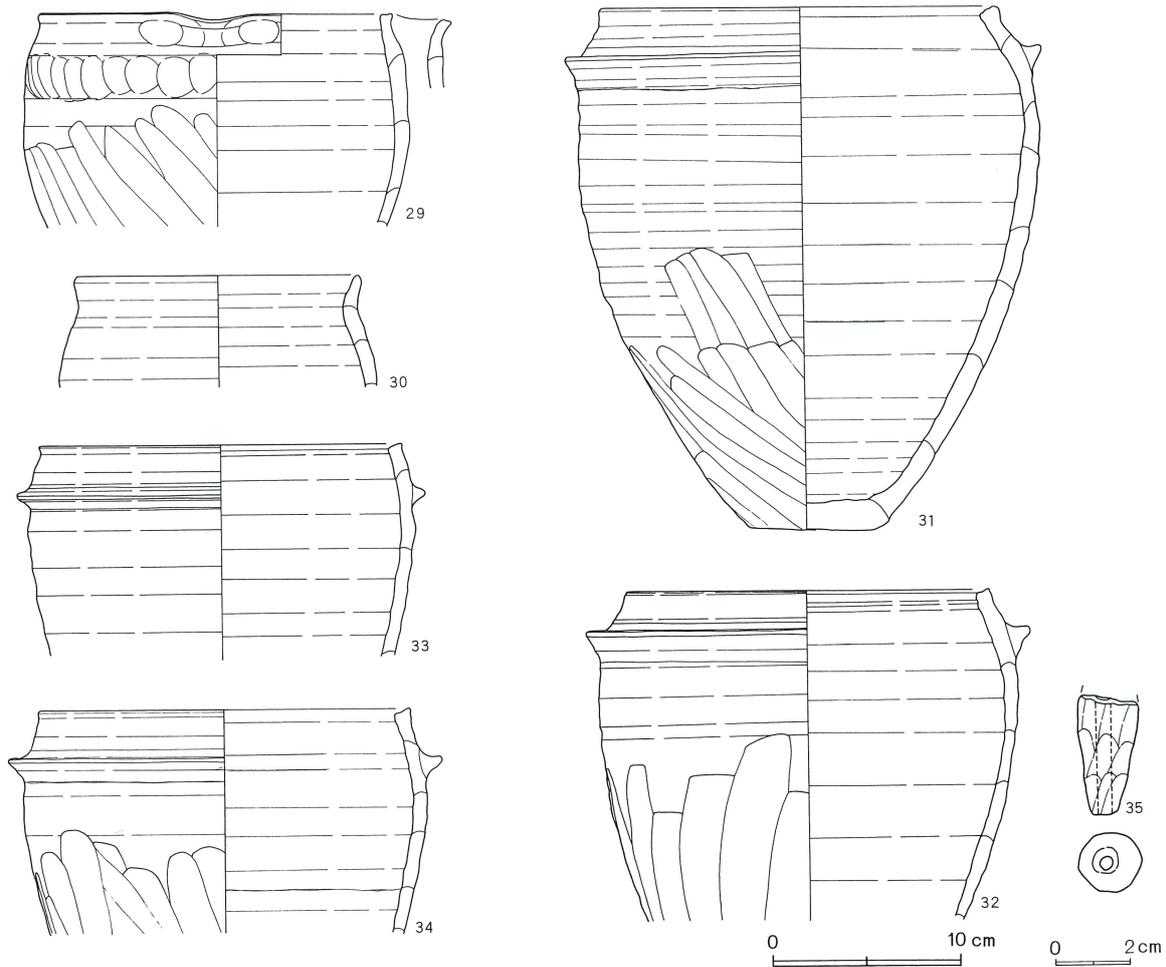


第54号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土を少量含み、炭化物を含む
- 2 赤褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む
- 3 黒色土 炭化物層



第128図 第54号住居跡出土遺物（2）



である。2は、底部が欠損している。

3から5は、碗である。5は須恵器（NS）、他は、須恵器（HS）である。6から15と18から21は、高台付碗である。16・17は、高脚高台付碗である。9・11・16・20は、須恵器（NS）である。ほかは、須恵器（HS）である。3は底部、11・13・14は底部と高台、12・15は高台、18から21は口縁部が欠損している。5は、内面体部に黒色の付着物が確認できる。

22から28は、灰釉陶器である。22から24は、高台付碗、25から28は、高台付皿である。23・24・27・28は口縁部、25は底部、26は底部と高台が欠損している。

29は、須恵器（HS）の片口鉢である。30は、須恵器（HS）の甕である。31から34は、須恵器（NS）の羽釜である。29・33・34は胴部中位以下、30は胴部上位以下、32は胴部下位以下が欠損している。

54は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第54号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第55号住居跡（第129図・第130図）

H-8グリッドで確認した。周辺は、小穴・土壙など比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.68m・短辺2.22m・深さ0.43mであった。北東隅に小穴を検出した。

主軸方位は、N-87°-Eであった。

カマドは、北壁のやや東寄りと東壁の南東隅寄りから二基を検出した。覆土の堆積状況からは、2号カマドに使用中に1号カマドは廃棄されていることから、1号カマドから2号カマドへ付け替えられたと推定し

第 97 表 第 54 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B V	H	11.3	4.0		3.9	B, E, H	普通		淡 橙	90	
2	坏 B VI	H	11.8	3.5		4.9	B, D, E	普通		淡 橙	30	
3	椀	HS	11.0	3.2		5.6	B, E, H	良好		暗 灰 褐	20	
4	椀	HS	11.2	4.2		6.4	B, E, H	良好		外-赤褐。 内-明褐	100	
5	椀	NS	10.2	4.1		4.1	B, E	良好		灰 白	25	
6	高台付椀	HS	11.0	4.7		5.4	B, E, K	良好		淡 黄 褐	80	カマド
7	高台付椀	HS	11.8	5.0		5.3	B, E, H	良好		外-灰白。 内-黒	50	
8	高台付椀	HS	11.6	4.6		4.8	A, B, E, H	良好		明 褐	25	
9	高台付椀	NS	11.6	4.5		5.5	B, E	良好		灰 白		
10	高台付椀	HS	12.0	4.7		4.3	B, E, G, I	普通		浅 黄	30	
11	高台付椀	NS	11.4				B, E, H	良好		灰 褐	25	
12	高台付椀	HS	10.8				B, E, H	良好		内-淡橙。 外-淡赤褐	25	
13	高台付椀	HS	13.3				C, E, I	良好		明 褐	20	
14	高台付椀	HS	12.5				B, E, K	良好		淡 橙	20	
15	高台付椀	HS	13.0				B, E, H	良好		明 褐	60	
16	高脚高台付椀	NS	12.4	6.3		7.3	B, E, H	良好		灰 白	100	
17	高脚高台付椀	HS	14.6	5.5		7.5	B, E	良好		明 赤 褐		
18	高台付椀	黒色				5.6	B, C, H	良好		淡 橙 (内-黒)	50	
19	高台付椀	HS				5.4	B, C, H	良好		明 赤 褐	25	
20	高台付椀	NS				5.4	C, E, H	良好		灰 白		底部-100
21	高台付椀	HS				6.0	B, C, H	良好		明 赤 褐		底部-100
22	高台付椀	K	11.3	4.6		5.9	B	良好		淡 灰 褐	30	
23	高台付椀	K				6.6	B, D	良好		淡 灰 褐	20	
24	高台付椀	K				6.5		良好		灰 白	20	
25	高台付皿	K	12.7	2.1		6.2	B, D	良好		淡 灰 白	40	
26	高台付皿	K	11.9					良好		灰 白	10	
27	高台付皿	K				6.0	B, D	良好		暗 灰	10	
28	高台付皿	K				6.0	B	良好		明 灰	30	
29	片口鉢	HS	18.6				B, E, H	良好		褐	20	
30	口口甕	HS	14.8				B, E	良好		外-浅黄橙。 内-灰白	20	
31	羽A II b イ	NS	20.7	27.6	2.3	6.3	A, B, E, H	良好		外-灰褐。 内-黒	80	
32	羽A II a イ	NS	19.2		2.2		B, E, H	良好		灰 白	50	カマド
33	羽A II a 口	NS	19.2		2.6		B, D, E, H	良好		淡 橙	20	
34	羽A II a イ	NS	19.4		2.7		B, D, E, H	良好		灰 白	25	

第 98 表 第 54 号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
35	橙	50		1.7	0.3	6.4	C 1	III a	154	

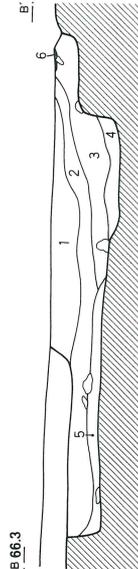
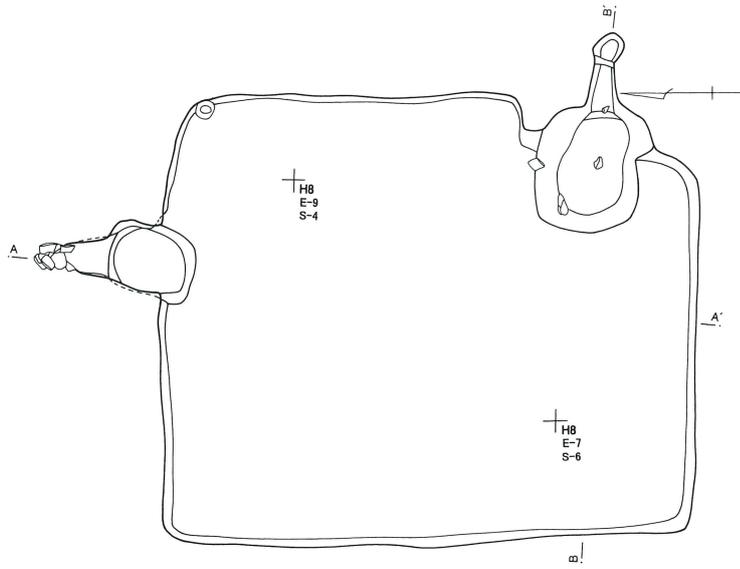
た。

1号カマドの袖は、破壊され検出できなかった。焚き口部から燃焼部にかけては楕円形の極く浅い窪みが見られ、燃焼部からわずかに段をもって煙道部へ移行していた。煙道部から、補強材として使用された土師

器の甕2点(7・8)が出土した。

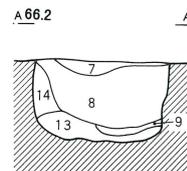
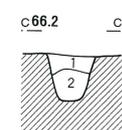
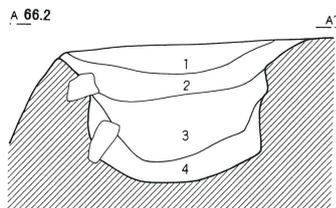
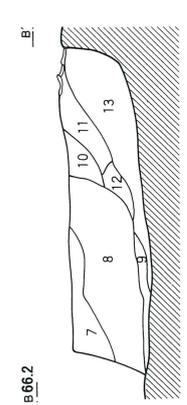
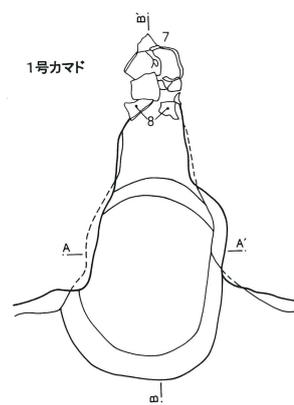
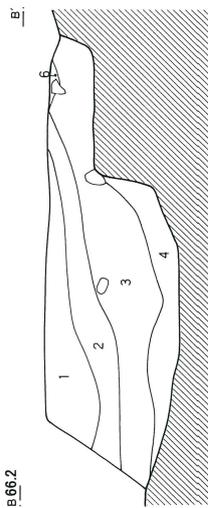
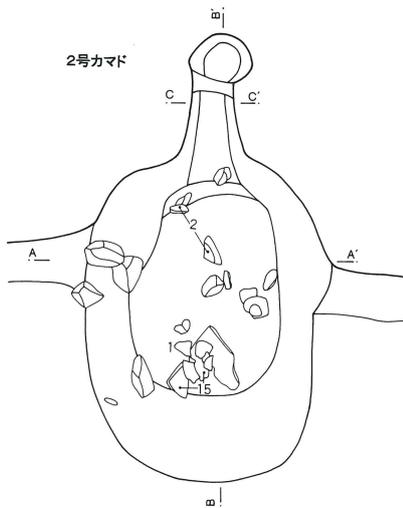
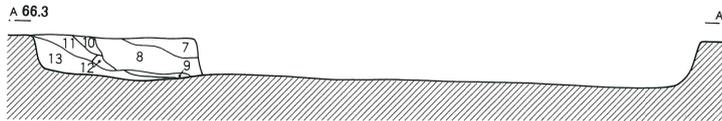
2号カマドの左袖の相当部は、住居跡の壁を内側に曲げるように構築していた。「片袖型」のカマドであった。左袖には、補強材として川原石を使用していた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形の浅い

第129図 第55号住居跡



第55号住居跡

- 1 灰褐色土 焼土を微量含み、砂礫を少量含む
- 2 灰褐色土 焼土を微量含み、大形礫を多量に含む
- 3 暗灰褐色土 炭化粒子を多量に含み、砂利を少量含む粘性あり 遺物を多量に混入する
- 4 暗茶褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、炭化物を多量に含み、砂利を少量含む 粘性あり
- 5 暗茶褐色土 焼土、炭化物を微量含み、砂礫を少量含む 粘性あり (袖部構築土)
- 6 暗茶褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを多量に含む 全体に被熱している (天井部)
- 7 暗黄褐色土 焼土、炭を少量含む 粘性あり
- 8 暗黄褐色土 焼土を多量に含む 粘性あり
- 9 暗黄褐色土 焼土を多量含み、炭を少量含む 粘性あり
- 10 暗黄褐色土 焼土を微量含む 粘性あり
- 11 暗黄褐色土 焼土を少量含む 粘性あり
- 12 暗赤褐色土 焼土ブロック主体 暗褐色土を少量含む 粘性あり
- 13 暗褐色土 焼土を多量に含み、炭を少量含む 粘性あり

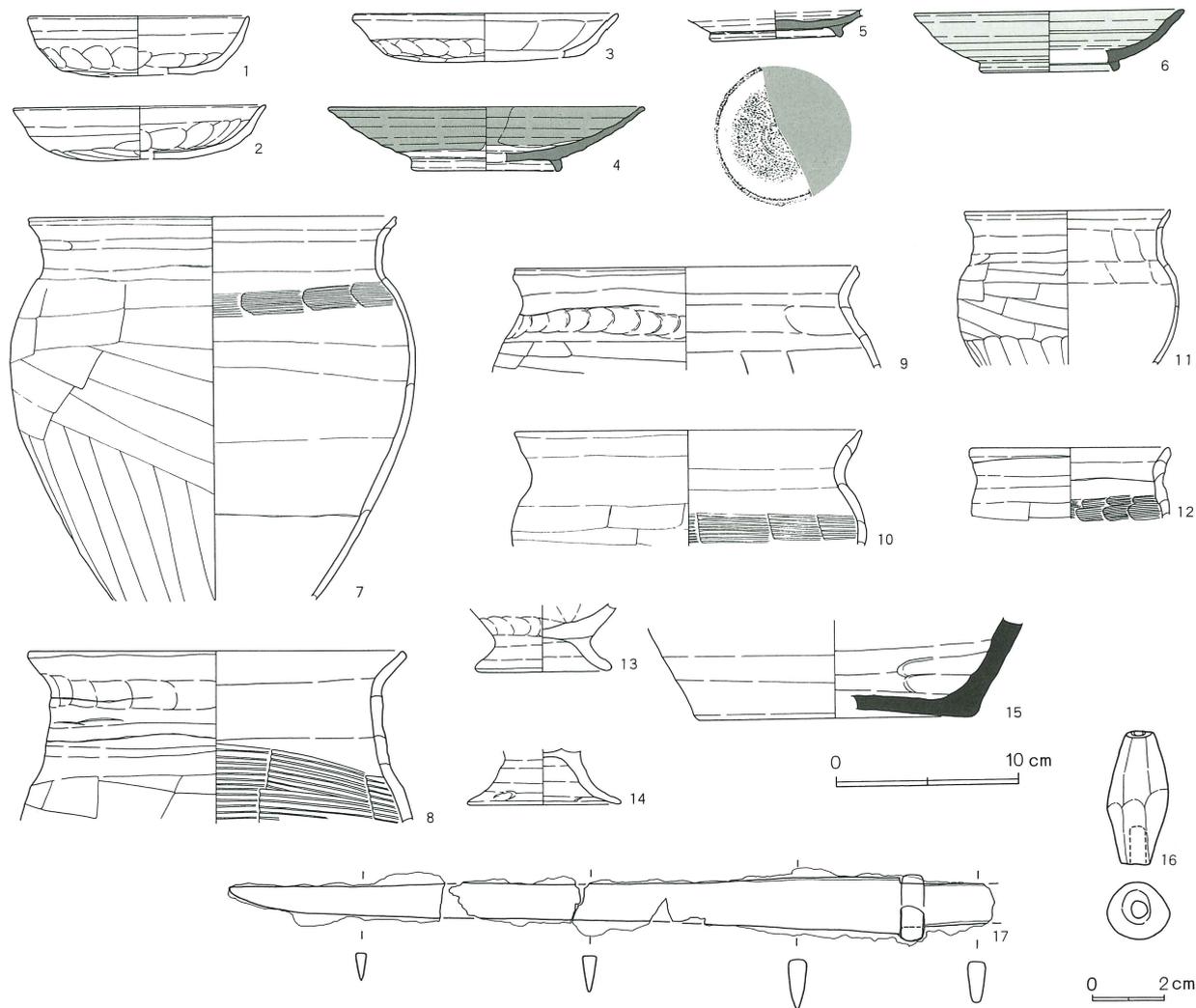


掘り込みがあり、急な段をもって燃焼部から煙道部へ移行していた。煙道部は、幅0.18m・長さ0.47mと細く短かった。煙り出し部は、径0.28mの小穴状であった。

遺構の切り合い関係は、第56号住居跡より古かった。遺物は、2号カマド内から土師器の坏(1・2)・須恵器の壺底部(15)が出土した。

1は、土師器の坏AIVである。2・3は、土師器の

第130図 第55号住居跡出土遺物



第99表 第55号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A IV	H	11.9	3.3	6.1	B, D, E	不良	良好	こげ茶	20	
2	皿		H	13.7	2.9	5.1	B, D, E	不良	良好	暗橙	50	
3	皿		H	14.3			B, D, E	良好	良好	淡橙	20	2号カマド
4	高台付皿	K		17.2	3.5	7.8	B, D	良好	良好	灰褐	30	
5	高台付皿	K				6.9	B, D	良好	良好	暗灰	20	
6	高台付皿	M		14.5	3.4	7.0	B	良好	良好	暗灰	30	
7	甕	B III c	H	20.0			B, C, E, H	良好	良好	褐	30	2号カマド
8	甕	B II a	H	20.4			B, E, H	良好	良好	浅黄橙	40	2号カマド
9	甕	B III C	H	18.6			B, E	良好	良好	橙	20	
10	甕	A III d	H	18.9			B, D, E, H	良好	良好	淡橙	10	2号カマド
11	台付甕		H	21.2			B, E	良好	良好	橙	25	2号カマド
12	台付甕		H	10.8			B, E, H	良好	良好	外-淡橙。 内-褐。	70	2号カマド
13	台付甕脚		H			7.0	B, E, H	良好	良好	外-橙。 内-黒。	100	
14	台付甕脚		H			8.0	B, E, H	良好	良好	橙	100	
15	甕	S				14.5	B, G, K	良好	良好	明暗灰	60	2号カマド

第 100 表 第 55 号住居跡出土土錘観察表

番号	色 調	残存率	長 さ	径	穴 径	重さ(g)	型 式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
16	橙	100	3.7	1.8	0.5	8.4	C 1	I a	155	

皿である。1 から 3 は底部が欠損している。

4 から 6 は、灰釉陶器の高台付皿である。4 ・ 6 は底部、5 は口縁部が欠損している。

7 から 14 は、土師器の甕である。15 は、須恵器の甕である。7 は底部、8 は胴部中位以下、9 ・ 10 ・ 12 は胴部上位以下、11 は胴部下位以下、15 は胴部下位以上と底部が欠損している。13 ・ 14 は、脚部のみである。

16 は、土錘である。

17 は、鉄製の刀子である。茎部を欠く。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第 55 号竪穴式住居跡を中堀 V 期に位置付けたい。

第 56 号住居跡 (第 131 図)

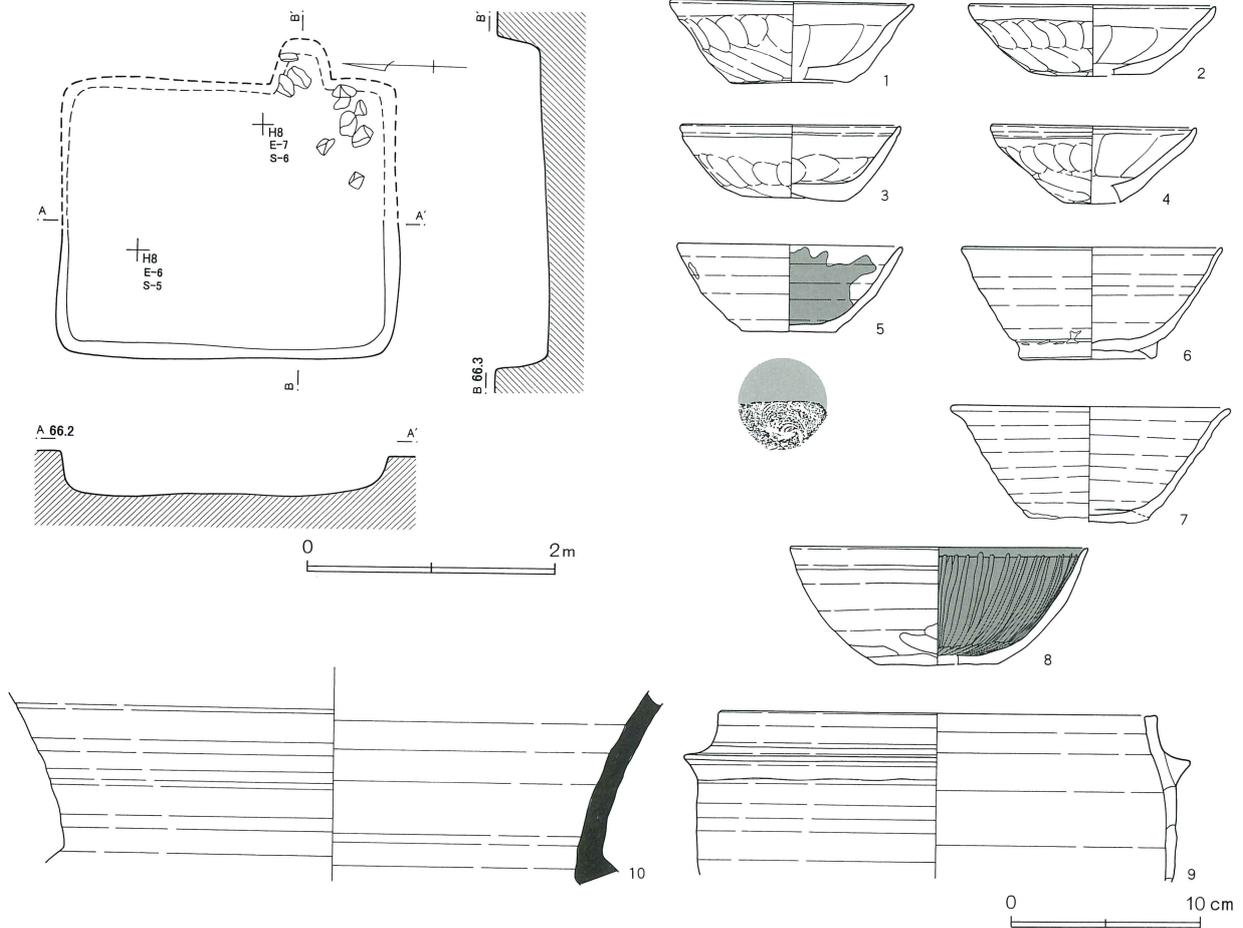
H-8 グリッドで確認した。周辺は、小穴・土壇などの遺構が比較的密集していた。第 55 号住居跡の覆土除去作業中カマド構築材と思われる川原石が、まとまって出土したことによって、住居跡の存在を推定した。そのため、住居跡の東半分は不明瞭であった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺 4.19 m ・ 短辺 3.55 m ・ 深さ 0.44 m であった。

主軸方位は、N-94°-E であった。

カマドは、構築材の川原石がまとまって出土したことから東壁の南東隅よりに構築されていたと推定した。

第 131 図 第 56 号住居跡・出土遺物



第 101 表 第 56 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B	H	12.8	4.3	6.0	B, E	不 良		暗 茶	30	カマド
2	坏	B	H	12.9	3.8	5.6	B, E	普 通		淡 橙	30	
3	坏	B	H	11.5	3.9	5.3	B, C, D, E	普 通		に ぶ い 橙	60	
4	坏	B	H	10.8			B, D, E	普 通		暗 橙	40	
5	碗	HS		11.8	4.6	5.0	B, I	良 好		に ぶ い 橙	50	
6	高台付碗	HS		13.6	6.0	6.8	B, E, H	良 好		外-灰褐。 内-灰白		
7	高台付碗	HS				14.5	B, E	普 通		灰 黄	95	
8	甲斐型坏	黒色		15.6	6.3	6.3	B, C	良 好		栗	10	
9	羽A I b 口	HS		22.9		2.4	B, E, H	良 好		灰 白	10	
10	大 甕	S					B, G	良 好		灰 白	30	

遺構の切り合い関係は、第55号住居跡より新しかった。

1から4は、土師器の坏Bである。1・2は、底部が欠損している。

5は、須恵器(HS)の碗である。6・7は、須恵器(HS)の高台付碗である。8は、黒色土器の甲斐型坏である。9は、須恵器(HS)の羽釜である。10は、須恵器(S)の大甕である。7は高台、9は胴部中位以下が欠損している。10は、口縁部のみである。

5は内面体部から底部にかけて、6は外面体部と高台に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第56号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第57号住居跡(第132図・第133図)

H・I-8・9グリッドで確認した。周辺は、小穴・土壇など遺構が密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.15m・短辺3.08m・深さ0.27mであった。

主軸方位は、N-91°-Eであった。

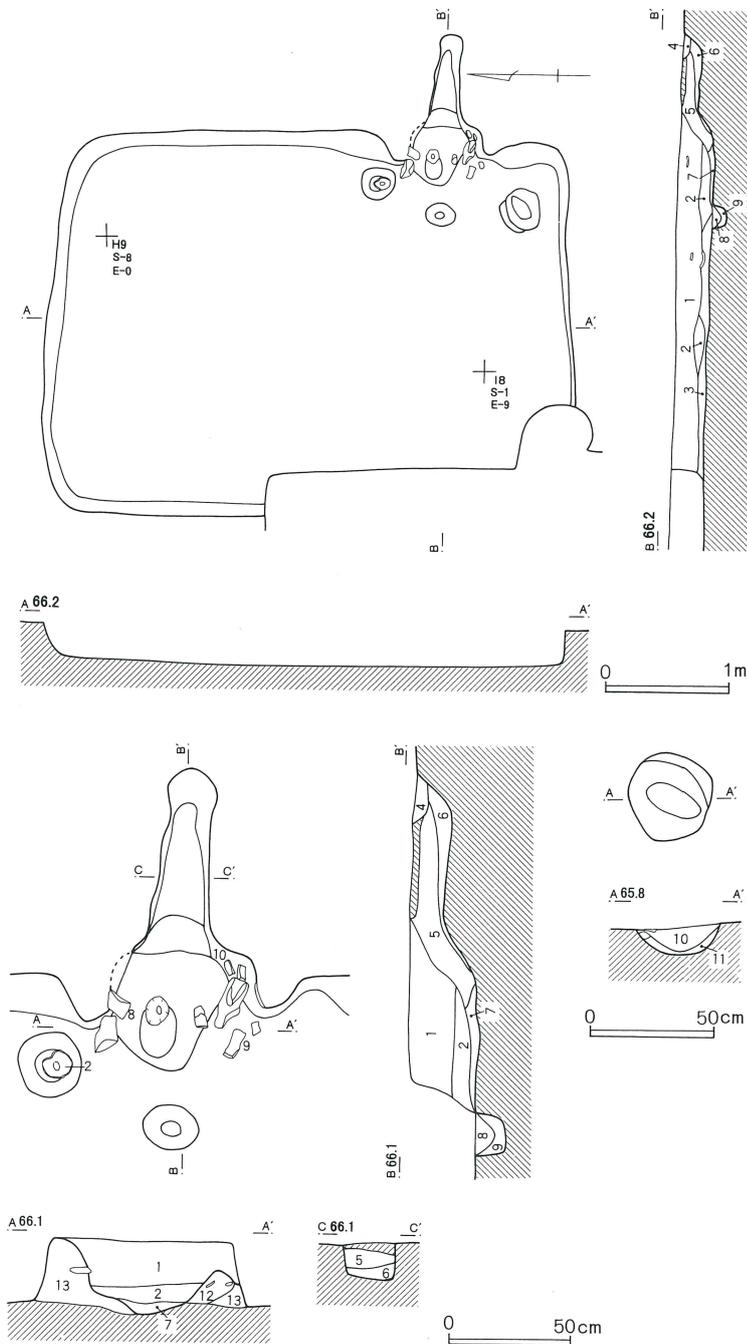
カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。袖は、地山に似る灰褐色土で構築され、住居内に短く伸びていた。左袖の先端付近からは、径0.25mの円形の窪みを

第 102 表 第 57 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	碗	HS	10.7	4.2		5.0	E, I	普 通		に ぶ い 黄 橙	25	カマド
2	高台付碗	NS	10.9	4.4		5.7	B, E	普 通		灰 白	90	
3	高台付碗	HS	10.4	3.7		5.8	B, E, I	普 通		に ぶ い 黄 橙	40	
4	高台付碗	NS	12.2				B	普 通		灰 白	60	
5	高台付碗	K				7.7	D	良 好		灰 白	20	
6	高台付碗	K	12.0				D	良 好		淡 灰 白	10	
7	羽A II a ハ	NS	23.4		2.9		B, D, E	良 好		灰 白	10	
8	羽A I a 口	NS	20.3		2.6		B, E, H	良 好		灰 白	20	
9	羽A I a イ	HS	19.0		3.0		C, E, H	良 好		淡 橙	15	
10	羽A I a 口	HS	19.0		2.6		A, B, E, H, K	良 好		外-黒。内-灰白	10	
11	羽 I B a	HS	21.3		2.2		B, C, E	良 好		淡 橙	20	
12	長頸壺	K					B, D	良 好		淡 灰	20	

第 103 表 第 57 号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
13	橙	100	3.4	1.2	0.4	4.2	C 3	I a	638	



第57号住居跡

- | | |
|--------------------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色土 焼土粒子、炭化物、小礫を少量含む | 7 灰褐色土 焼土ブロック、炭を多量に含み、B軽石を少量含む |
| 2 黄褐色土 焼土粒子、炭化粒子を微量含む | 8 灰褐色土 焼土、炭化物を多量に含む |
| 3 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子、小礫を少量含む | 9 灰褐色土 砂を多量に含む(砂質粘土) |
| 4 暗灰褐色土 焼土、炭化物を少量含む | 10 暗褐色土 焼土、炭化物を多量に含む |
| 5 灰褐色土 焼土を多量に含む | 11 灰褐色土 焼土、炭を多量に含む 砂質(燃焼部の灰のカキ出し) |
| 6 灰褐色土 焼土を少量含む、炭化物を微量含む | 12 灰褐色土 焼土を多量に含む、B軽石を少量含む |
| | 13 灰褐色土 白色粒子を多量に含む |

検出した。袖の補強材の抜き取り痕跡であろう。この窪みから須恵器の高台付碗(2)が出土した。燃焼部

は、不整形に極く浅く窪んでいた。燃焼部の中央やや左寄りには、支脚を抜取ったと推定される窪みを検出した。燃焼部から煙道部へは、緩やかな段をもって移行していた。煙道部は、長さ0.6mと細長く、地山掘り抜きで造られ、煙り出し部に向かって、緩やかに低くなって行く。焚き口部前面に径0.2m・深さ0.11mの掘り込みが検出され、焼土、炭化物、砂質粘土が多量に充填されていた。

貯蔵穴は、カマドの右脇の南東隅で検出した。径0.32m・深さ0.13mであった。

遺物は、カマド内から羽釜(9・10)が出土した。

遺構の切り合い関係は、第58号住居跡より古く、第255土壌より新しかった。

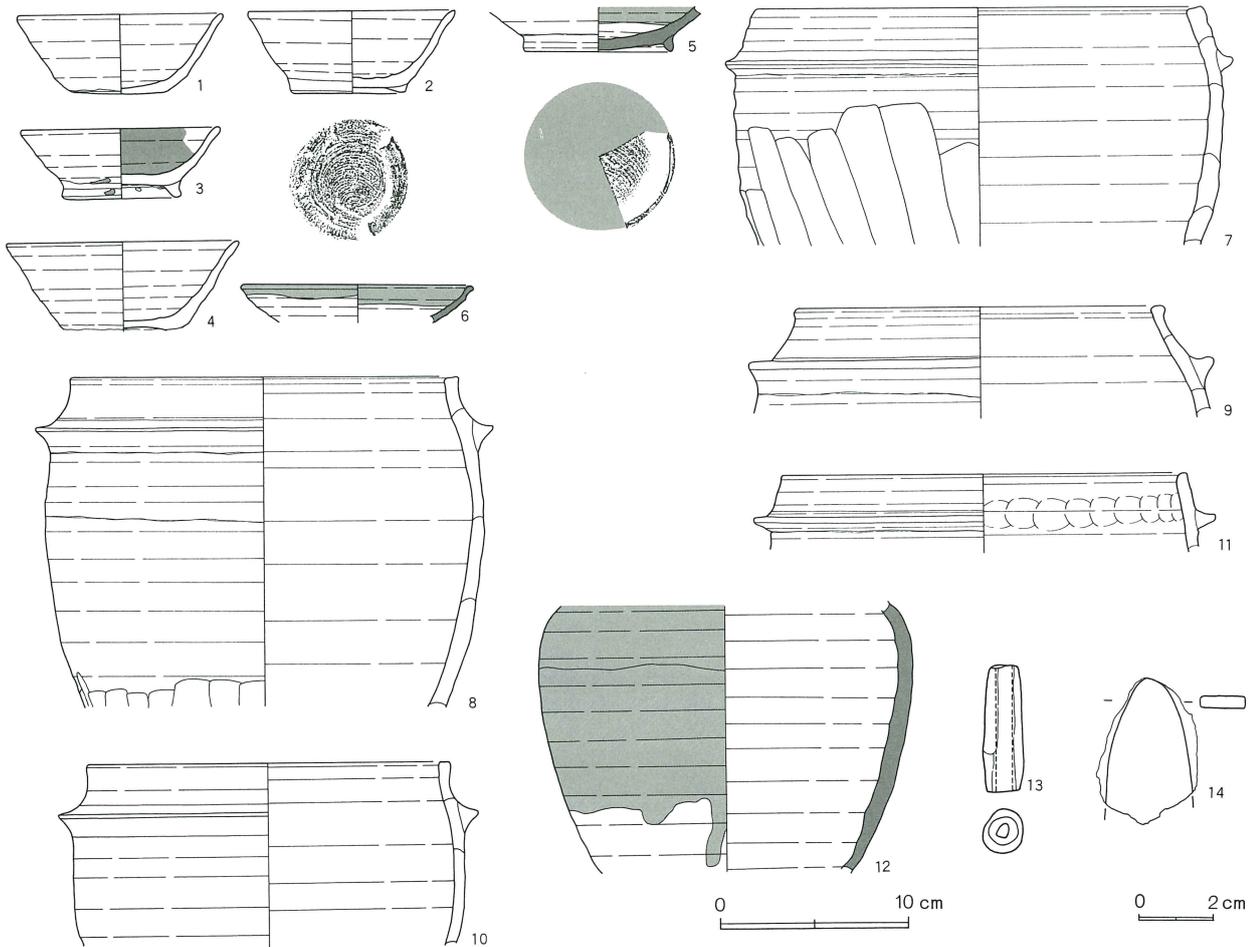
1は、須恵器(HS)の碗である。2から4は、高台付碗である。2・4は、須恵器(NS)である。3は、須恵器(HS)である。4は、高台が欠損している。3は、外面体部と高台、内面口縁部から底部にかけてと高台に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

5・6は、灰釉陶器の高台付碗である。5は口縁部、6は底部と高台が欠損している。

7から11は、羽釜である。7・8は、須恵器(NS)である。他は、須恵器(HS)である。7・10は胴部中位以下、8は胴部下位以下、9・11は胴部上位以下が欠損している。

12は、灰釉陶器の長頸壺である。12は、口縁部と底部が欠損している。

第133図 第57号住居跡出土遺物



13は、土錘である。

14は、板状鉄製品？である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第57号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第58号住居跡（第134図）

H・I-8グリッドで確認した。周辺は、小穴・土壙などの遺構が比較的密集していた。第57号住居跡との切り合いが明確に確認できず、第57号住居跡の覆土除去作業中にカマドを確認したため、カマドを一部調査中に破壊してしまった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.43m・短辺2.75m・深さ×0.25mであった。

主軸方位は、N-92°-Eであった。

カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。右袖は、

造り付けで、左袖は、住居跡の壁をそのまま利用した「片袖型」であった。右袖相当部から補強材の川原石が出土した。燃焼部は、円形に極く浅く窪んでいた。

貯蔵穴は、カマドの右脇の南東部で検出した。形状は、不整形で、規模は長径0.66m・短径0.42m・深さ0.2mであった。貯蔵穴内からは、多量の焼土、炭化物が出土した。

遺構の切り合い関係は、第216・217より古く、第57号住居跡より新しかった。

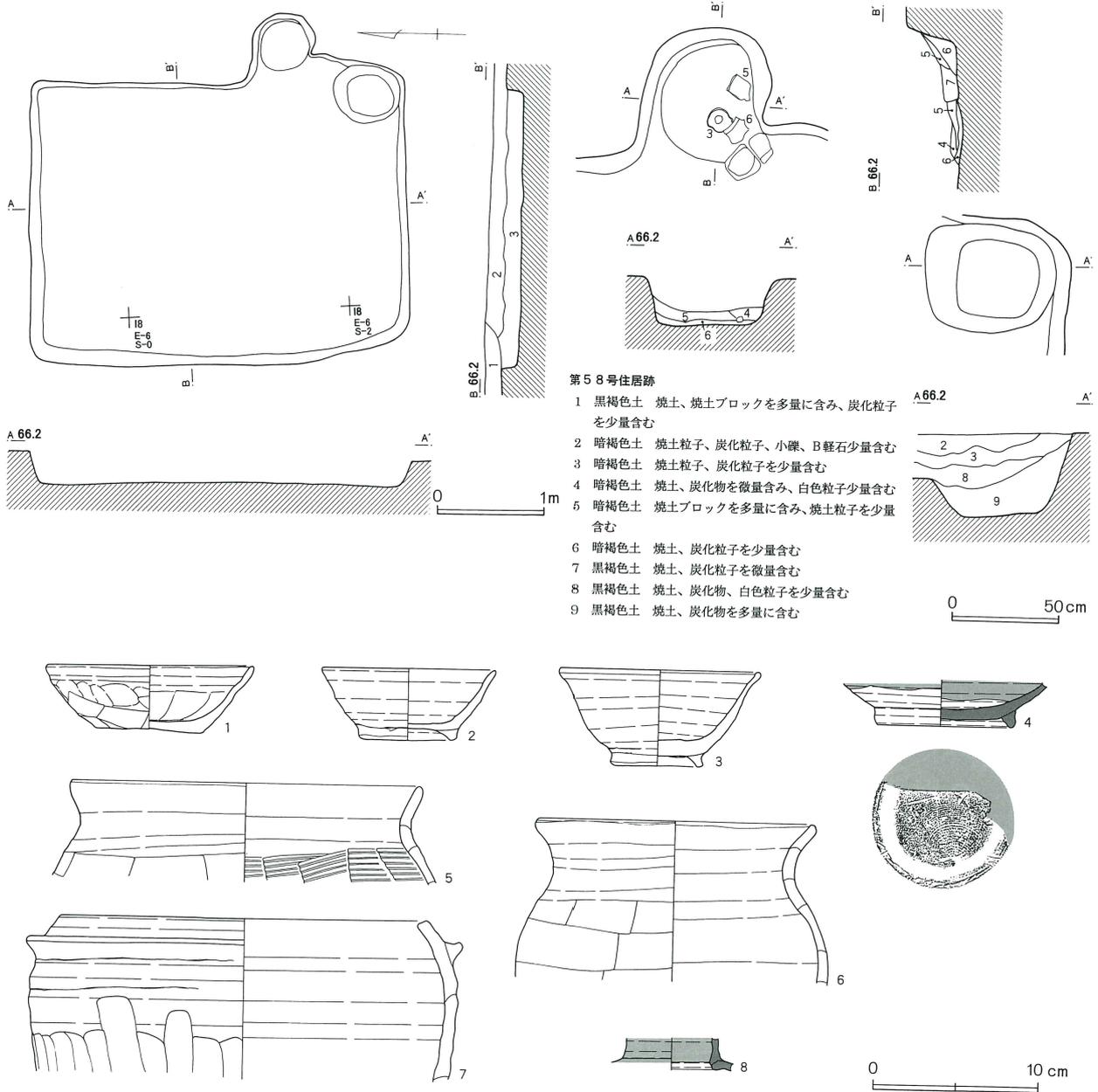
1は、土師器の坏Bである。

2・3は、須恵器（NS）の高台付碗である。

4は、灰釉陶器の高台付碗である。4は、口縁部が欠損している。

5・6は、土師器の甕である。7は、須恵器（HS）の羽釜である。5は胴部上位以下、6・7は胴部中位

第134図 第58号住居跡・出土遺物



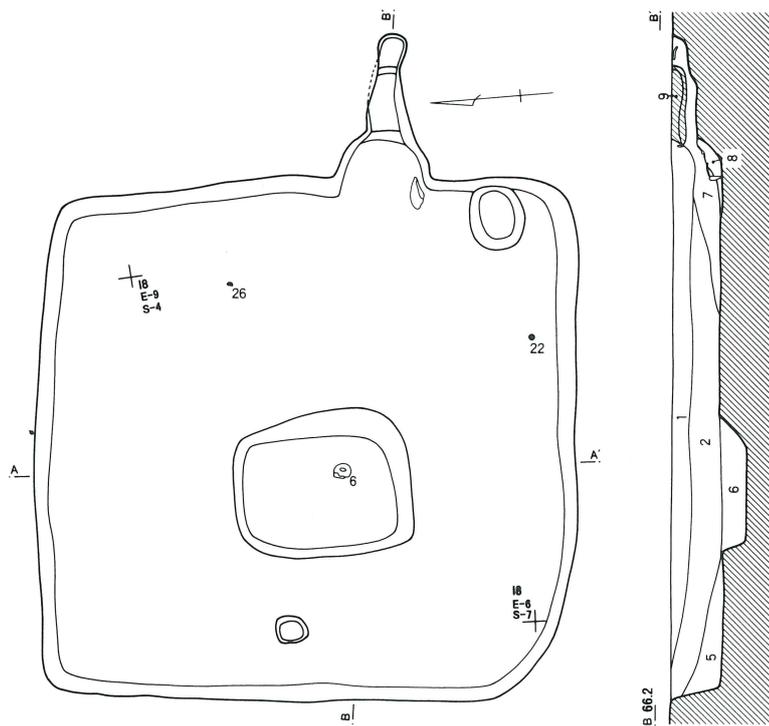
第58号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土、焼土ブロックを多量に含み、炭化粒子を少量含む
- 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子、小礫、B軽石少量含む
- 3 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土、炭化物を微量含み、白色粒子少量含む
- 5 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含み、焼土粒子を少量含む
- 6 暗褐色土 焼土、炭化粒子を少量含む
- 7 黒褐色土 焼土、炭化粒子を微量含む
- 8 黒褐色土 焼土、炭化物、白色粒子を少量含む
- 9 黒褐色土 焼土、炭化物を多量に含む

第104表 第58号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B	H	12.3	4.1	6.5	B, E, F, I	普通		暗 橙	70	カマド
2	高台付 椀	NS	10.4	4.3	5.3	B, I	良好			にぶい黄橙	25	
3	高台付 椀	NS	11.9	5.8	5.1	B	普通			灰 白	60	カマド
4	高台付 椀	K			8.0		良好			明 灰 褐	20	
5	甕 A III c	H	20.9			B, D, E, H	良好			淡 橙	20	カマド
6	甕 A III b	H	16.5			B, E, H	良好			淡 橙	15	カマド
7	羽 A II a イ	HS	22.0		1.5	B, E, H	良好			淡 黄 褐	15	
8	長頸 壺	K				B, D	良好			暗 灰	10	

第135図 第59号住居跡



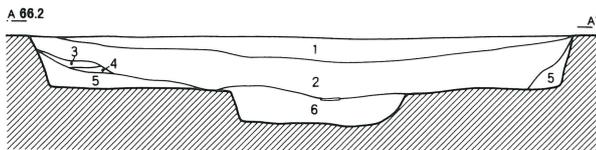
第59号住居跡

- 1 黒褐色土 B軽石主体 焼土粒子、炭化粒子、小礫を少量含む
- 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子、小礫、B軽石を多量に含む
- 3 黒褐色土 焼土粒子を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土を微量含む、炭化物を少量含む
- 5 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む
- 6 黒褐色土 焼土、炭化物を多量に含む
- 7 黒褐色土 焼土粒子を多量に含む、炭化物、炭化粒子を少量含む
- 8 黒褐色土 焼土粒子、灰化粒子、炭化物を多量に含む
- 9 赤褐色土 地山が被熱により赤色化
- 10 暗黒色土 焼土粒子を微量含む 粘性あり(炭化物層)
- 11 こげ茶色土 炭化物を微量含む 粘性あり

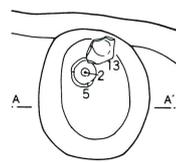
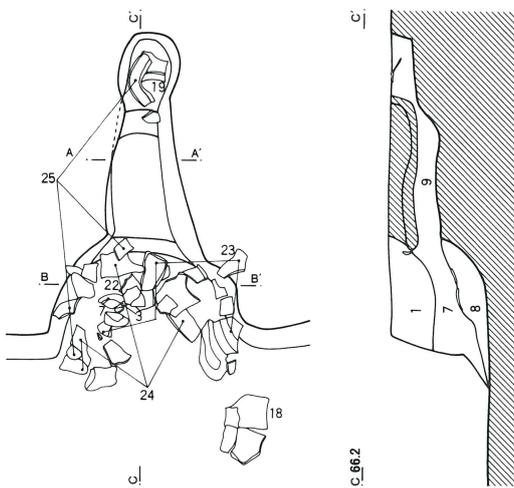
以下が欠損している。

8は、灰釉陶器の長頸壺である。8は、頸部破片である。

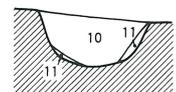
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第58号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。



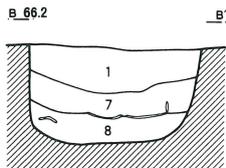
0 1m



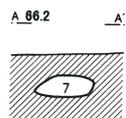
A_65.0



0 50cm



B_66.2



A_66.2

0 50cm

第59号住居跡 (第135図・第136図・第137図)

I-8・9グリッドで確認した。周辺は小穴・土壇などが比較的密集していた。住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺4.33m・短辺4.23m・深さ0.45mであった。

住居跡の中央やや西寄りでは、長方形の土壇を検出した。規模は、長径1.42m・短径1.15m・深さ0.18mであった。覆土中から焼土・炭化物が多量に出土した。また土壇の西側に、径0.2mの小穴1基を検出した。

主軸方位は、N-97°-Eであった。カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、元来造らなかつたと推定できる。燃焼部の掘り込みはみられず、段をもって煙道部に移行していた。煙道部は、長さ0.81mと細長かつた。地山を掘り抜いて造られていた。煙り出し部の手前で一端窪み、緩い段をもつ

ていた。煙り出し部からは、甌 (25) と羽釜 (19) が出土した。煙道部の補強材と推定した。とくに甌 (25) は、燃焼部内からも出土し、掛け口の調節として破片を使用していた可能性があった。

貯蔵穴は、カマドの右脇の南東隅寄りに検出した。規模は、長径0.5m・深さ0.22mの楕円形であった。炭化物が多量に出土した。

遺構の切り合い関係は、第213号土壇より古かった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀 (3)・甌 (22・23・24) が出土し、このうち甌 (22) は、南壁のやや北寄り出土した破片と接合した。カマド前面からは、羽釜 (18) が出土した。そのほか貯蔵穴内から須恵器の高台付椀 (2・5)、灰釉陶器の高台付椀

(13) が出土した。

1は、須恵器 (NS) の椀である。2から6と9から11は、高台付椀である。7・8は、高脚高台付椀である。5・8・9・11は、須恵器 (NS) である。ほかは、須恵器 (HS) である。1・3・4は底部、9は高台、10・11は口縁部が欠損している。1は口縁部、3は口縁部から体部、7は内面口縁部から底部にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

12から14は、灰釉陶器の高台付椀である。14は、口縁部を打ち欠いた転用硯である。15は、緑釉陶器の高台付椀である。12は底部、13は口縁部、15は底部と高台が欠損している。

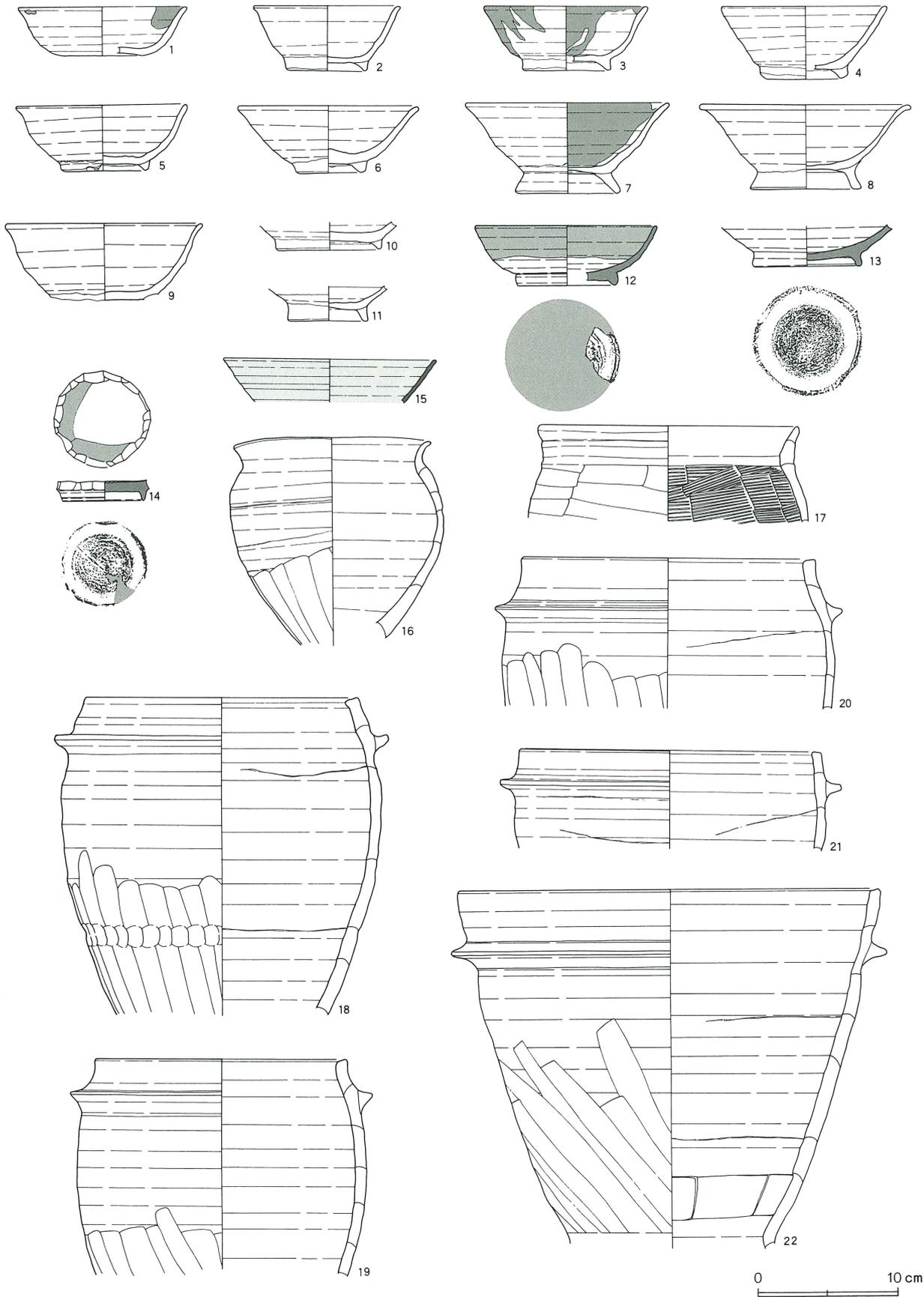
第 105 表 第 59 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	罅	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS	12.0	3.5		5.8	B, E, I	良好	L	褐 灰	40	
2	高台付椀	HS	10.3	4.1		5.3	B, E, I	良好	R	にぶい黄橙	100	貯穴
3	高台付椀	HS	11.3	4.6		5.9	B, E, G, I	普通	R	にぶい黄橙	40	貯穴。カマド
4	高台付椀	HS	11.6	5.2		5.3	B, E, G, I	普通	R	にぶい橙	90	
5	高台付椀	NS	12.0	4.7		5.5	B, E, I	普通	R	灰 白	100	
6	高台付椀	HS	12.8	4.8		4.5	B, E, I	普通	R	褐 灰	90	
7	高脚高台付椀	HS	14.1	6.4	6.9		B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	30	
8	高脚高台付椀	NS	14.6	6.0		7.6	B, E, I	普通	R	灰 白	40	
9	高台付椀	NS	13.8				B, E, I	普通	R	灰	60	
10	高台付椀	HS				7.1	B, E, I	良好	L	灰 黄	20	
11	高台付椀	NS				5.4	B, E, I	普通		灰 黄	20	
12	高台付椀	K	12.6	4.3		6.8	D	良好		淡 灰	20	
13	高台付椀	K				7.5	B, K	良好		灰	30	貯蔵穴
14	高台付椀	K				5.7	B, K	良好		灰 白	30	
15	高台付椀	M	9.7				B	良好		淡 緑	10	
16	口クロ甕	H	13.9				B, C, E, H	良好		淡 橙	80	
17	甕 A III e	H	18.2				B, E, H	良好		明 褐	20	
18	羽 A II a 口	HS	19.3		3.0		B, E, G, H	良好		淡 橙	25	カマド
19	羽 A I a 口	NS	17.6		2.6		B, D, E	良好		淡 黄 褐	25	カマド
20	羽 A I a 口	HS	20.5		3.8		B, E, K	良好		淡 黄 褐	20	
21	羽 B II b	NS	20.3		2.5		B, D, E	良好		灰 白	15	
22	甌 B I	HS	29.6		4.6		B, E, H	良好		淡 橙	25	カマド
23	甌 B II	HS	25.0		3.1		A, B, E, H	良好		淡 橙	15	カマド
24	甌 B II	NS	26.9		4.7		B, C, E, H	良好		灰 褐	30	カマド
25	甌	HS	23.2				B, E, H	良好		淡 黄 橙	25	カマド
26	壺 口縁	HS	19.2				B, E, H	良好		淡 橙	40	

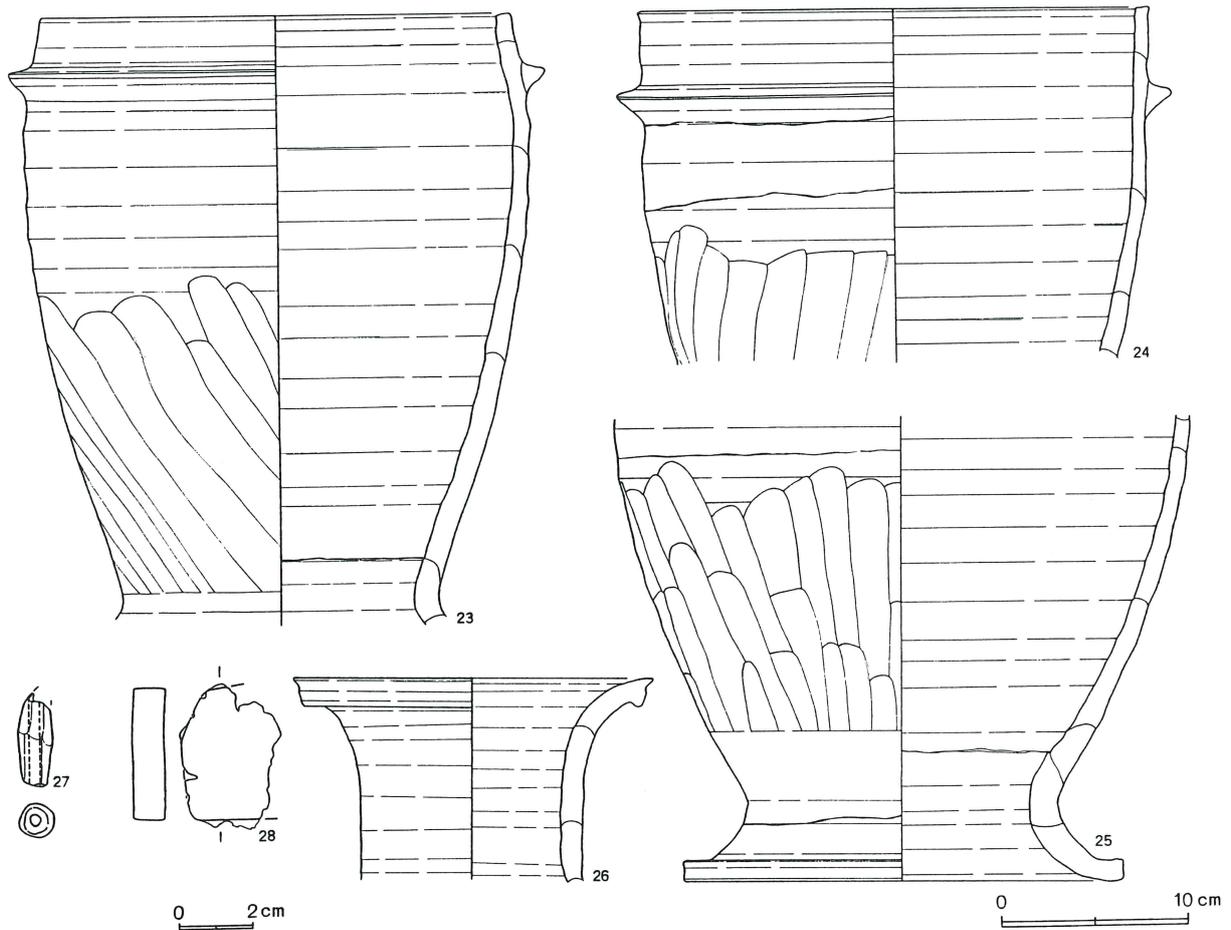
第 106 表 第 59 号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
27	浅黄橙	70		1.0	0.3	1.6	C 2	II a	400	

第136図 第59号住居跡出土遺物（1）



第137図 第59号住居跡出土遺物（2）



16・17は、土師器の甕である。18から21は、羽釜である。22から25は、甌である。19・21・24は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。26は、須恵器（NS）の壺である。16・22・23は底部、18・19・24は胴部下位以下、17・21は胴部上位以下、20は胴部中位以下、25は胴部中位以上が欠損している。26は口縁のみである。

27は、土錘である。28は、板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第59号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第60号住居跡（第138図）

I-9グリッドで確認した。遺構の重複が激しく、確認に手間取った。住居跡の大部分を第63号住居跡に破壊され、形状など全容は不明であった。残存部の深さは0.42mであった。わずかに残った西壁には、幅0.2mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N-101°-Eと思われる。

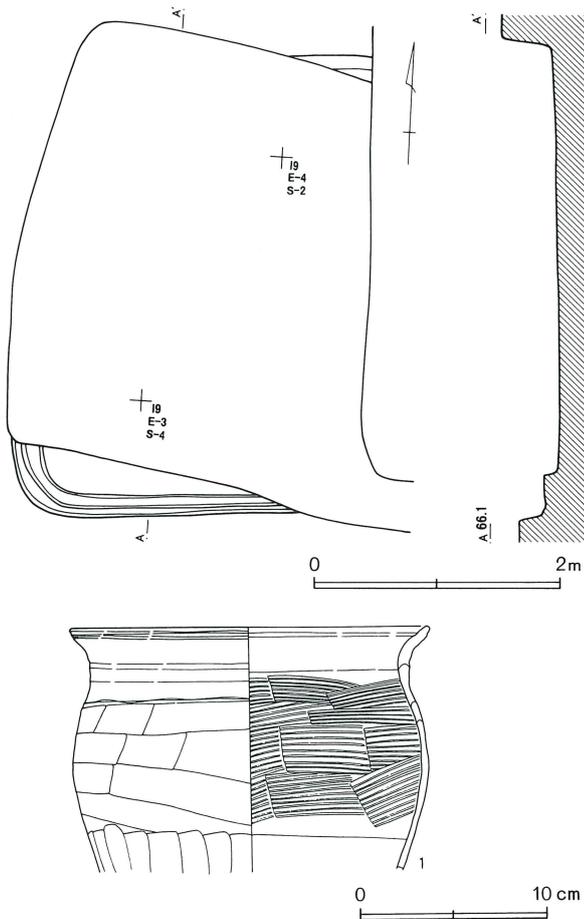
1は、土師器の甕である。1は、胴部下位以下が欠損している。

以上、出土遺物から第60号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第107表 第60号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	甕 A IV c	H	18.9				A, B, H, I	良好		浅黄橙	20	

第138図 第60号住居跡・出土遺物



第61号住居跡 (第139図)

I-9グリッドで確認した。遺構の重複が激しく、確認に手間取った。

住居の形状は長方形で、規模は、長辺5.94m・短辺3.10m・深さ0.44mであった。南壁中央から西壁・北壁にかけて、幅20~30cmの壁溝を検出した。

主軸方位は、N-99°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。地山を掘り残してつくられた袖は、短く住居跡内に伸びていた。

第108表 第61号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A VI	H	11.7	3.6		6.7	B, C, E	普通		淡 橙	80	貯穴
2	坏 A IV	H	11.7	3.9		7.2	B, D, E	良好		淡 黄 褐	80	
3	高台付 椀	HS	16.1	6.1		6.5	B, C, H	良好		淡 黄	30	
4	高台付 椀	NS	13.4				B, E	普通		灰 白	10	
5	高台付 椀	NS				5.3	B	普通		灰 白	20	
6	高台付 椀	M				8.7	B, D	良好		淡 緑	10	

燃焼部は、不整形に極く浅く窪んでいた。段をもって煙道部へと移行していた。燃焼部内からは、構築材の川原石がまとまって出土した。

貯蔵穴は、カマドの右側のやや離れた南壁の南東寄りに検出した。形状は不整形楕円形で、規模は長径0.94m・短径0.67m・深さ0.13mであった。

遺構の切り合い関係は、第63号住居跡より古く、第62号住居跡、第138号土壇より新しかった。

1は、土師器の坏A VIである。2は、土師器の坏A IVである。3から5は、高台付椀である。3は、須恵器(HS)、他は須恵器(NS)である。3は底部、4は底部と高台、5は口縁部が欠損している。

6は、緑釉陶器の高台付椀である。6は、口縁部と底部が欠損している。

7は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第61号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第62号住居跡 (第139図)

I-9グリッドで確認した。遺構の重複が激しく、第61号住居跡に大半が破壊され、全容は明確にできなかった。

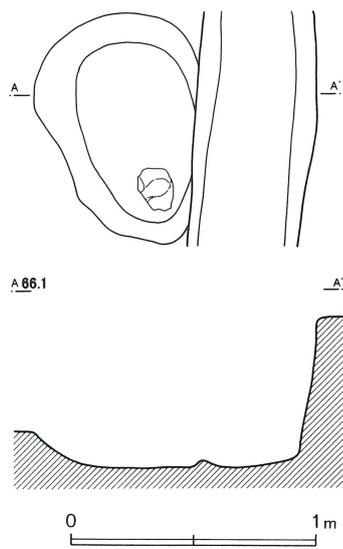
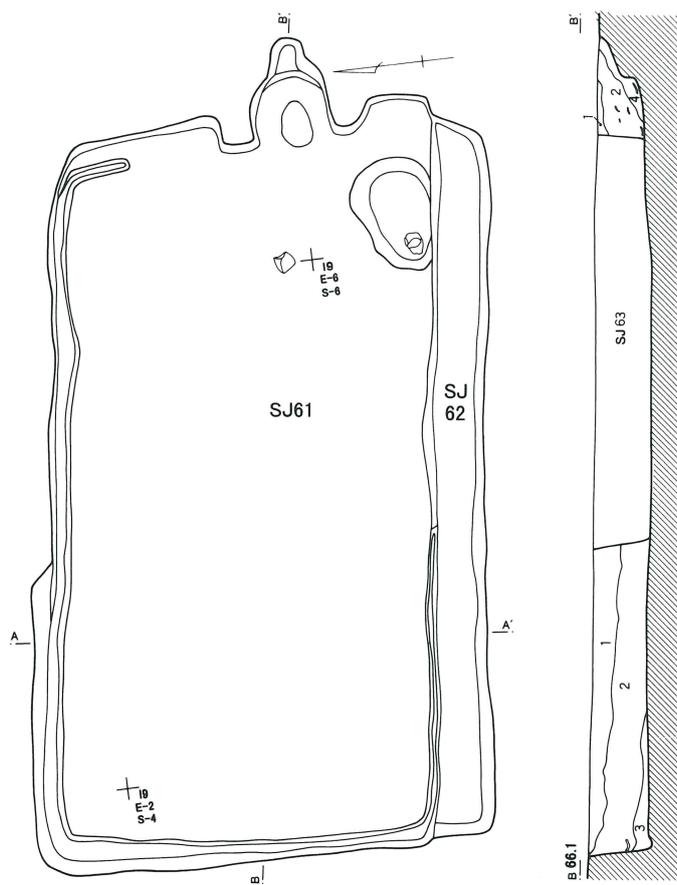
住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺5.70m・短辺3.62m・深さ0.41mであった。

主軸方位は、N-99°-Eと推定される。

遺構の切り合い関係は、第62・63号住居跡よりも古かった。

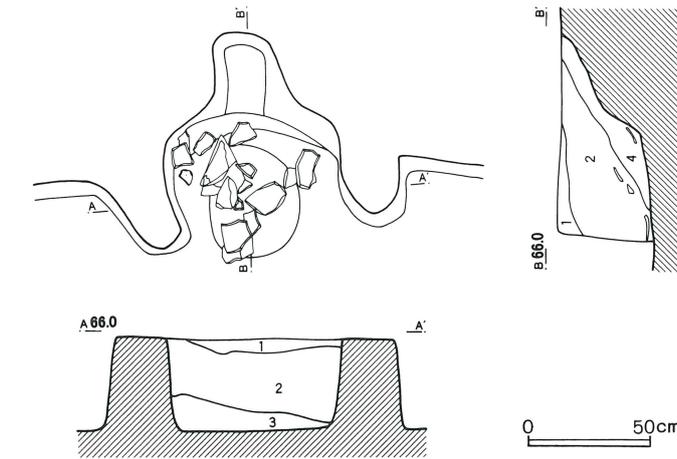
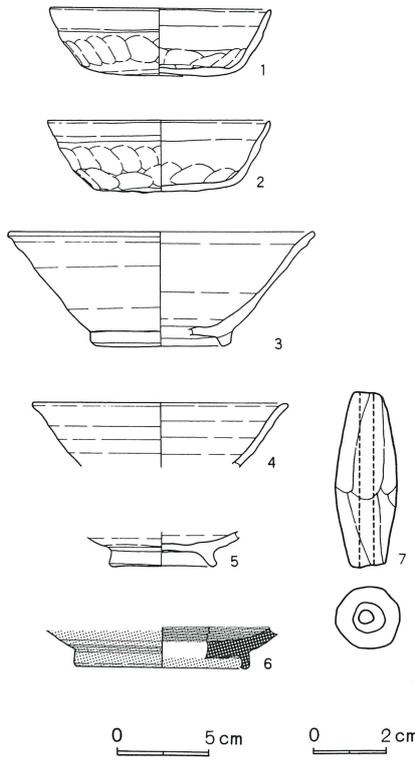
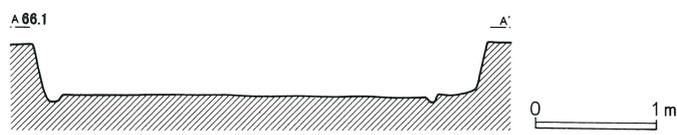
以上、遺構の重複関係から第62号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第139図 第61・62号住居跡・出土遺物



第61・62号住居跡

- 1 暗茶褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む 粘性あり
- 2 暗褐色土 粘性あり
- 3 淡橙色土 焼土、炭化物をまったく含まない層で 粒子細かい。
- 4 褐色土 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり（天井部 崩落土）



第109表 第61号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
7	褐 灰	100	4.7	1.7	0.4	12.4	C 1	I a	156	

第63号住居跡（第140図・第141図）

I-9 グリッドで確認した。遺構の重複が激しく、確認に手間取った。

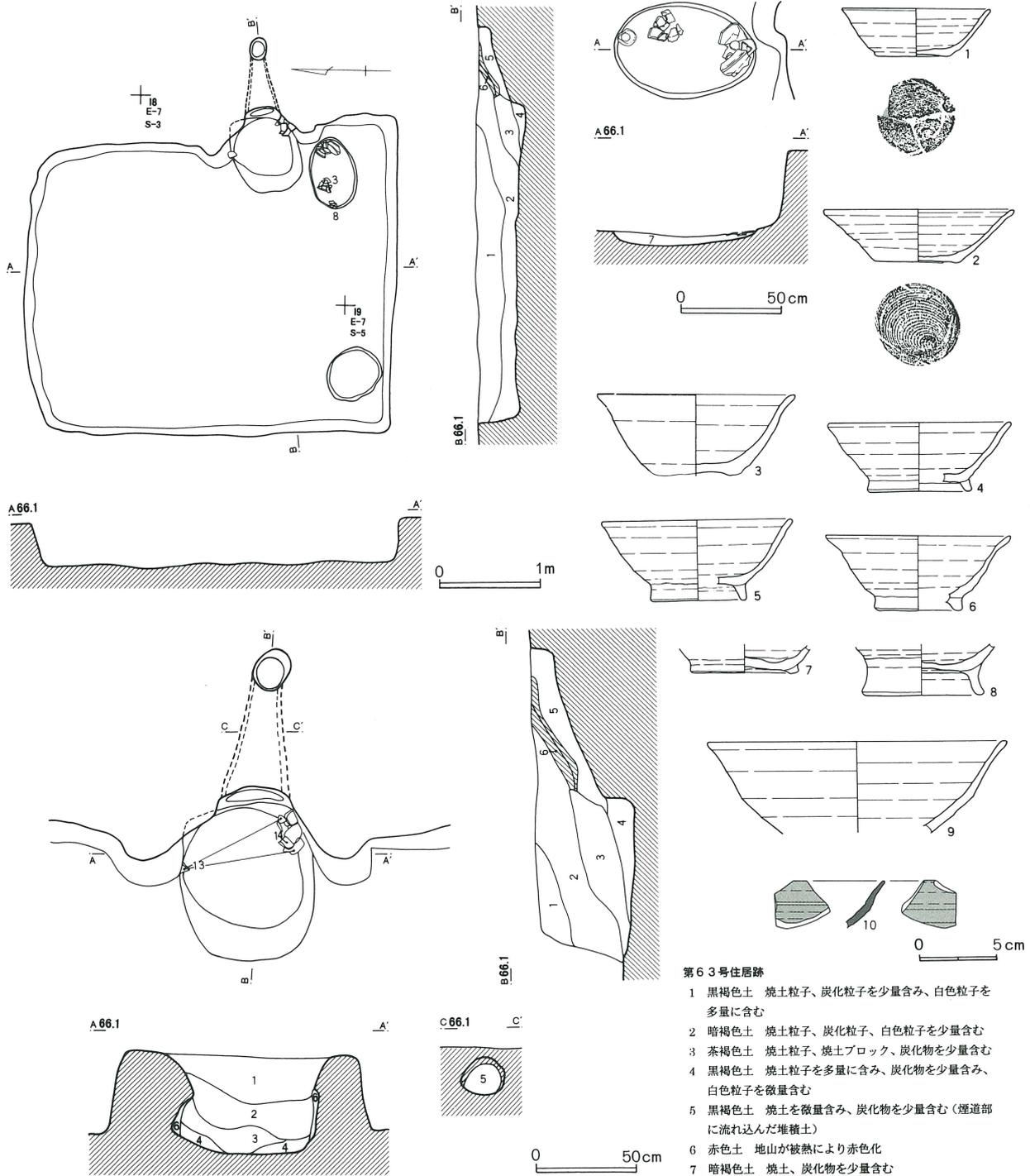
住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.95m・短辺3.26m・深さ0.38mであった。北西隅に

径0.56、深さ0.39mの円形の土塋を検出した。

主軸方位は、N-90°-Eであった。

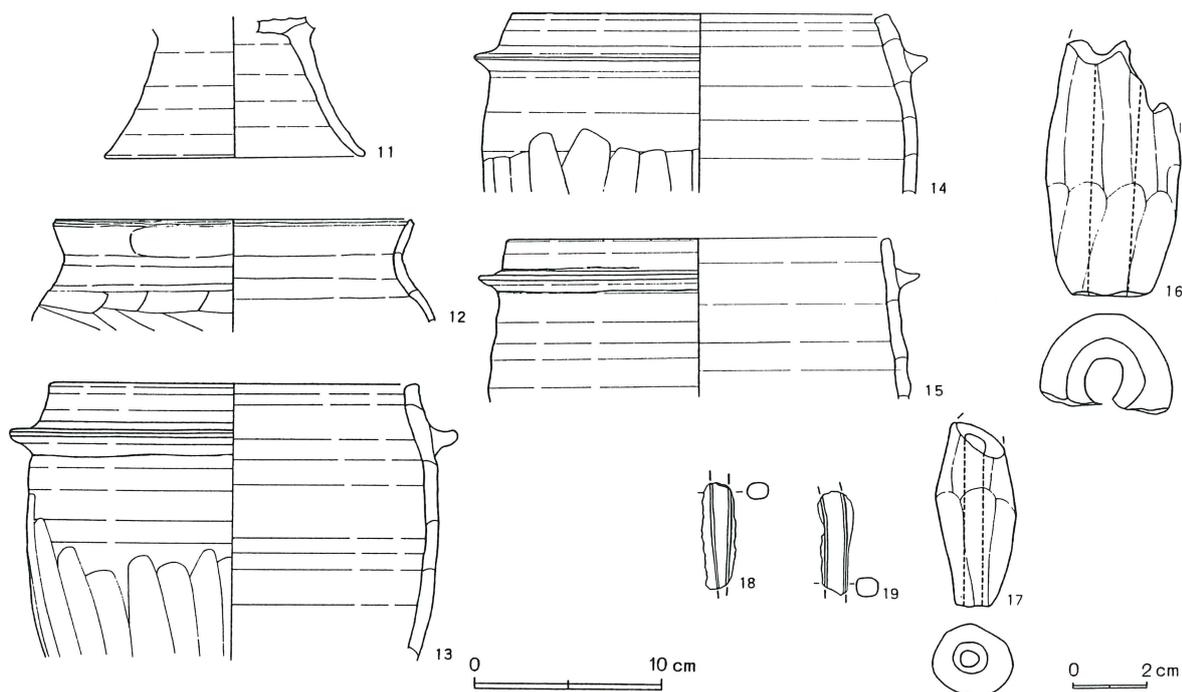
カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、短く住居跡内に伸びていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、不正方形の浅い

第140図 第63号住居跡・出土遺物（1）



- 第63号住居跡
- 1 黒褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含み、白色粒子を多量に含む
 - 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子、白色粒子を少量含む
 - 3 茶褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、炭化物を少量含む
 - 4 黒褐色土 焼土粒子を多量に含み、炭化物を少量含み、白色粒子を微量含む
 - 5 黒褐色土 焼土を微量含み、炭化物を少量含む（煙道部に流れ込んだ堆積土）
 - 6 赤色土 地山が被熱により赤色化
 - 7 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む

第141図 第63号住居跡出土遺物（2）



掘り込みがあった。燃焼部は、奥に向かって低く緩やかに傾斜し、段をもって煙道部へ移行していた。煙道部は、長さ0.77mと細長く、地山を掘り抜いて造られ

ていた。煙り出し部に向かって緩い傾斜をもつ。

貯蔵穴は、カマドの右袖に接して検出した。南東の隅からはやや離れていた。形状は楕円形で、規模は長

第110表 第63号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS	9.4	3.1		4.6	B, C, D, E	良好		灰白	60	
2	椀	HS	12.0	3.4		5.3	B, E, I	良好		にぶい橙	70	
3	高台付椀	HS	12.7				B, C, H	良好		灰白	25	
4	高台付椀	HS	11.5	4.4		6.4	B, I	普通		浅黄	20	
5	高台付椀	NS	12.2	5.2		5.9	B, E	普通		灰白	15	
6	高台付椀	NS	11.8	4.8		5.2	B	普通		灰	30	
7	高台付椀	NS				6.1	B, I	普通		灰	10	
8	高脚高台付椀	NS				7.5	B, E	普通		黄灰	20	
9	高台付椀	HS	19.0				B, I	普通		にぶい黄橙	10	
10	皿	M					B, D	普通		淡緑	5	
11	高脚高台鉢	HS				13.8	B, E	良好	R	にぶい黄橙	10	
12	甕 A III c	H	19.0				B, E	良好		褐	15	
13	羽 A I a 口	HS	19.2		2.7		B, E, H	良好		灰白	30	カマド
14	羽 B II a	HS	19.8		2.4		B, C, E, H	良好		浅黄橙	15	
15	羽 B II b	NS	20.1		1.9		B, C, E, H	良好		浅黄橙	15	

第111表 第63号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
16	にぶい褐	40		3.5	1.2	56.0	A 1	VII	7	
17	浅黄	80		2.2	0.5	18.6	B 1	II b	53	

径0.67m・短径0.47m・深さ0.08mであった。

遺構の切り合い関係は、第61・62号住居跡より新しくなった。

カマドの燃焼部の壁に張り着いて羽釜（13・14）が出土した。貯蔵穴内からは、須恵器の高台付椀（3・8）が出土した。

1・2は、椀である。1は須恵器（NS）、2は須恵器（HS）である。3から7・9は、高台付椀である。3・4・9は、須恵器（HS）である。他は、須恵器（NS）である。8は、須恵器（NS）の高脚高台付椀である。3は高台、4・5・6は底部、7・8は口縁部、9は底部と高台が欠損している。

10は、緑釉陶器の稜皿である。10は、口縁部破片である。

11は、須恵器（HS）の高脚高台鉢である。11は、脚部のみである。

12は、須恵器の甕である。13から15は、羽釜である。13・14は、須恵器（HS）である。15は、須恵器（NS）である。12は胴部上位以下、13は胴部下位以下、

14・15は胴部中位以下が欠損している。

16・17は、土錘である。

18・19は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第63号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第64号住居跡（第142図）

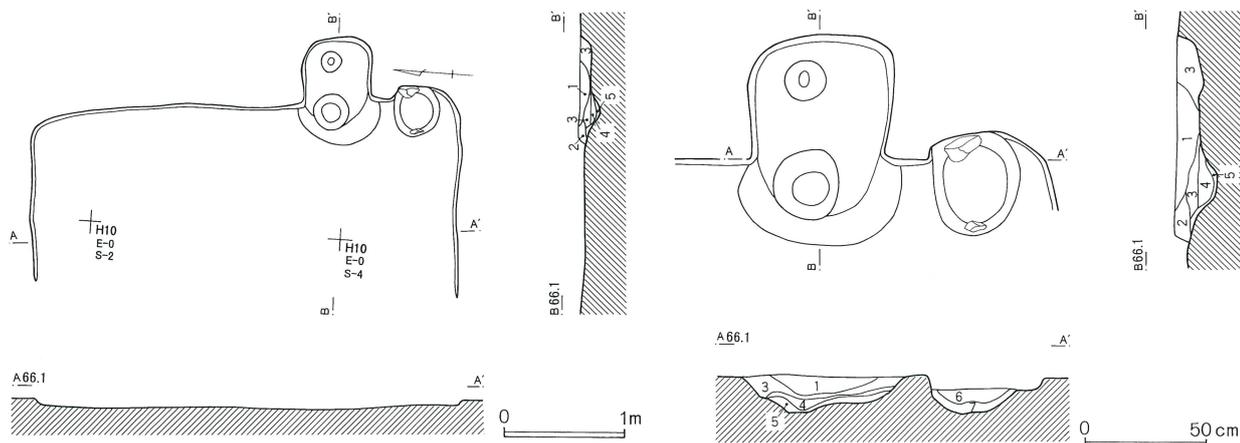
H-9・10グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らであったが、遺構確認面と住居の床面1がほぼ同一面であったことから、確認に手間取り形状など不明な点が多かった。

残存部の東壁は、長さ3.42m・深さ0.08mであった。主軸方位は、N-87°-Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖はみられず、燃焼部はわずかに窪んでいた。焚き口部に径0.28m・深さ0.09mの掘り込みを検出した。また燃焼部のやや左寄り奥に、支脚の抜き取り痕跡を確認した、径0.17m・深さ0.03mの極く浅い窪みであった。

貯蔵穴は、カマドの右脇南東部で検出した。形状は、

第142図 第64号住居跡・出土遺物



第64号住居跡

- 1 暗黄褐色土 焼土を多量に含む 粘性あり
- 2 暗黄褐色土 焼土、炭を少量含む 粘性あり
- 3 暗黄褐色土 焼土を少量含む、炭を多量含む 粘性あり
- 4 暗黄褐色土 焼土ブロック、炭を少量含む 粘性あり
- 5 暗黄褐色土 粘性あり
- 6 暗黄褐色土 焼土、炭を少量含む
- 7 暗黄褐色土 焼土を微量含む 粘性あり

第112表 第64号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	皿	HS	13.6	2.4		6.9	B, C, I	良好		にぶい 橙	80	貯穴
2	高台付 椀	HS	15.0				B, C, E, I	普通		外-橙。内- 灰黄	25	カマド
3	高台付 椀	NS	13.6	5.6		7.4	B, E, I	普通		灰	60	

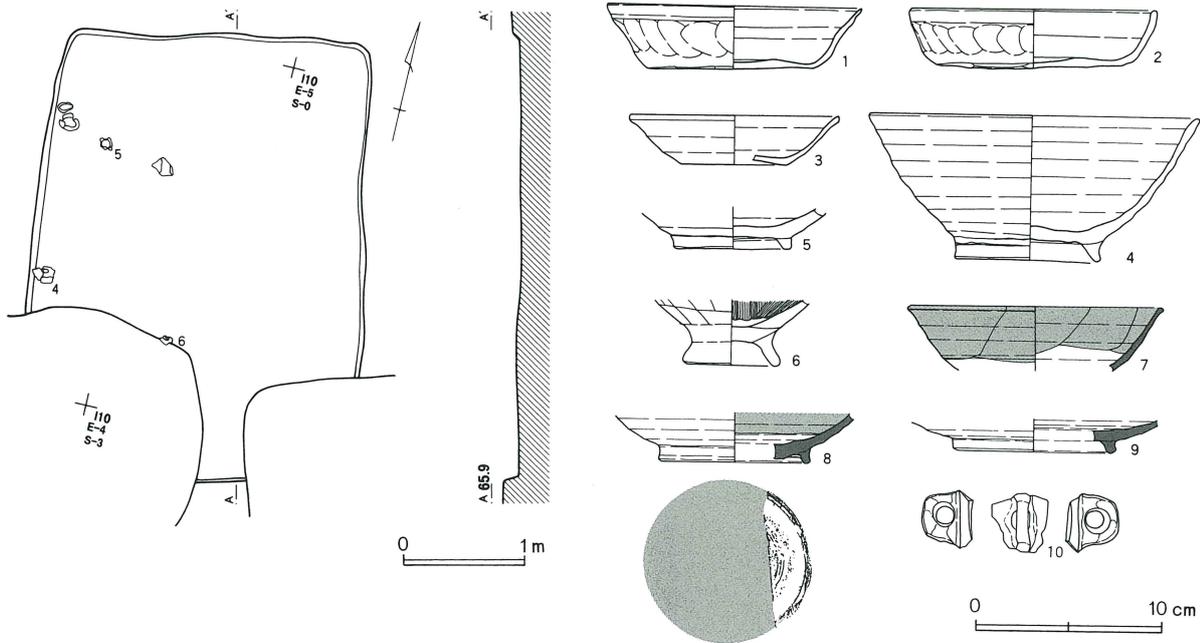
楕円形であった。規模は、長径0.41m・短径0.36m・深さ0.17mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、須恵器(HS)の皿である。2・3は、高台付椀である。2は須恵器(HS)、3は、須恵器(NS)である。2は、底部と高台が欠損している。

以上、出土遺物から第64号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第143図 第65号住居跡・出土遺物



第113表 第65号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A	IV H	13.5	3.4		8.8	B, D, E	普通		淡黄白	60	カマド
2	坏 A	IV H	12.9	3.2		9.8	B, D, E	普通		淡 橙	90	
3	椀	HS	11.1	2.6		5.6	B, C, E	良好		橙	25	
4	高台付 椀	NS	17.3	7.8		7.3	B, I	普通		灰 白	60	
5	高台付 椀	HS				5.9	B, H, K	良好		浅黄橙	100	
6	台付 甕脚	H				4.6	B, E, H	良好		褐 灰	80	
7	高台付 椀	K	13.3				B, D	良好		暗 灰	10	
8	高台付 椀	K				7.7	B, D	良好		明 灰 白	20	
9	高台付 皿	K				8.0	B, D	良好		暗 灰	10	
10	把 手	H					B, D, E	良好		浅黄橙	5	

第65号住居跡 (第143図)

H・I-10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壌など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.08m・短辺2.15m・深さ0.25mであった。

主軸方位は、N-13°-Wであった。

カマドは、東壁の南東部にあった可能性もあるが、カマドの存在を示す遺物や遺構を検出できなかったことから、当初から構築していなかったと考えられる。

遺構の切り合い関係は、第66・70・71号住居跡より

古く、第67号住居跡より新しかった。

遺物は、住居跡の西側から須恵器の高台付碗(4・5)・土師器の台付甕(6)が出土した。

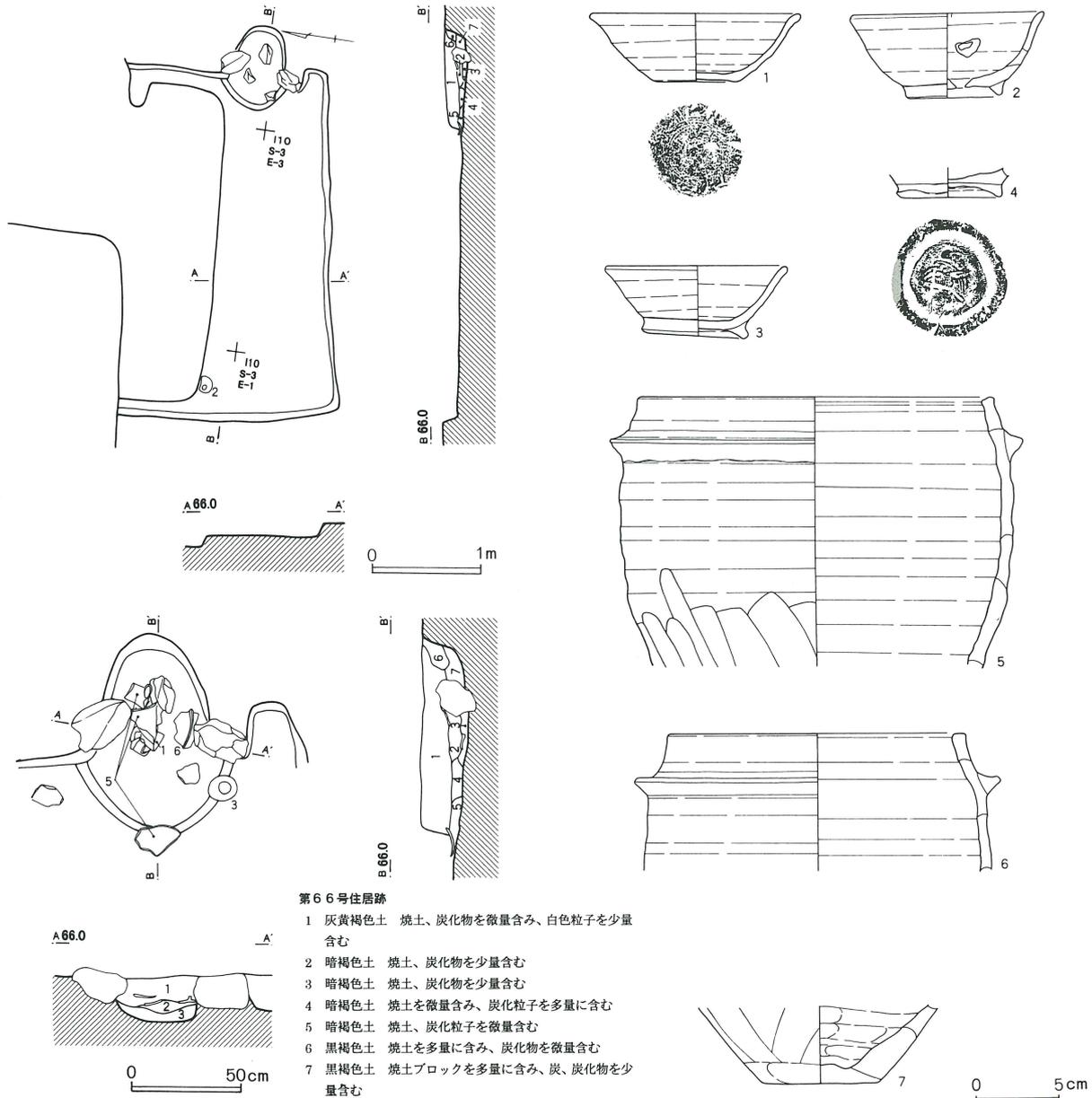
1・2は、土師器の坏AⅣである。

3は、須恵器(HS)の碗である。4・5は、高台付碗である。4は須恵器(NS)、5は須恵器(HS)である。3は底部、5は口縁部が欠損している。

6は、土師器の甕である。10は、土師器の甕か蓋の把手である。6は、脚部のみである。

7・8は、灰釉陶器の高台付碗である。9は、灰釉

第144図 第66号住居跡・出土遺物



- 第66号住居跡
- 1 灰黄褐色土 焼土、炭化物を微量含み、白色粒子を少量含む
 - 2 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む
 - 3 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む
 - 4 暗褐色土 焼土を微量含み、炭化粒子を多量に含む
 - 5 暗褐色土 焼土、炭化粒子を微量含む
 - 6 黒褐色土 焼土を多量に含み、炭化物を微量含む
 - 7 黒褐色土 焼土ブロックを多量に含み、炭、炭化物を少量含む

陶器の高台付皿である。7は底部と高台、8・9は口縁部と底部が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第65号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第66号住居跡（第144図）

I-10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壌など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の北半分を第72号住居跡が破壊しているため、形状は不明であった。残存する南壁は、長さ3.10m・深さ0.14mであった。

主軸方位は、N-83°-Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。右袖は、地山を掘り残して短く造り、左袖は、住居跡の壁をそのまま利用した「片袖型」であった。右袖の先端部と焚き口部の左脇には、補強材の川原石を使用していた。焚き口部の前面から燃焼部にかけて極く浅く窪んでいた。燃焼部の中央から、川原石を使用した支脚が出土し、一つ掛けカマドと推定した。

遺構の切り合い関係は、第69・72号住居跡より古かった。

カマド内から須恵器の坏（1）・羽釜（5・6）が出土し、右袖の前面から須恵器の高台付椀（3）が出土した。

1は、須恵器（HS）の椀である。2から4は、須恵器（NS）の高台付椀である。2は底部、4は口縁部が欠損している。

5・6・7は、羽釜である。5・6は須恵器（HS）、

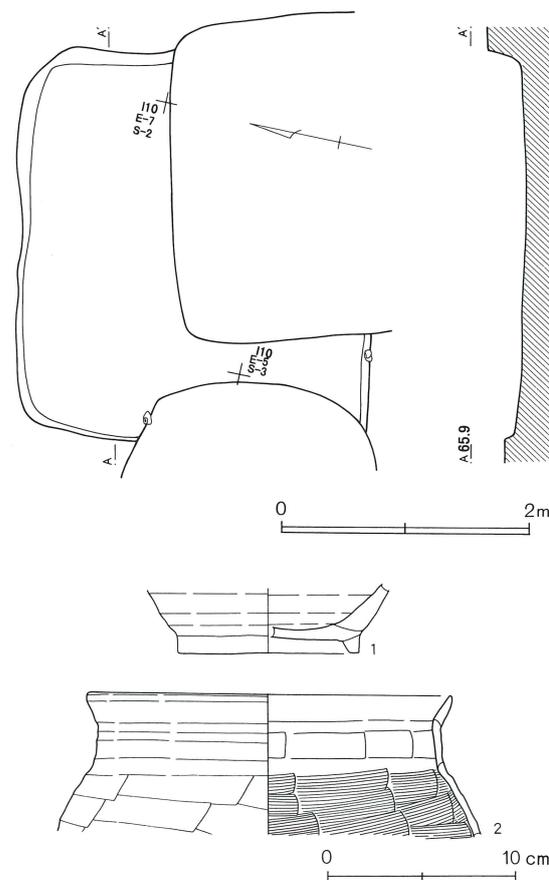
7は須恵器（NS）である。5は胴部下位以下、6は胴部中位以下が欠損している。7は、底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第66号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第67号住居跡（第145図）

I-10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壌など激しく重複し、確認に手間取った。住居跡の大部

第145図 第67号住居跡・出土遺物



第114表 第66号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	12.1	4.1		4.7	A, B, D, E, H, K	良	好	浅黄橙	100	カマド
2	高台付椀	NS	11.3	5.2		5.4	B, C, E, H	良	好	淡橙		高台-10。他-100
3	高台付椀	NS	10.5	4.4		5.7	B, E	良	好	灰白	100	カマド
4	高台付椀	NS				5.8	B, C, E, H	良	好	淡橙	100	カマド
5	羽釜Ⅱa口	HS	20.7		2.6		B, C, E	良	好	黄橙	40	カマド
6	羽釜Ⅰb口	HS	17.5		2.8		B, E, H	良	好	淡橙	20	カマド
7	羽釜底部	NS				6.5	B, E, H	良	好	外-浅黄橙。 内-明青灰	50	カマド

分が重複する遺構で破壊され、全容は不明であった。

残存部分から復元した住居跡の形状は方形であった。規模は、長辺3.10m・短辺2.8m・深さ0.43mであった。

主軸方位は、N-78°-Eであった。

カマドは、東壁と考えられるが、第71号住居跡により大半が破壊され不明であった。

遺構の切り合い関係は、第65・70・71号住居跡より古かった。

1は、須恵器（NS）の高台付椀である。2は、土師器の甕である。1は口縁部と底部、2は胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第67号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第68号住居跡（第146図）

H-10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壇など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形だったが、第70号住居跡に南壁を破壊されたため、長辺の長さは明らかにできなかった。短辺は、2.25m・深さ0.20mであった。

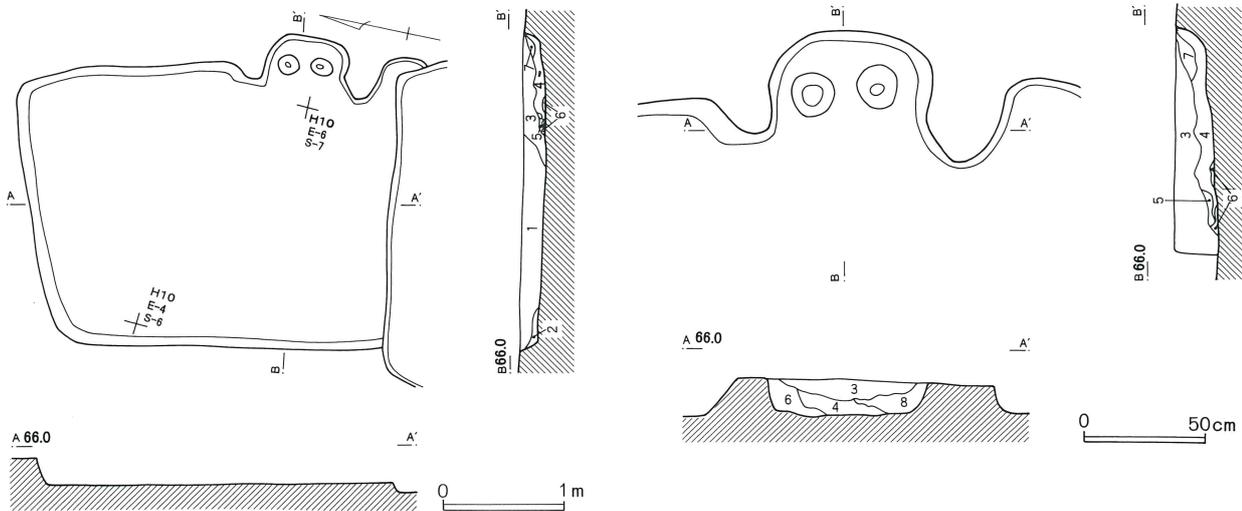
主軸方位は、N-72°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、短く住居内に伸びていた。燃

第115表 第67号住居跡出土遺物観察表

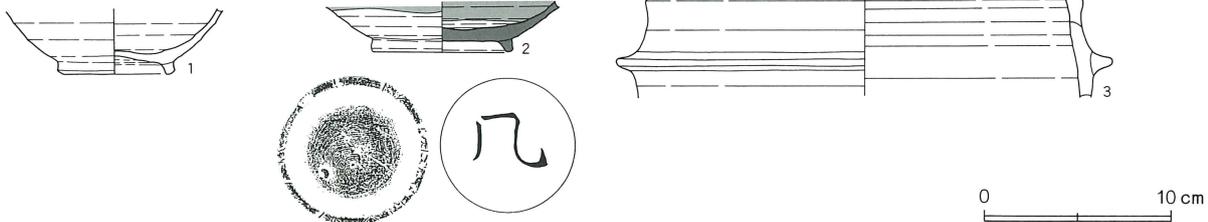
番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS				9.4	B, E, H	良好		灰白	30	
2	甕 B III a	H	19.1				B, E, H	良好		にぶい黄橙	20	SK-303

第146図 第68号住居跡・出土遺物



第68号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土、炭化物、白色粒子を少量含む
- 2 暗褐色土 焼土を微量に含み、白色粒子を多量に含む
- 3 暗褐色土 焼土、炭化物を多量に含み、白色粒子を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを多量に含み、炭化粒子を少量含む
- 5 明褐色土 焼土層
- 6 黒褐色土 焼土粒子を少量含む（炭化物層）
- 7 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 8 暗褐色土 焼土、炭化粒子、灰色粘土ブロック、白色粒子を少量含む



焼部の掘り込みはみられず、燃焼部の奥に、径0.18mの支脚抜き痕跡を並んで検出した。二つ掛けカマドと考えられる。

遺構の切り合い関係は、第70号住居跡よりも古く、第279号土壌より新しかった。

1は、須恵器（NS）の高台付椀である。1は、口縁部が欠損している。

2は、灰釉陶器の高台付椀である。底部外面には、墨書「几」がみられる。2は、口縁部が欠損している。

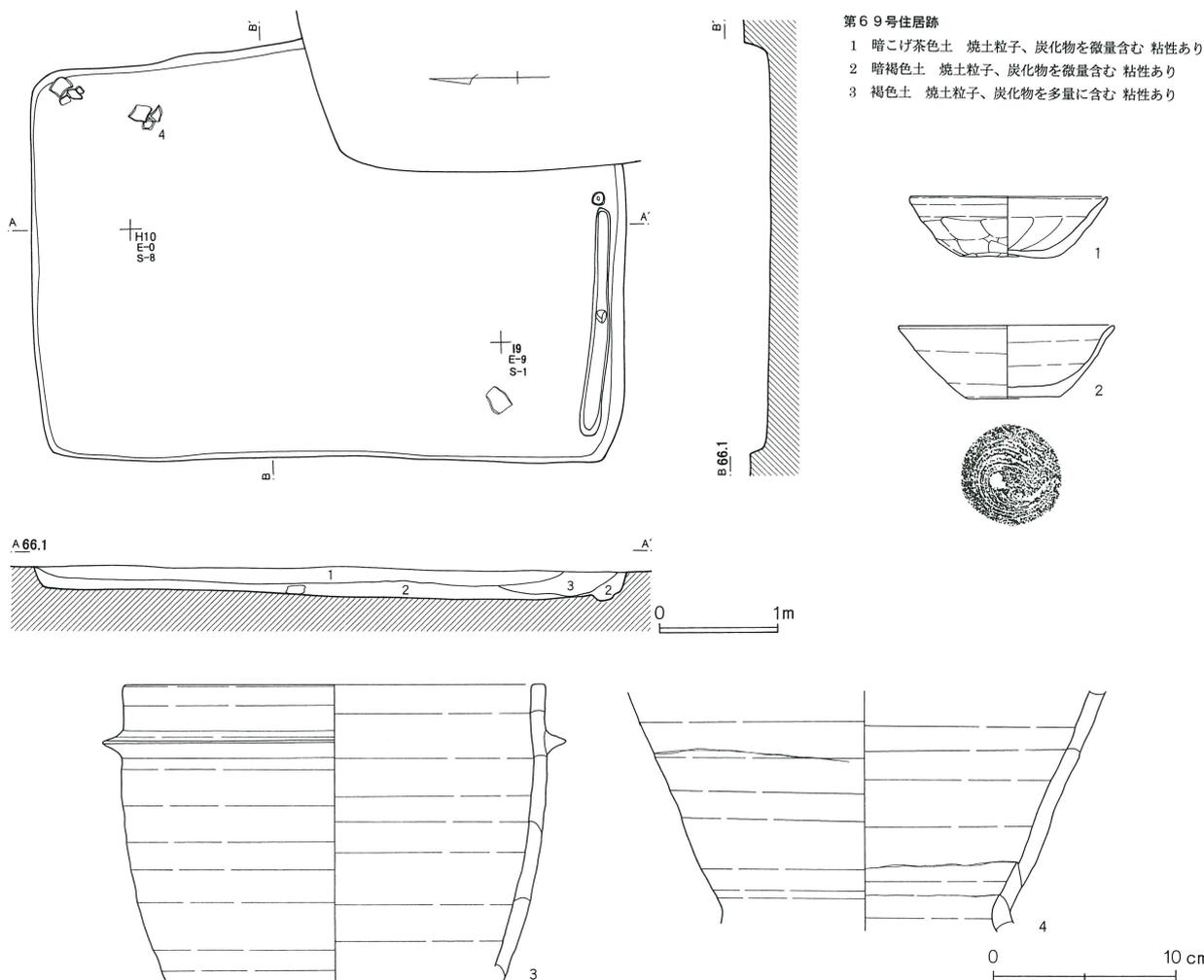
3は、須恵器（NS）の羽釜である。3は、胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第68号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第116表 第68号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS				5.5	B, E, I	普通		黄 灰	30	
2	高台付椀	K				7.0	B, D	良好		黄 淡 灰	30	
3	羽A I a 口	NS	22.9		3.4		B, E	良好		灰 白	10	

第147図 第69号住居跡・出土遺物



第69号住居跡（第147図）

H・I-9・10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壌など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は長方形であった。規模は、長辺4.85m・短辺3.38m・深さ0.20mであった。南壁に幅20cmの壁溝を検出した。

主軸方位は、N-90°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りにあったと推定されるが、第72号住居跡に破壊され、確認できなかった。

遺構の切り合い関係は、第72号住居跡より古かった。

遺物は、北東隅から甌（4）が出土した。

1は、土師器の坏Bである。

2は、須恵器（NS）の椀である。

3は、須恵器（NS）の羽釜である。4は、須恵器（NS）の甌である。3は胴部下位以下、4は胴部中位以上と底部が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第69号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第70号住居跡（第148図）

H・I-10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壌など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.51m・短辺2.75m・深さ0.15mであった。

主軸方位は、N-82°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに二基並び検出した。覆土の堆積状況から二基のカマドは、住居跡の埋没まで併用されていたと考えられる。

1号カマドの右袖は、2号カマドと共有していた。しかし1号カマドは袖を造らないカマドと考えたい。燃焼部の掘り込みは、みられなかった。

2号カマドは、地山を掘り残して右袖を造り、住居跡内に短く伸びていた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。焚き口部の左寄りには、径0.2m・深さ0.05mの浅い小穴を検出した。また、焚き口部の前面から、長径0.4m・短径0.31m・深さ0.1mの楕円形の掘り込みを検出した。覆土内からは、多量の炭化物を出土した。

遺構の切り合い関係は、第65・67・68号住居跡より新しかった。

第117表 第69号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B	NS	10.7	3.4		5.0	B, D, E	普通	暗橙	100	
2	椀		NS	11.6	3.9		5.0	B, E, H, K	良好	灰	70	
3	甌	B II	NS	22.8		3.1		A, B, E, H	良好	外-浅黄橙。 内-灰	15	
4	甌		NS					A, B, E, H	良好	灰	25	

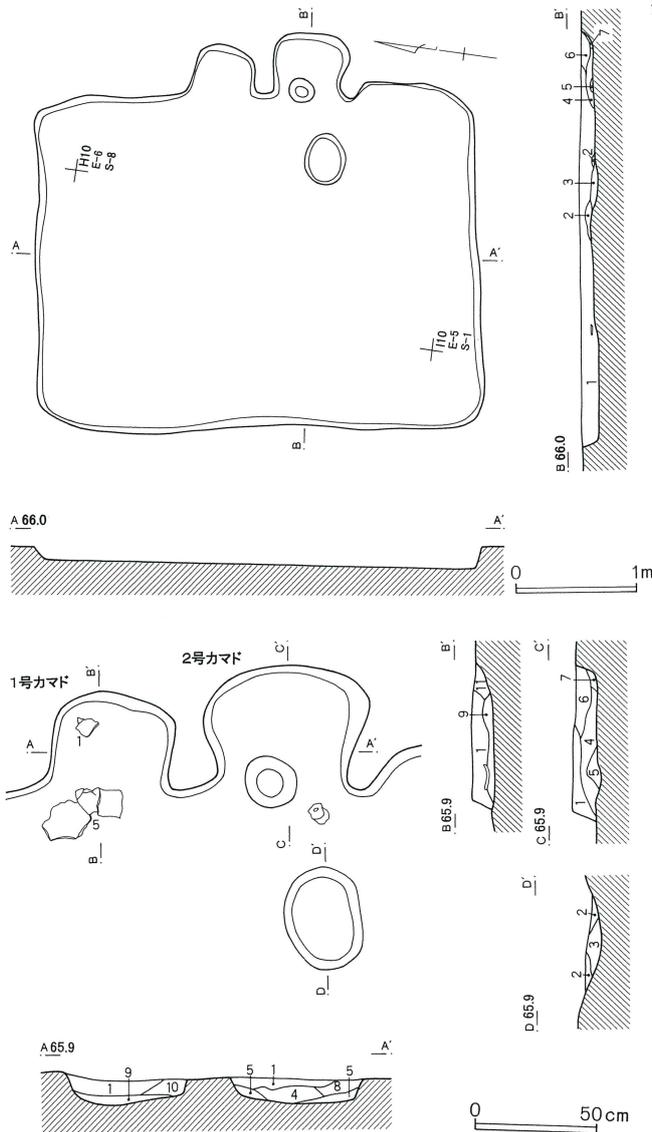
第118表 第70号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	14.5				B, E	普通		にぶい黄橙	20	カマド
2	円板	K					B, D	良好		淡灰	100	
3	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
4	甌 A III c	HS	18.0				B, E, H	良好		橙	15	
5	羽 A I a イ	HS	27.3		2.8		B, E, G	良好		にぶい黄橙	40	カマド

第119表 第70号住居跡出土土錘観察表

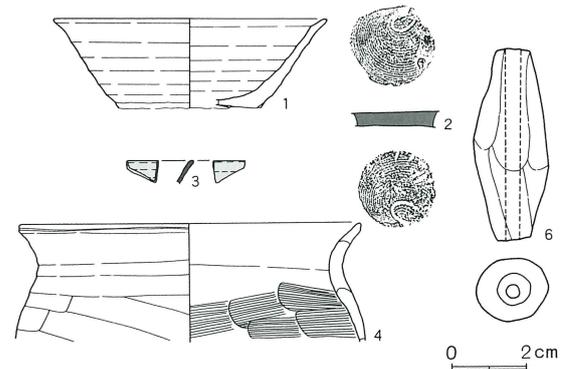
番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
6	にぶい橙	100	5.1	1.9	0.3	15.3	B 1	I a	54	

第148図 第70号住居跡・出土遺物



第70号住居跡

- | | | | | | |
|--------------------------------|-------------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|
| 1 褐色土 焼土粒子、白色粒子を少量含み、炭化粒子を微量含む | 2 暗褐色土 焼土を微量含み、炭化粒子を多量に含み、白色粒子を少量含む | 3 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含み、灰を多量含む | 4 褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを多量に含み、炭化粒子を微量含む | 5 褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む | 6 褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを多量に含み、白色粒子を少量含む |
| 7 褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む | 8 黒褐色土 焼土粒子を少量含み、炭化粒子を多量に含む | 9 灰褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを多量に含み、炭化粒子を少量含む | 10 褐色土 焼土ブロックを少量含み、白色粒子を微量含む | 11 灰褐色土 焼土ブロックを多量に含み、白色粒子を少量含む | |



式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第71号住居跡 (第149図・第150図)

I-10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壌など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.50m・短辺2.55m・深さ0.29mであった。

主軸方位は、N-72°-Eであった。

東壁の南東隅に並んだ二基のカマドを検出した。2号カマドは、覆土の堆積状況から、住居跡の埋没より早く埋没しており、1号カマドから2号カマドへ付け

遺物は、1号カマド内から須恵器の高台付椀(1)・羽釜(5)が出土した。

1は、須恵器(HS)の高台付椀である。1は、底部と高台が欠損している。

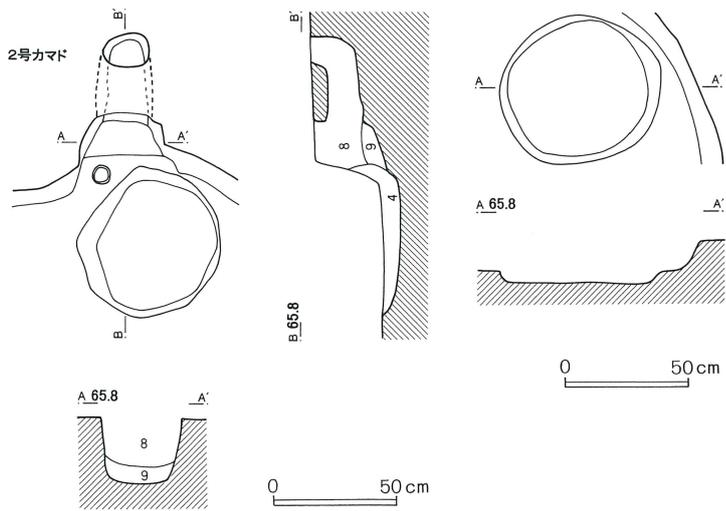
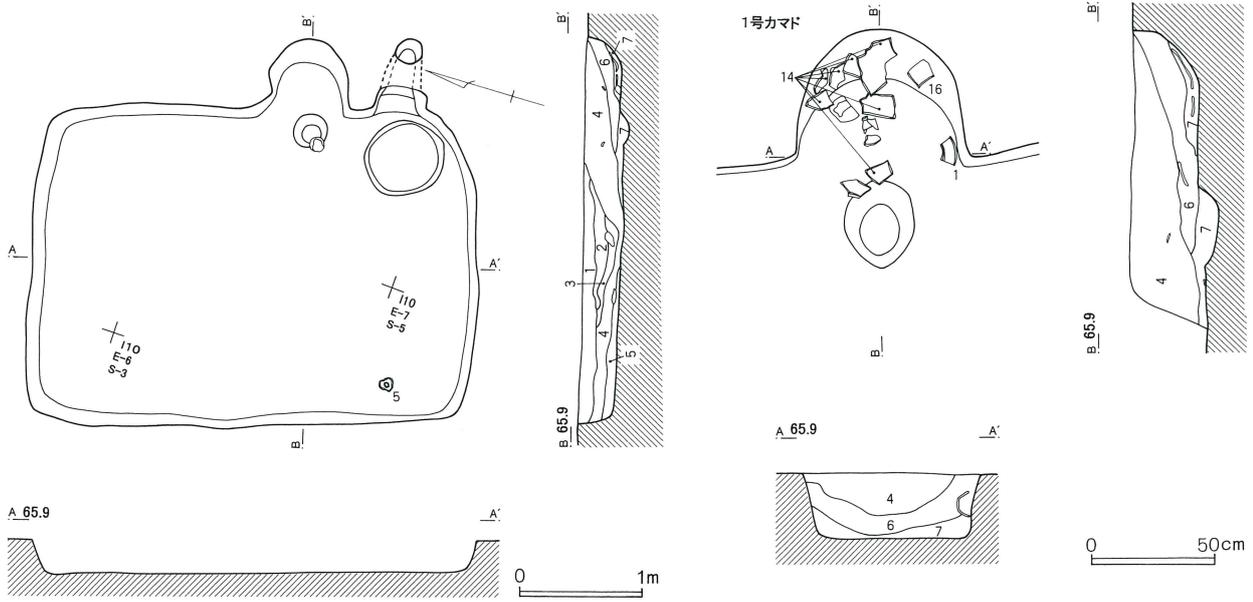
2は、灰釉陶器の完形の円板である。3は、緑釉陶器の高台付椀である。3は、口縁部破片である。

4は、土師器の甕である。5は、須恵器(HS)の羽釜である。4は胴部上位以下、5は底部が欠損している。

6は、土錘である。

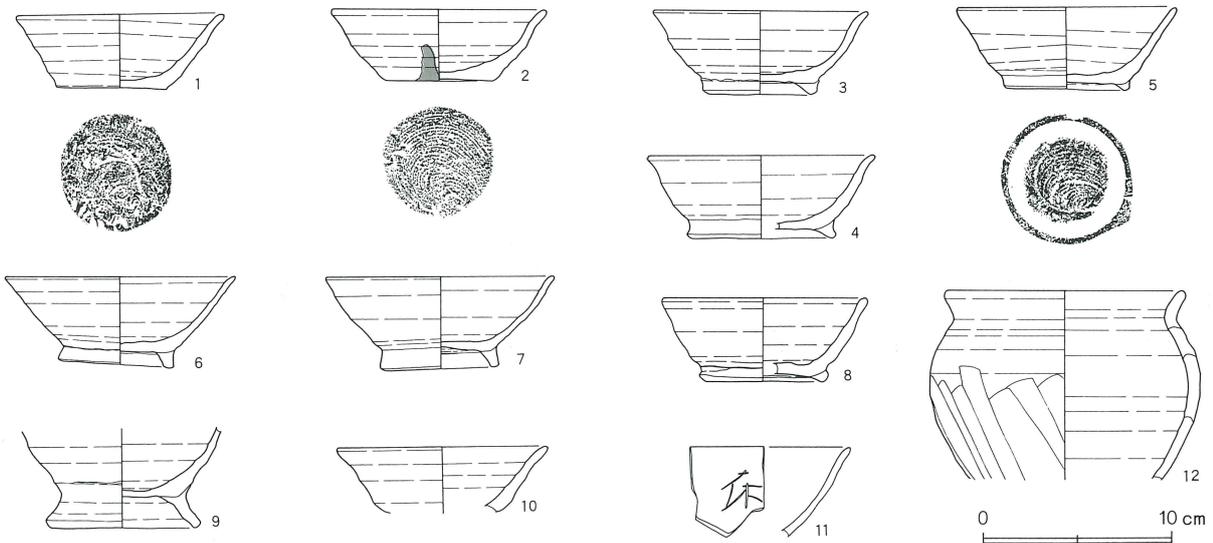
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第70号堅穴

第149図 第71号住居跡・出土遺物（1）

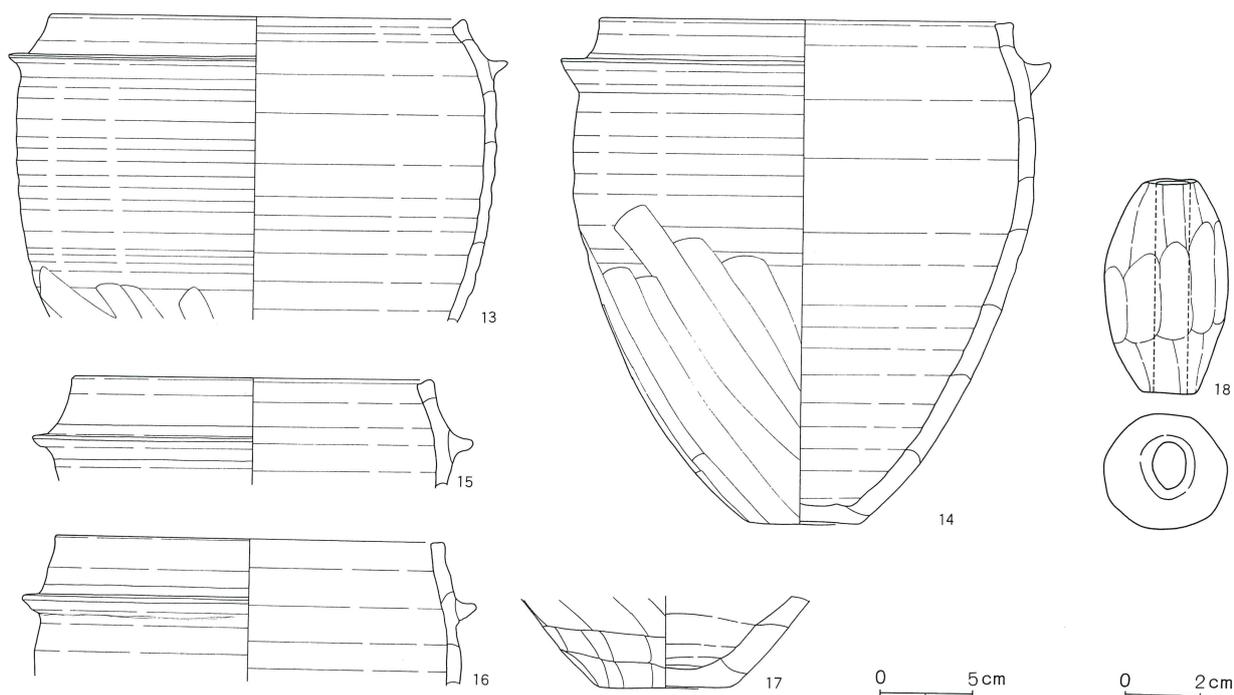


第71号住居跡

- 1 こげ茶色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む
- 2 黒色土 炭化物層 粘性あり
- 3 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
- 4 褐色土 粘性あり
- 5 灰褐色土 焼土、炭化物を微量含む
- 6 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を微量含む
- 7 褐色土 焼土粒子、炭化物を多量に含む
- 8 黄褐色土 焼土粒子を多量に含み、白色粒子を少量含む
- 9 灰黄褐色土 焼土粒子を多量に含む 砂質



第150図 第71号住居跡出土遺物（2）



替えたと推定した。

1号カマドの袖は、検出できなかった。燃焼部の掘り込みはなかったが、焚き口部の前面には、径0.36m・深さ0.11mの掘り込みを検出した。覆土中から多量の焼土や炭化物が出土した。

2号カマドの袖は、1号カマドの付け替え時点で除去されていたため、検出できなかったと判断した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部へは、小さく段をもって移行していた。煙道部は、長さ0.24mと短く、煙り出し部は垂直に立ち上がっていた。

1号カマドに対応した貯蔵穴を、2号カマド前面で検出した。形状は円形で、径0.64m・深さ0.06mであった。

遺構の切り合い関係は、第65・67号住居跡、第283号土壇より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の坏（1）・羽釜（14・16）が出土した。また南西隅から須恵器の高台付碗（5）が出土した。

1・2は、碗である。3から8・10・11は、高台付

碗である。9は、高脚高台付碗である。2・8は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。11には、刻書「床」がみられる。4・8は底部、9は口縁部、10・11は底部と高台が欠損している。2は、外面体部から底部にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

12は、須恵器（HS）の甕である。13から17は、羽釜である。14・15は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。12・13は胴部下位以下、15・16は胴部上位以下が欠損している。17は、底部のみである。

18は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第71号竪穴式住居跡を中堀区期に位置付けたい。

第72号住居跡（第151図）

H・I-10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壇など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、やや不整形な方形で、規模は、長辺3.26m・短辺2.90m・深さ0.20mであった。カマドの左側東壁に沿って長さ1.7m・幅0.53m・床面から

第120表 第71号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他	
1	椀	HS	10.8	4.0		5.8	B, E	普通		にぶい黄橙	100	カマド	
2	椀	NS	11.0	3.8		5.5	B, E	普通		黒 褐	50		
3	高台付椀	HS	11.2	4.4		5.4	B, E, G	普通		黄 灰	25		
4	高台付椀	HS	11.8	4.4		7.5	B, E	普通		にぶい黄橙	40		
5	高台付椀	HS	11.4	4.4		6.2	B, E	普通		にぶい黄橙	90		
6	高台付椀	HS	12.0	4.9		5.7	B, I	普通		にぶい黄橙	50		
7	高台付椀	HS	12.0	5.0		5.8	B, I	普通		にぶい 橙	50		
8	高台付椀	NS	10.7	4.4		6.0	B, E	良好		灰 白	20		
9	高足高台付椀	HS				7.6	B, E, G, I	良好		にぶい黄橙	40		
10	高台付椀	HS	10.9				B, E, I	良好		灰 黄 褐	25		
11	高台付椀	HS					B, C, E	良好		灰 白			
12	ロクロ甕	HS	12.7				B, C, E, H	良好		灰 褐	50		
13	羽AIIaイ	HS	21.8		2.3		B, E, G, H	良好		浅 黄 橙	25		1号カマドA
14	羽AIIaイ	NS	21.5		2.3		B, E, H	良好		灰 白	30		1号カマドA
15	羽AIIaロ	NS	18.6				B, H	良好		灰 白	25		
16	羽BIIa	HS	20.3		3.4		B, E, H	良好		橙	20		1号カマドA
17	羽釜	HS				6.7	B, E	良好		外-橙。内-淡黄	30		

第121表 第71号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
18	橙	100	5.5	3.2	1.2	53.9	A1	Ia	8	

の高さ0.11mの棚状の施設を検出した。また住居跡の南西隅からは、径0.22mの小穴を1基検出した。

主軸方位は、N-84°-Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られていた。燃焼部は、幅0.25mと狭く、煙道部に向かい、緩やかに傾斜しながら段をもって移行していた。煙道部は、長さ0.65mと細長く、煙り出し部は、斜めに立ち上がっていた。

遺構の切り合い関係は、第65・66・69号住居跡よりも新しかった。

遺物は、住居跡の南西隅の小穴内から鉋（4）が出土した。

1・2は、須恵器（HS）の高台付椀である。1は底部と高台、2は口縁部が欠損している。

第122表 第72号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	13.6				B, C, E	良好		淡 橙	20	底部-100 カマド
2	高台付椀	HS				6.0	B, C, H	良好		淡 橙	30	
3	羽BIIa	HS	20.2		3.0		B, E	良好		橙	15	

3は、須恵器（HS）の羽釜である。3は、胴部中位以下が欠損している。

4は、鉋と考えられる。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第72号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

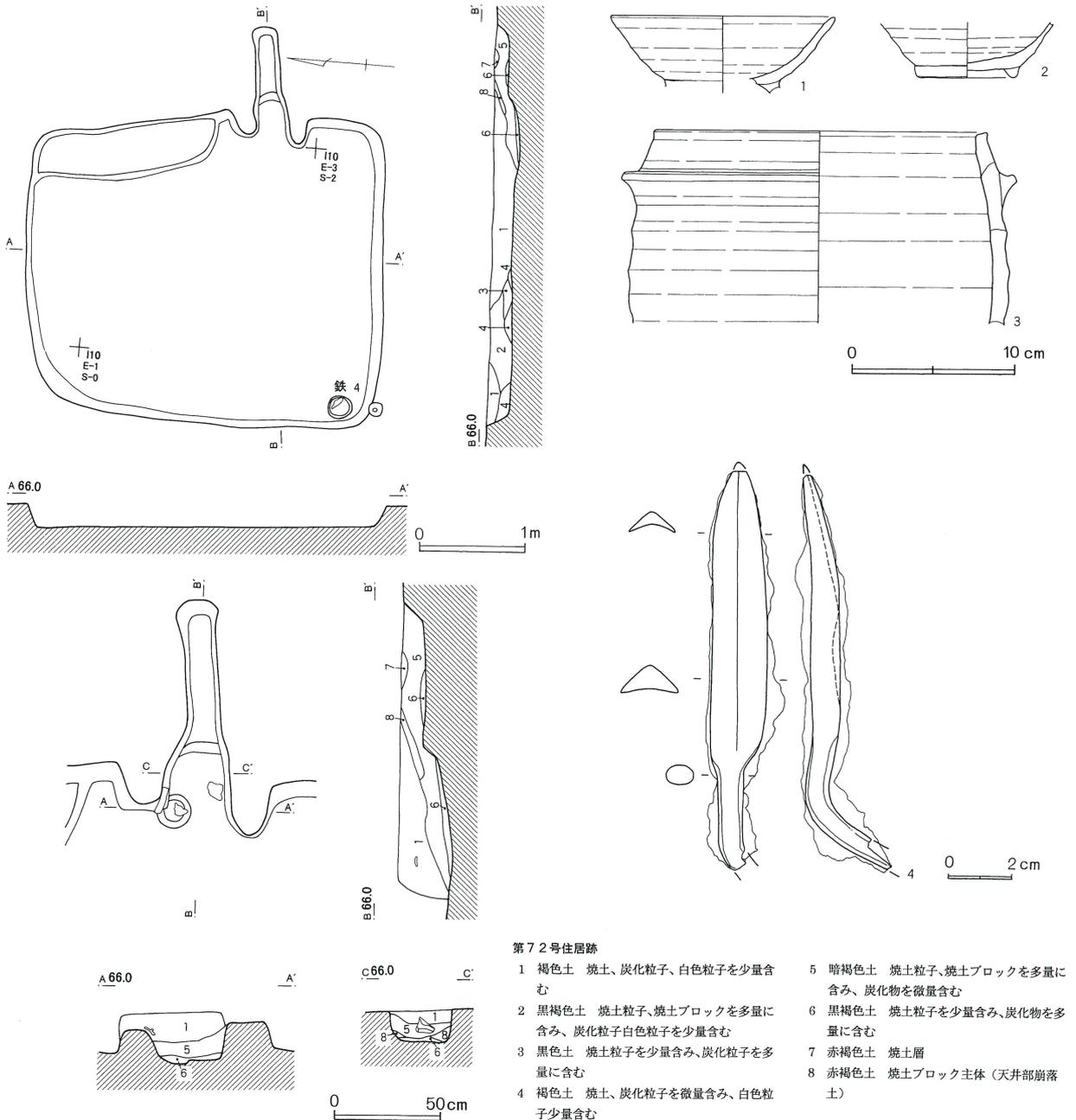
第73号住居跡（第152図）

I・J-10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壌など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、住居跡の西側が第75号住居跡によって破壊されていたため、長辺の長さは不明だが、短辺3.10m・深さ0.35mであった。南壁と北東隅に幅34cmの壁溝を検出した。

主軸方位は、N-75°-Eであった。

第151図 第72号住居跡・出土遺物



第72号住居跡

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 1 褐色土 焼土、炭化粒子、白色粒子を少量含む | 5 暗褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを多量に含み、炭化物を微量含む |
| 2 黒褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを多量に含み、炭化粒子白色粒子を少量含む | 6 黒褐色土 焼土粒子を少量含み、炭化物を多量に含む |
| 3 黒色土 焼土粒子を少量含み、炭化粒子を多量に含む | 7 赤褐色土 焼土層 |
| 4 褐色土 焼土、炭化粒子を微量含み、白色粒子少量含む | 8 赤褐色土 焼土ブロック主体（天井部崩落土） |

カマドは、東壁のやや南よりに検出した。左右の袖ともに、地山を掘り残し構築していた。住居跡の内へ0.4m伸び、燃焼部の全体も住居跡内に造られていた。燃焼部の掘り込みはみられず、段をもって細長い煙道部に移行していた。

貯蔵穴は、カマドの右脇の南東隅で検出した。形状は、不整楕円形であった。規模は、長径0.91m・短径0.65m・深さ0.08mであった。

遺構の切り合い関係は、第7号住居跡よりも古く、第74号住居跡より新しかった。

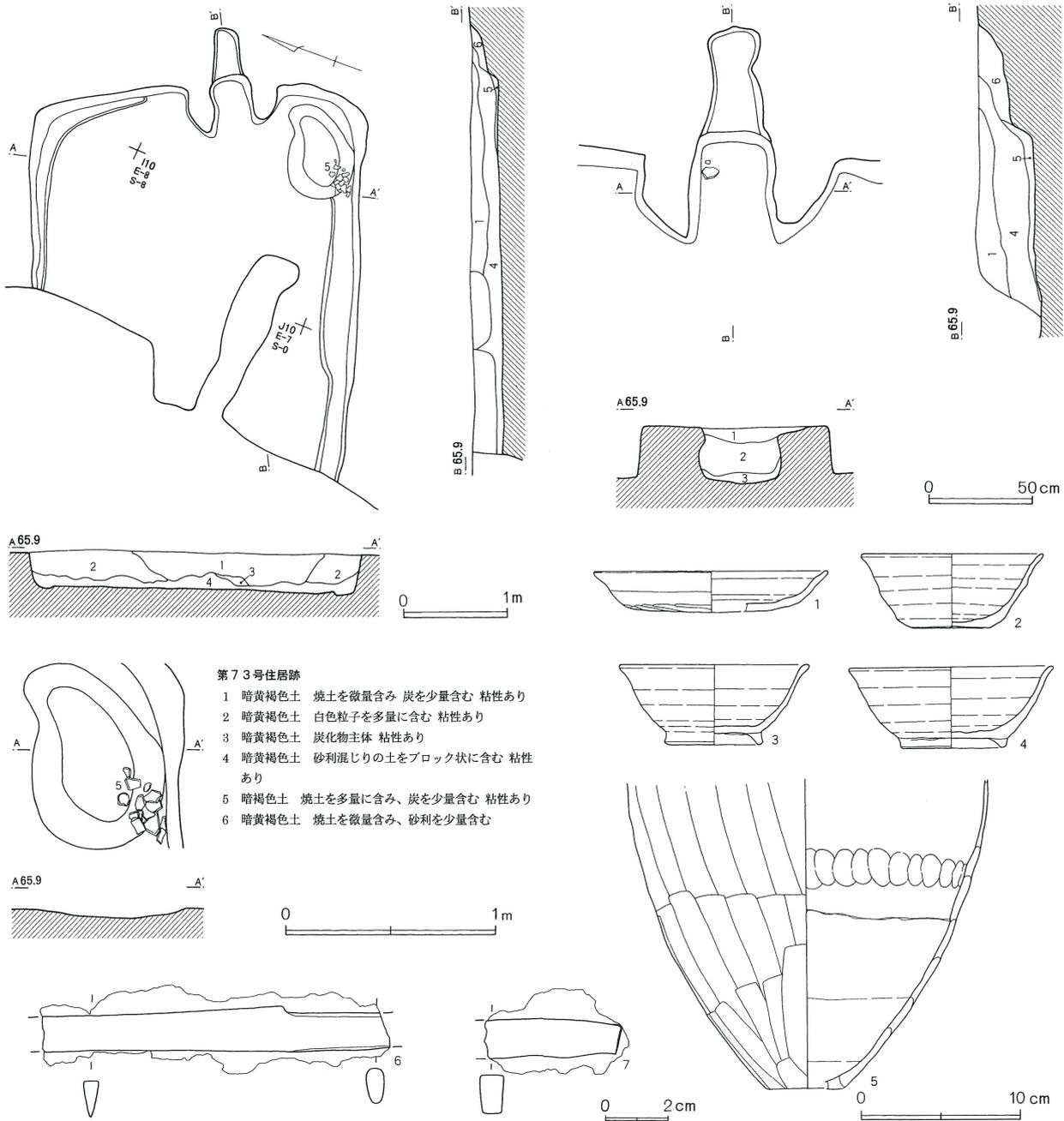
遺物は、貯蔵穴内から土師器甕（5）が出土した。

1は、土師器の皿である。1は、底部が欠損している。

2は、須恵器（NS）の碗である。3・4は、須恵器（HS）の高台付碗である。

5は、土師器の甕である。5は、胴部上位以上と底

第152図 第73号住居跡・出土遺物



第123表 第73号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	皿	H	14.3	2.5		7.4	B, D, E	普通		暗橙	20	
2	椀	NS	11.3	4.6		4.8	B, E	良好		灰白	80	
3	高台付椀	NS	11.6	4.9		5.5	B, E	普通		灰黄	30	
4	高台付椀	NS	12.5	5.0		6.2	B, E	良好		にぶい黄橙	60	
5	甕	H				4.6	B, E	良好		浅黄橙	100	

部が次損している。

6・7は、鉄製品である。6は刀子、7は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第73号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第74号住居跡（第153図）

I・J-10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壇など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の大部分を第75号住居跡が破壊していたため、形状など全容は不明であった。東辺の長さ3.24m・深さ0.19mであった。

主軸方位は、N-90°-Eであった。

カマドは、東壁のほぼ中央で検出した。残存状態が悪く、不明な点が多い。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第73.75号住居跡より古かった。

1は、灰釉陶器の高台付椀である。底部外面に墨書「平」がみられる。

2は、土師器の甕である。2は、胴部中位以上と脚部が次損している。

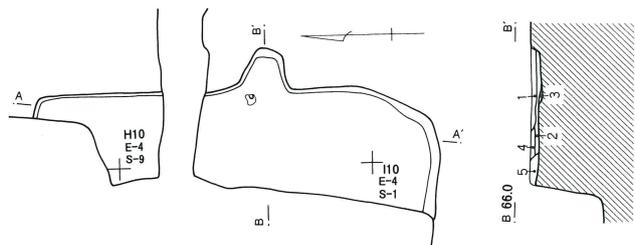
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第74号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第75号住居跡（第154図・第155図・第156図・第157図・第158図）

I・J-9・10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壇など激しく重複していた。覆土上層の火山灰を含む黒褐色土が堆積していたため、比較的容易に確認できた。

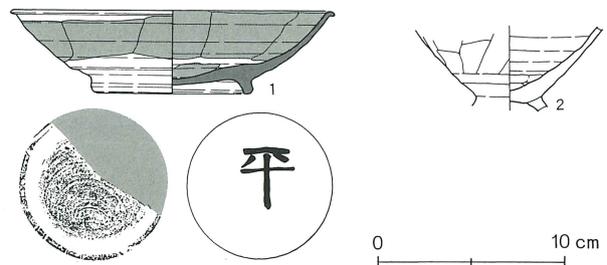
住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺

第153図 第74号住居跡・出土遺物



第74号住居跡

- 1 暗黄褐色土 焼土を少量含む
- 2 暗褐色土 炭主体
- 3 赤褐色土 炭を少量含む（焼土層）
- 4 暗黄褐色土 白色粒子、小砂利を多量に含む
- 5 暗黄褐色土 炭を少量含む



7.05m・短辺4.85m・深さ0.70mと大規模なものであった。幅36cmの壁溝を、南東隅と南西隅を除き検出した。またカマド左側の東壁に沿って、長さ2.1m・幅0.66m・床面からの高さ0.12mの棚状の施設を検出した。

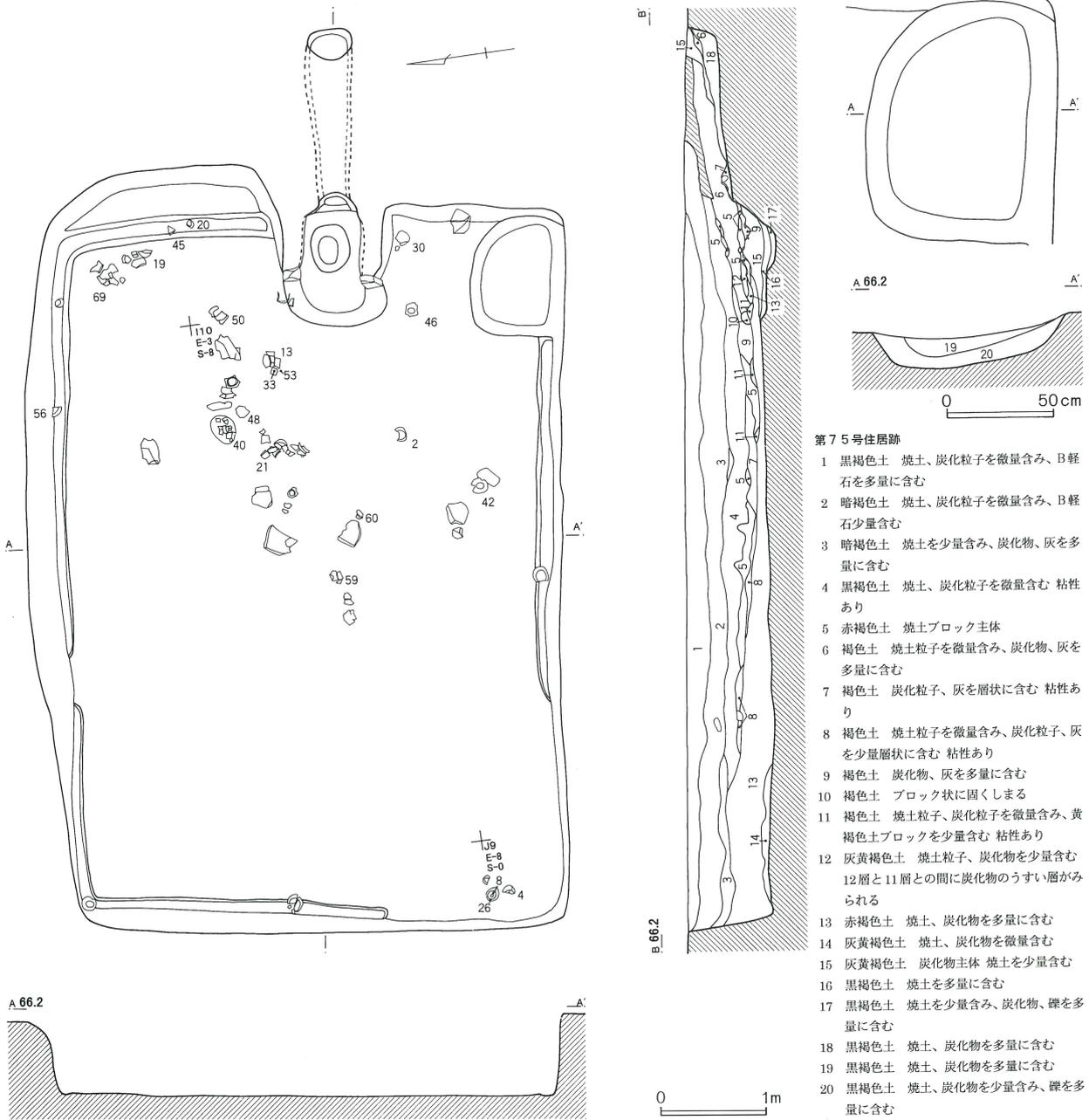
主軸方位は、N-98°-Eであった。

カマドは、東壁のほぼ中央で検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内に0.8mと長く伸びていた。両袖の先端には、凝灰岩の切石が補強材として使用されていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、隅丸方形の浅い掘り込みがあり、燃焼部の中央にも長径0.44m・深さ0.1mの楕円形の掘り込みを検出

第124表 第74号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鋳	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	K	11.8	4.3		7.8	D	良好		淡緑灰	80	墨書
2	台付甕脚	H					C	普通		暗茶褐	10	カマド

第154図 第75号住居跡



した。燃焼部の全体が住居跡内に造られ、火床面は、燃焼部から急激に立ち上がり煙道部へ移行していた。煙道部は、長さ1.66mと長大で、地山を掘り抜いて造られていた。煙り出し部へは、緩やかに傾斜し、ほぼ垂直に立ち上がる。

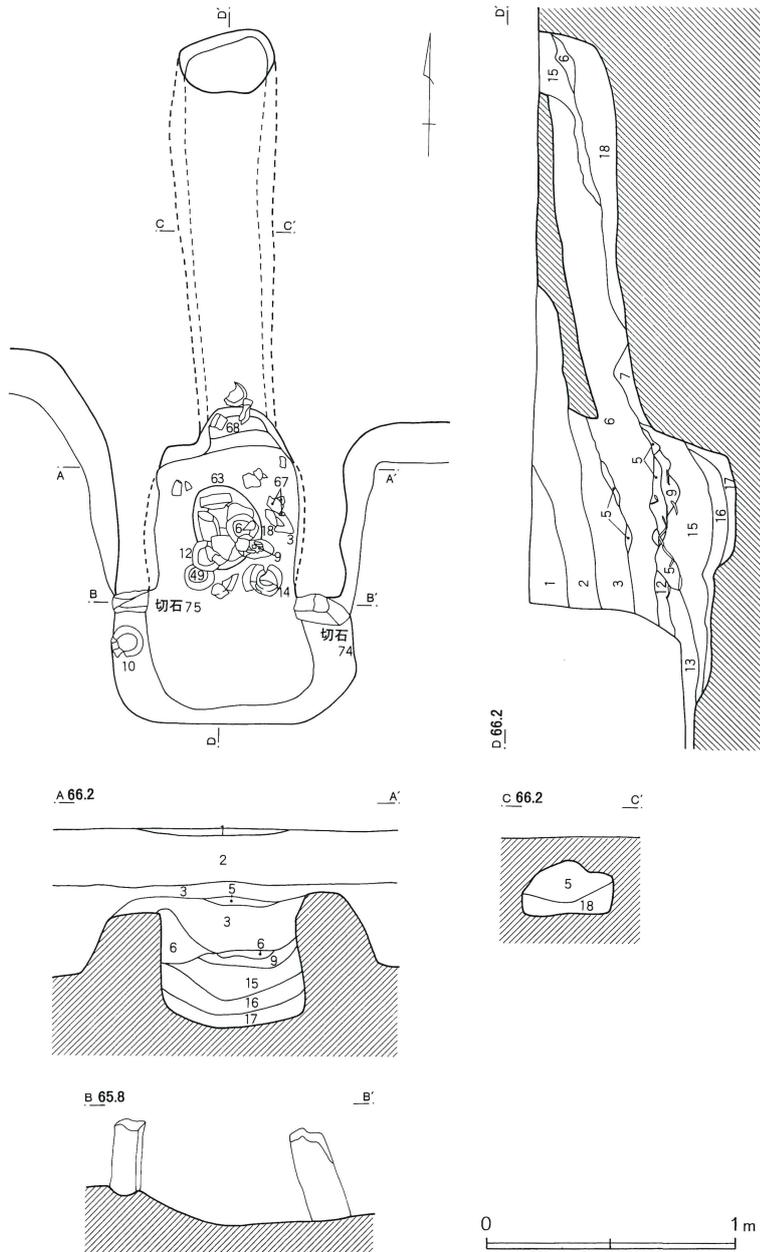
貯蔵穴は、カマド右側の南東隅で検出した。形状は、不整長方形であった。規模は、長径1.1m・短径0.88m・深さ0.14mであった。

遺構の切り合い関係は、第76・77号住居跡より古く、

第73・74号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏(3・6・9・12・14・18)・須恵器の高台付皿(49)・土師器の甕(63・67)が、左袖前面から土師器の坏(10)が出土した。そのほか、住居北東付近で土師器の坏(19・20)・須恵器の高台付碗(45)・大甕(69)が出土し、中央やや東寄りから、土師器の坏(13・21)・須恵器の坏(33・40)・須恵器の高台付皿(48)・須恵器の皿(50)が出土した。また住居跡の南西部から土師器の坏(4・

第155図 第75号住居跡カマド



8) 須恵器の坏 (26) がまとまって出土した。
 1から24は、土師器である。3・8・12・19から21は、坏A Vである。22から24は、皿である。ほかは、坏A IVである。
 25から40は、椀である。25から28は、須恵器 (S) である。30・32・35・37・40は、須恵器 (NS) である。41から47は、須恵器 (NS) の高台付椀である。48・49は須恵器 (NS) の高台付皿である。50から52は、皿である。50は須恵器 (S)、51は須恵器 (HS)、

52は須恵器 (NS) である。53・54は、須恵器 (S) の蓋である。55は、内面に黒色の付着物のある須恵器 (S) の皿である。

56から61は、灰釉陶器の高台付椀である。

62から68は、土師器の甕である。68は胴部下位以上と底部が欠損している。62は、脚部のみである。

69は、須恵器 (HS) の大甕である。69は、口縁部のみである。

70は、蓋か甕の把手である。

71から73は、土錘である。

74・75は、凝灰岩の切石である。

76から82は、鉄製品である。76は刀子、77は刀子の茎部と考えられる。78・79は棒状鉄製品、80・81・82は板状及び延板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第75号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第76号住居跡 (第159図)

I-9・10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壇など激しく重複し、確認に手間取った。第75号住居跡の調査中に川原石がまとまって出土し、カマドの構築材と判断した

ことで確認した。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.45 m・短辺2.60 m・深さ0.40 mであった。

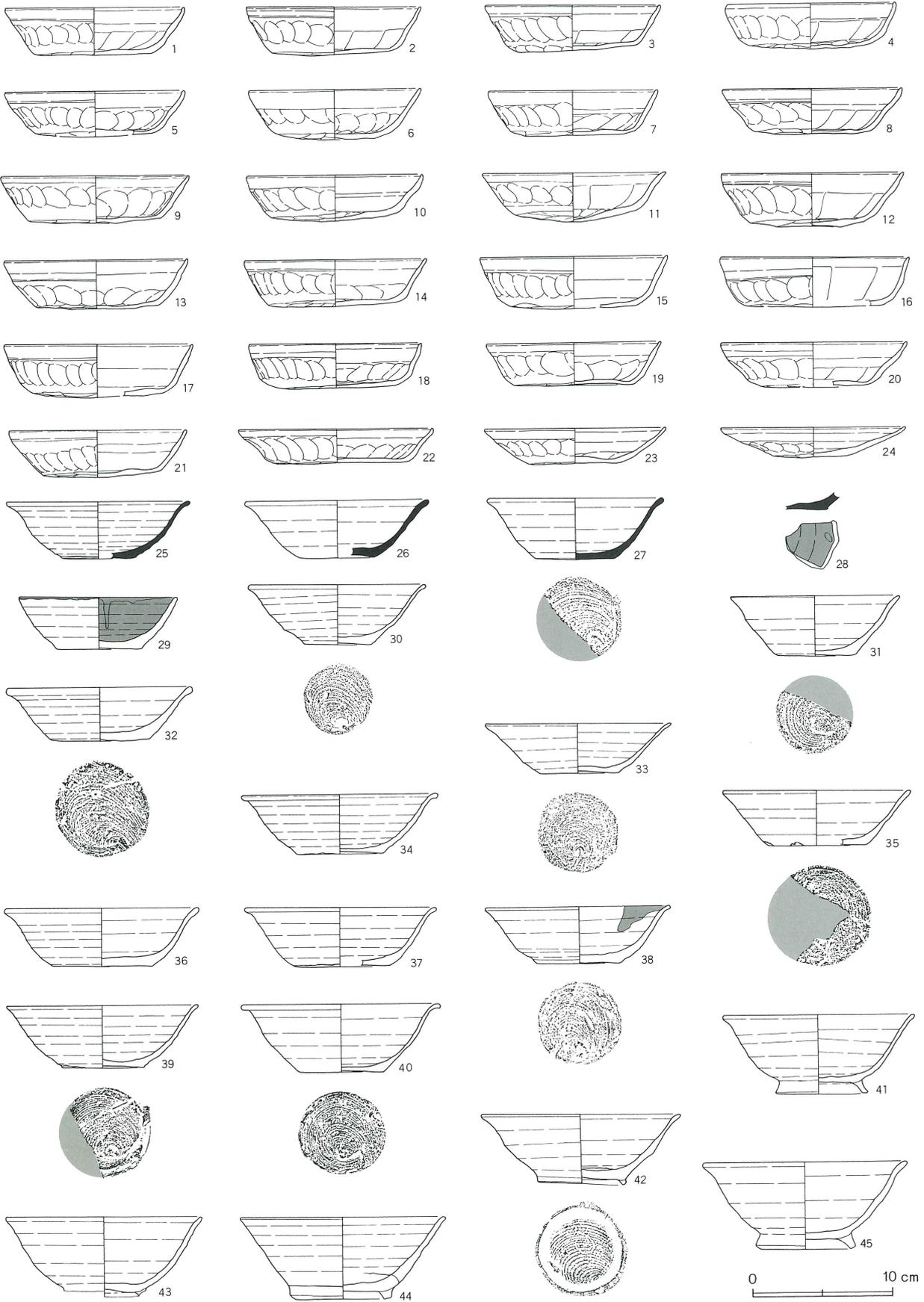
主軸方位は、N-99°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに確認した。前述のように重複のため詳細は明らかにできなかった。

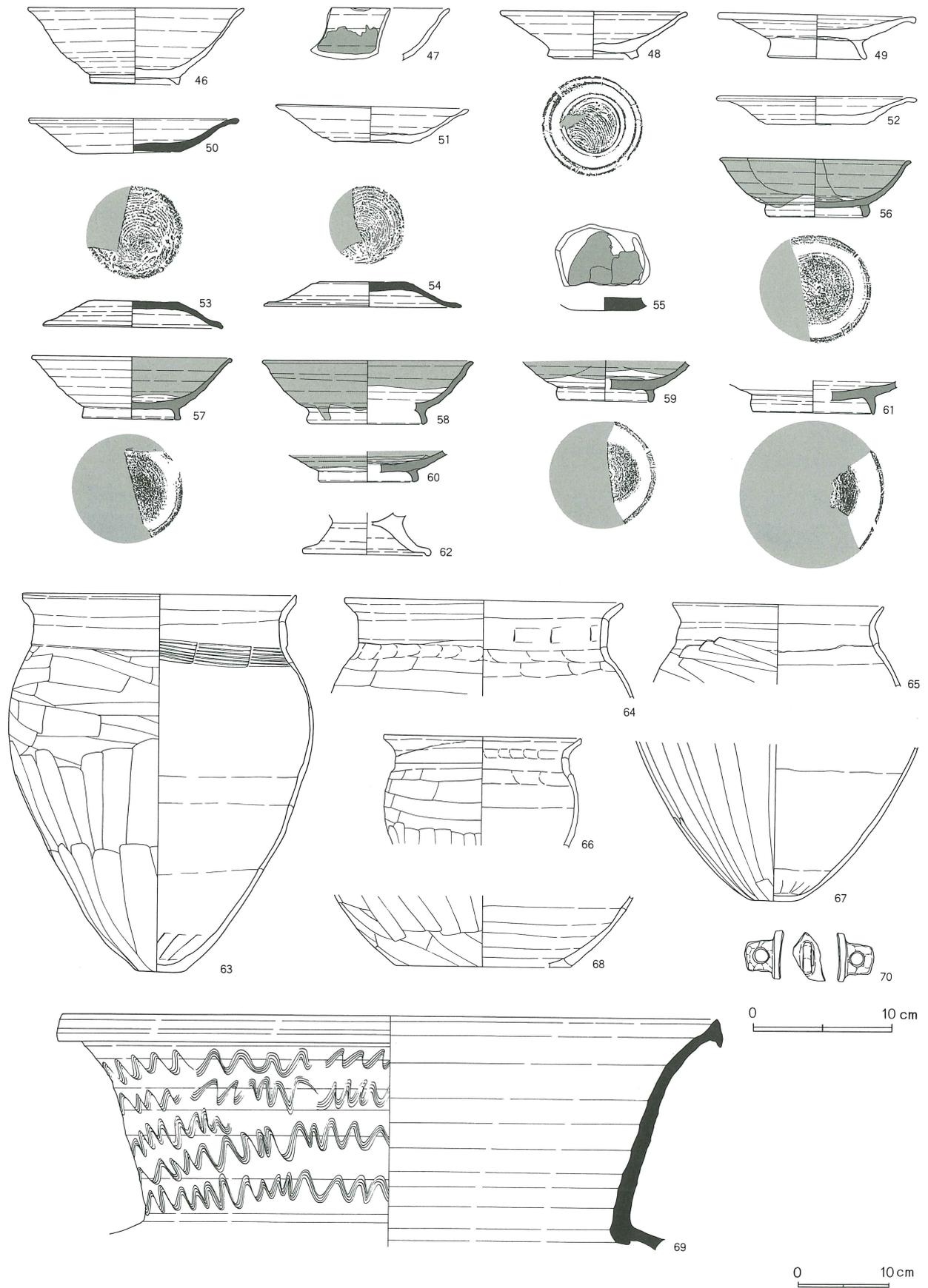
遺構の切り合い関係は、第75号住居跡より新しかった。

1・2は、土師器の坏Bである。1・2は、底部が

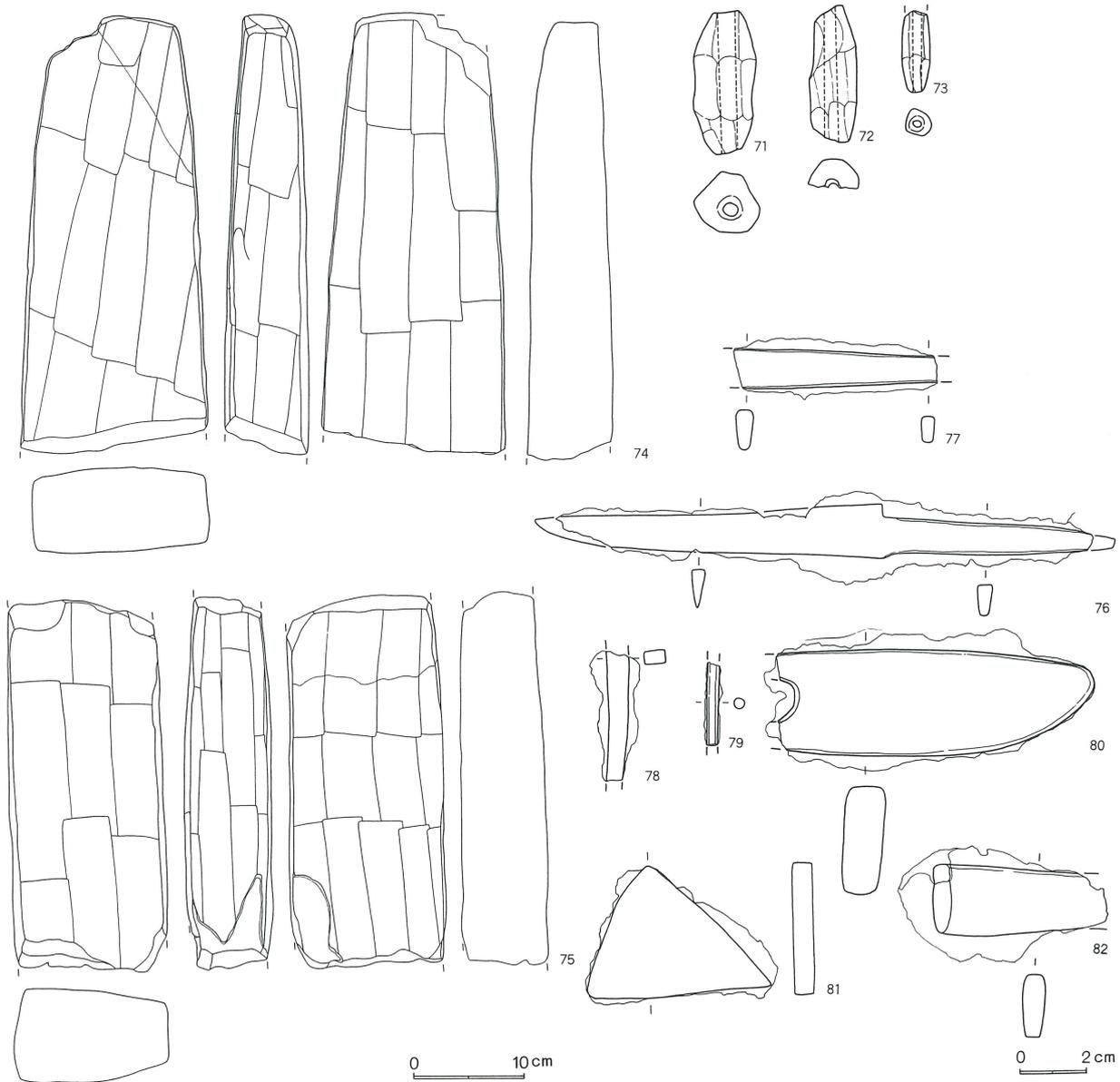
第156图 第75号住居跡出土遺物(1)



第157図 第75号住居跡出土遺物（2）



第158図 第75号住居跡出土遺物（3）



第125表 第75号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A IV	H	12.6	3.4	8.1	B, E, G	普通		淡 橙	90	カマド
2	坏	A IV	H	12.4	3.5	8.5	A, J	良好		淡 橙	90	
3	坏	A V	H	12.4	3.4	8.4	B, E			淡 茶	60	
4	坏	A IV	H	11.8	3.3	8.7	B	普通		淡 橙	60	
5	坏	A	H	12.6		7.7	B, E	普通		暗 栗	30	
6	坏	A IV	H	12.1	3.6	5.5	B, E	普通		暗 橙	90	
7	坏	A IV	H	11.9	3.2	6.9	B, D, E	普通		淡 黄 橙	30	
8	坏	A V	H	12.6	3.2	5.8	B, E	良好		淡 橙	80	
9	坏	A IV	H	13.2	3.4	9.4	B, E	普通		淡 黄 褐	90	
10	坏	A IV	H	12.3	3.3	6.5	B, E	不良		淡 黄 褐	80	
11	坏	A IV	H	13.0	3.5	6.8	B, D, E	良好		明 橙	80	
12	坏	A V	H	12.8	3.8	4.6	B, D, E	良好		淡 橙	100	

第126表 第75号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	齔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
13	坏 A	IV	H	12.8	3.5	8.7	B, E	普通		淡 橙	90	
14	坏 A	IV	H	12.8	3.4	8.8	B, E	良好		濃 茶	100	カマド
15	坏 A	IV	H	13.1	3.7	8.8	B, E	普通		淡 黄 橙	40	
16	坏 A	IV	H	13.3		9.4	B, E	不良		暗 栗	30	
17	坏 A	IV	H	13.1	3.8	9.2	B, E	普通		淡 白 橙	40	
18	坏 A	IV	H	12.1	3.2	7.8	B, D, E	不良		暗 栗	60	カマド
19	坏 A	V	H	12.2	3.0	8.4	B, E	普通		明 橙	60	
20	坏 A	V	H	13.1	3.2	7.7	B, E, F	不良		淡 黄 橙	40	
21	坏 A	V	H	12.4	3.4	8.3	B, E	普通		淡 橙	80	
22	皿	H	H	13.6	2.5	9.6	B, C, E	普通		明 橙	40	
23	皿	H	H	12.7	2.6	6.4	B, E	普通		明 橙	30	
24	皿	H	H	12.9	2.2	5.5	C, E, H	良好		淡 橙	40	
25	椀	S	S	12.3	4.1	4.7	B	良好		淡 黄 灰	30	
26	椀	S	S	12.7	4.1	5.2	B, D	良好		灰 白	25	
27	椀	S	S	12.2	4.4	5.5	B	良好		灰	30	
28	椀	S	S				B	良好		灰	5	
29	椀	HS	HS	11.0	3.7	6.1	B, E, I	普通		内-褐灰。 外-にぶい 橙	30	
30	椀	NS	NS	12.3	4.3	4.6	B, C, H, K	良好		灰 白	80	
31	椀	HS	HS	11.8	4.2	5.1	B, E	良好		浅 黄 橙	25	
32	椀	NS	NS	12.7	3.8	6.4	B, C, H	良好		灰 白	70	
33	椀	HS	HS	13.0	3.5	5.6	C, G	普通		外-浅黄。 内-灰	50	
34	椀	HS	HS	13.6	4.2	6.0	B, E, I	良好		にぶい 橙	40	
35	椀	NS	NS	13.1	3.9	6.9	B	良好		灰	40	
36	椀	HS	HS	13.5	4.2	7.2	B, C, H	良好		灰 褐	70	
37	椀	NS	NS	13.3	4.2	6.8	B, I	普通		灰	50	
38	椀	HS	HS	12.8	4.0	5.9	B, C, E	良好		灰 黄 褐	40	
39	椀	HS	HS	13.4	4.4	5.7	B, I	良好		にぶい 黄 橙	60	
40	椀	NS	NS	13.7	4.8	6.0	B, I	普通		灰 黄	50	
41	高台付椀	NS	NS	13.4	5.6	6.2	B	良好		灰 黄 白	95	
42	高台付椀	NS	NS	14.0	5.2	6.0	B, H	良好		灰 白	60	60
43	高台付椀	NS	NS	13.8			B, E	良好		黄 灰 白	40	
44	高台付椀	NS	NS	14.3	5.9	6.3	B, H	良好		灰 白	60	
45	高台付椀	NS	NS	14.3	6.2	6.4	B, E, I	普通		黄 灰 白	40	
46	高台付椀	NS	NS	15.3	5.5	6.2	B, E, H	良好		灰 白	70	
47	高台付椀	NS	NS				B, I	普通		灰 白	5	
48	高台付椀	NS	NS	13.1	3.4	5.6	B, E, H	良好		灰 白	70	
49	高台付皿	NS	NS	14.1	3.1	6.7	B	良好		灰	100	カマド
50	皿	S	S	14.7	2.6	7.4	B	良好		灰	75	
51	皿	HS	HS	13.5	2.6	5.3	B, E, H	良好		浅 黄 橙	40	
52	皿	NS	NS	13.6	2.0	7.0	B, D, G	良好		灰 白	40	
53	蓋	S	S	12.7	1.9	6.0	B, G	良好		灰	50	
54	蓋	S	S	13.9	1.8	6.3	B, G	良好		灰 黄 褐	15	
55	皿	S	S				3.3 B, D	良好		灰 白	50	
56	高台付椀	K	K	13.2	4.2	6.4	B, D	良好		暗 灰	40	
57	高台付椀	K	K	14.1	4.5	6.8	B, D	良好		暗 灰	30	
58	高台付椀	K	K	14.8	4.5	8.2	B, D	良好		淡 灰 白	20	
59	高台付椀	K	K				6.5 D	良好		淡 灰 白	20	
60	高台付皿	K	K				6.8	良好		淡 灰	10	
61	高台付皿	K	K				8.6 B	良好		淡 灰	20	
62	甕	H	H				9.0 B, I	良好		にぶい 橙	10	
63	甕 B II a	H	H	19.6	27.1	3.1	B, E, H	良好		外-にぶい 赤褐。内- 橙	100	
64	甕 B II b	H	H	19.8			B, E, H	良好		浅 黄 橙	15	
65	甕 A III b	H	H	15.0			B, E	良好		外-橙。内- 黒	20	

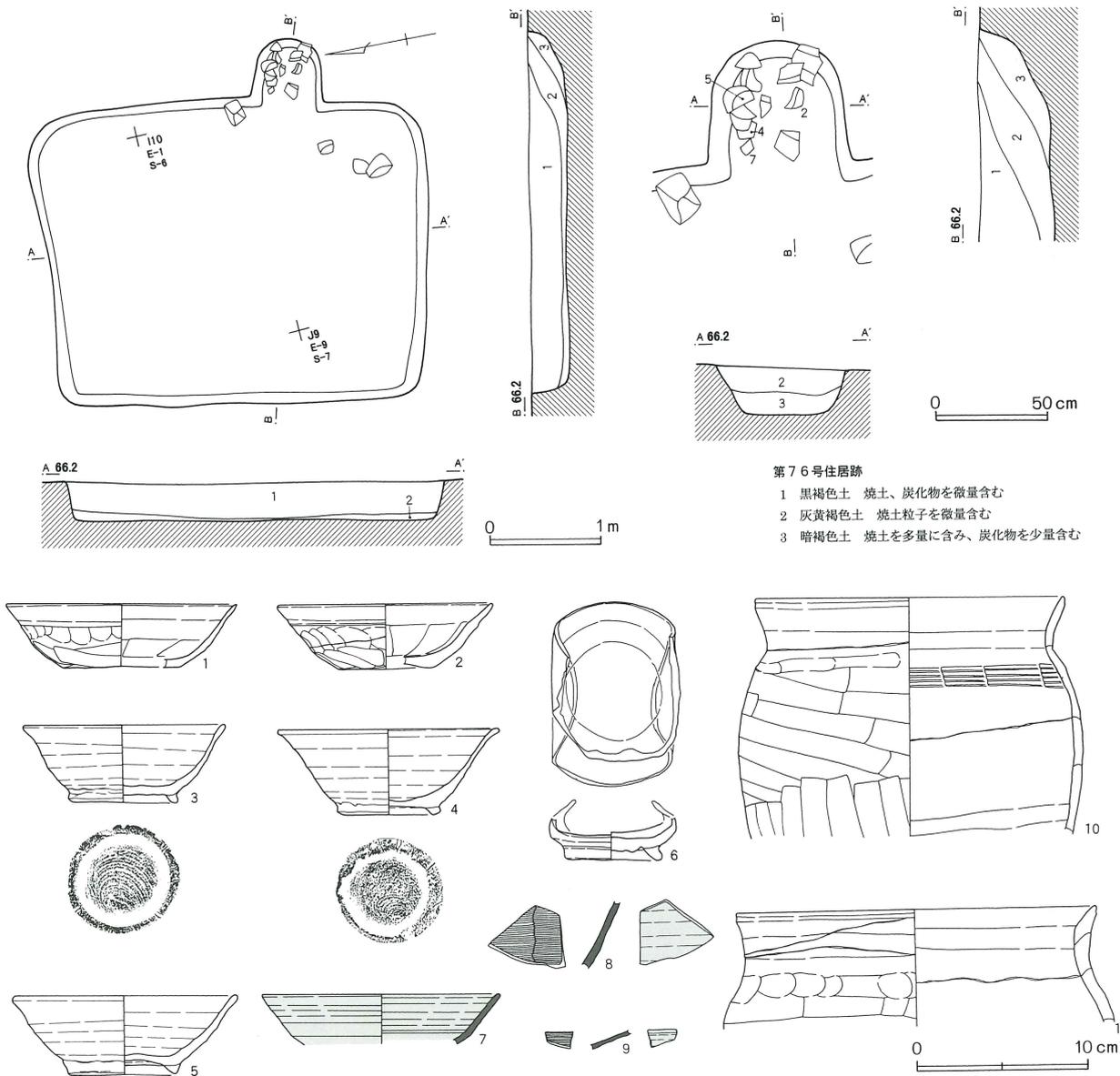
第127表 第75号住居跡出土遺物観察表(3)

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
66	台付甕	H	14.0				B, C, E	良好		外-橙。内-灰黄	20	カマド
67	甕	H				3.1	B, E, H	良好		浅黄橙	100	
68	甕	H				12.1	B, E	良好		浅黄橙	25	
69	大甕	H S	47.2				B	良好		灰	5	
70	把手	H					C, E	良好		橙		

第128表 第75号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
71	にぶい赤褐	100	4.2	1.8	0.4	13.9	B 1	I a	55	
72	灰黄褐	50	4.0	1.5	0.3	4.9	C 1	VII	157	
73	橙	50		0.8	0.2	1.4	C 2	II a	401	

第159図 第76号住居跡・出土遺物



第 129 表 第 76 号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B	H	13.3	3.8		6.8	B, C, E	不良	淡黄橙	30	
2	坏	B	H	12.5	3.8		5.6	B, E		暗こげ茶		
3	高台付碗	NS		11.6	4.6		6.0	B, E	良好	灰白	80	
4	高台付碗	HS		12.7	5.0		5.2	B, E	普通	橙	70	
5	高台付碗	HS		12.8	4.7		6.0	B, E, I	良好	灰白	90	
6	耳皿	HS					5.3	B, D, E	不良	淡灰褐	80	
7	稜碗	M		8.7				B	良好	緑	10	
8	高台付碗	M						B	良好	淡緑	5	
9	皿	M						B	良好	淡緑	5	
10	甕 A III c	H		18.0				B, E, H	良好	橙	20	
11	甕 A III e	H		20.9				B, E, H	良好	橙	25	

欠損している。

3から5は、高台付碗である。3は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。6は、須恵器（HS）の耳皿である。6は、口縁部が欠損している。

7から8は、緑釉陶器である。7は稜碗、8は高台付碗、9は皿である。7は、底部が欠損している。8・9は、体部破片である。

10から11は、甕である。10は胴部下位以下、11は胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第76号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第77号住居跡（第160図）

J-9グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壇などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.45m・短辺2.52m・深さ0.20mであった。

主軸方位は、N-92°-Eであった。

カマドは、東壁の南東隅で検出した。焚き口部の左

側が、燃焼部内に短く張り出す程度で袖は構築されなかったと判断した。燃焼部の掘り込みはなく、小さな段をもって煙道部に移行していた。煙道部は、長さ0.81mと細長く、地山を掘り抜いて造られていた。煙り出し部に向い、低く緩やかに傾斜し、垂直に立ち上がっていた。

遺構の切り合い関係は、第75号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付碗（2）・羽釜（5）が出土した。

1から4は、高台付碗である。4が須恵器（NS）の他は、須恵器（HS）である。3・4は、口縁部が欠損している。

5・6は、羽釜である。6が須恵器（NS）、5が須恵器（HS）である。5は胴部下位以下、6は胴部中位以下が欠損している。

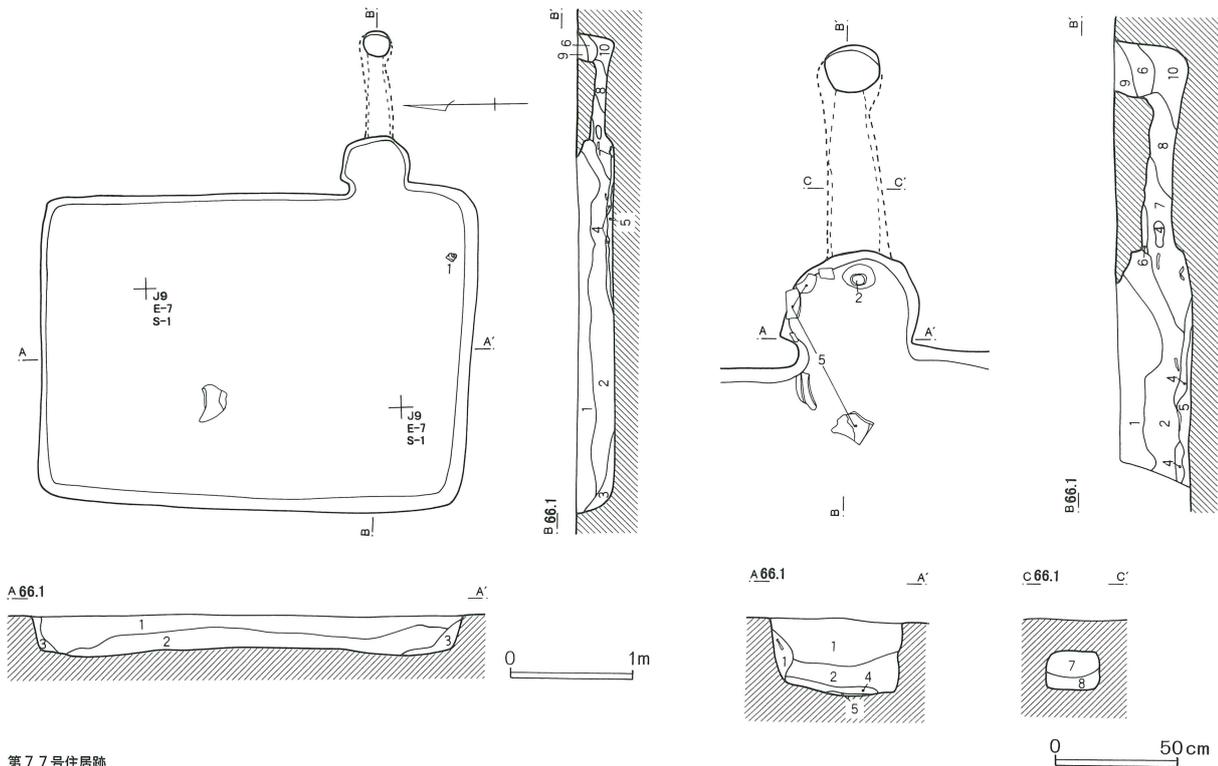
7は、延板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第77号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第 130 表 第 77 号住居跡出土遺物観察表

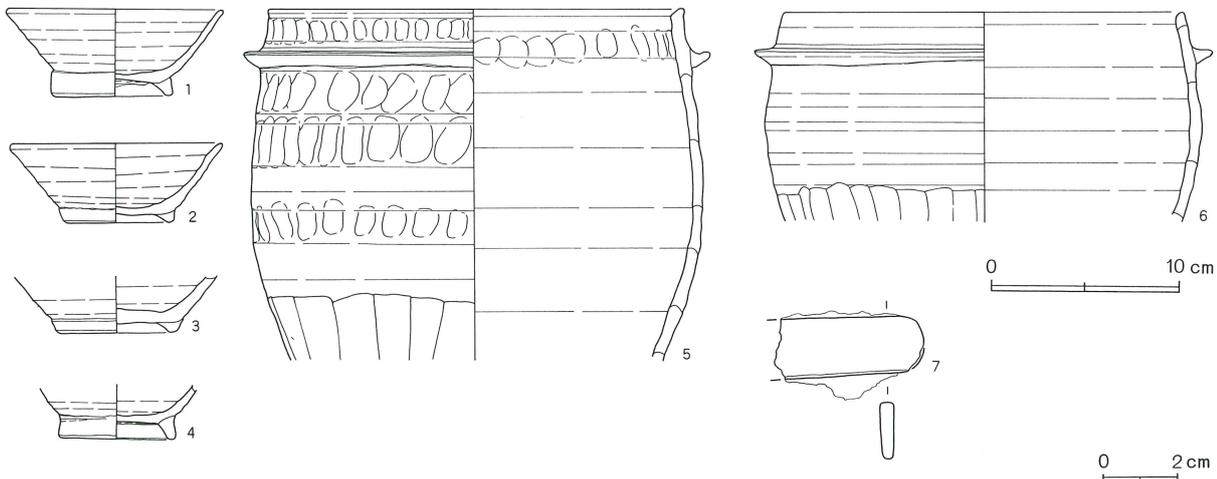
番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	HS		11.3	4.7		6.1	B, I	普通	にぶい橙	70	
2	高台付碗	HS		11.1	4.2		5.3	B, E, G, I	良好	にぶい黄橙	95	カマド
3	高台付碗	HS					5.9	B, E	普通	灰黄	30	
4	高台付碗	NS					5.8	B, I	普通	灰 オリーブ	20	
5	羽 B II b	HS		21.8	2.4			C, E, H, I	良好	橙	70	
6	羽 B II b イ	NS		21.1	2.1			B, C, E, H	良好	灰白	30	

第160図 第77号住居跡・出土遺物



第77号住居跡

- | | | |
|--|-----------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む、白色粒子を多量に含む | 4 赤褐色土 焼土層 | 8 暗灰褐色土 焼土を少量含む |
| 2 暗褐色土 焼土、炭化物、褐色土ブロックを少量含む
下面に炭化物のうすい層が堆積 | 5 暗褐色土 焼土、砂利を少量含む、炭化物を多量に含む | 9 暗灰褐色土 焼土を微量含む |
| 3 暗褐色土 焼土粒子を微量含む | 6 暗灰褐色土 炭を少量含む | 10 暗灰褐色土 砂利を少量含む |
| | 7 暗灰褐色土 焼土を多量に含む | 11 暗灰褐色土 焼土を多量に含む 粘性あり |



第78号住居跡 (第161図)

J-8グリッドで確認した。周辺は、土壇・溝・小穴など比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.85m・短辺1.97m・深さ0.42mであった。

主軸方位は、N-90°-Eであった。

カマドは確認できなかった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、須恵器(HS)の碗である。2から5は、高台付碗である。2・3が、須恵器(HS)、他が須恵

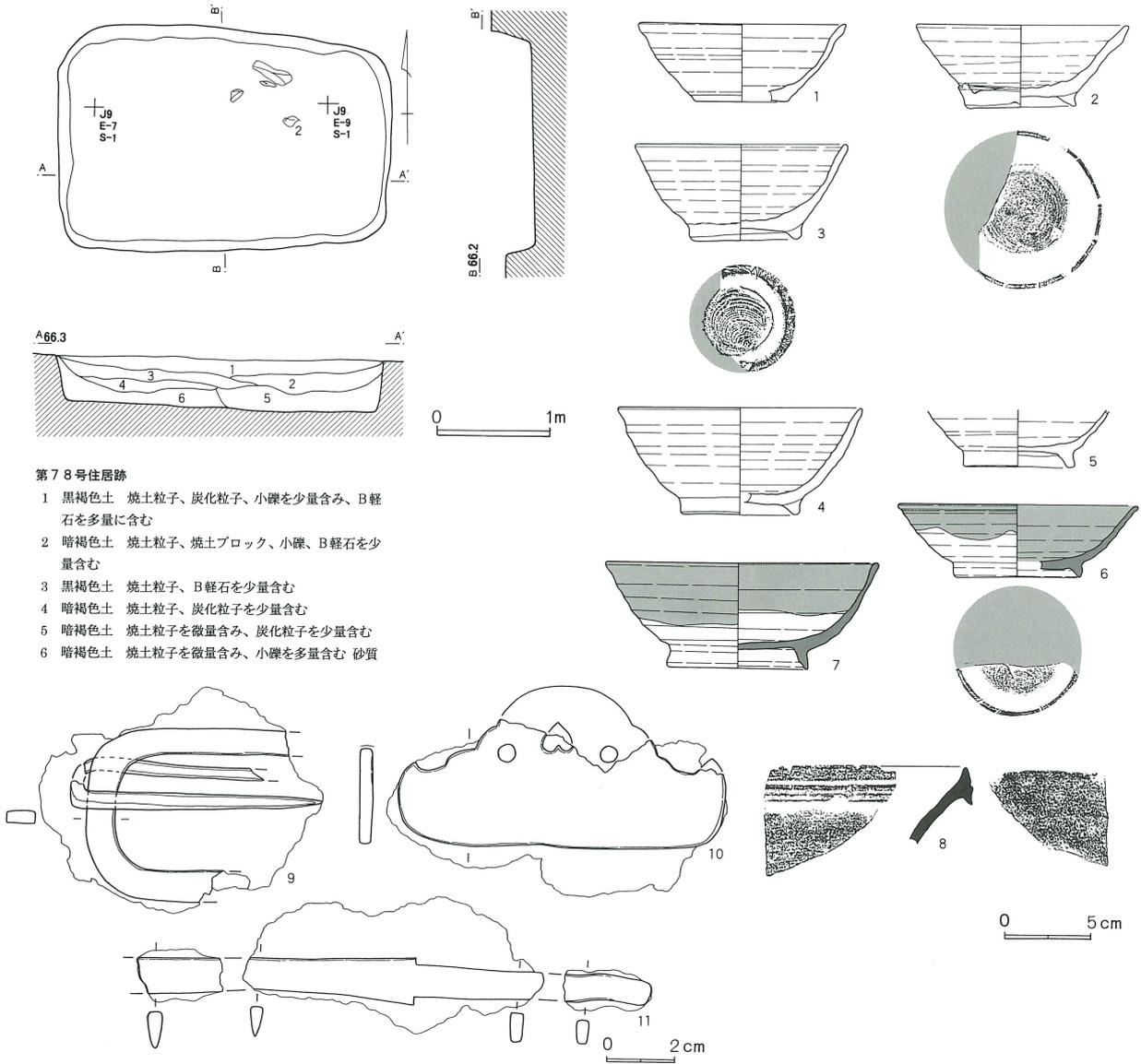
器（NS）である。1・4は底部、5は口縁部が欠損している。

が欠損している。

6・7は、灰釉陶器の高台付椀である。6は、底部

8は、須恵器（S）の大甕である。8は、口縁破片である。

第161図 第78号住居跡・出土遺物



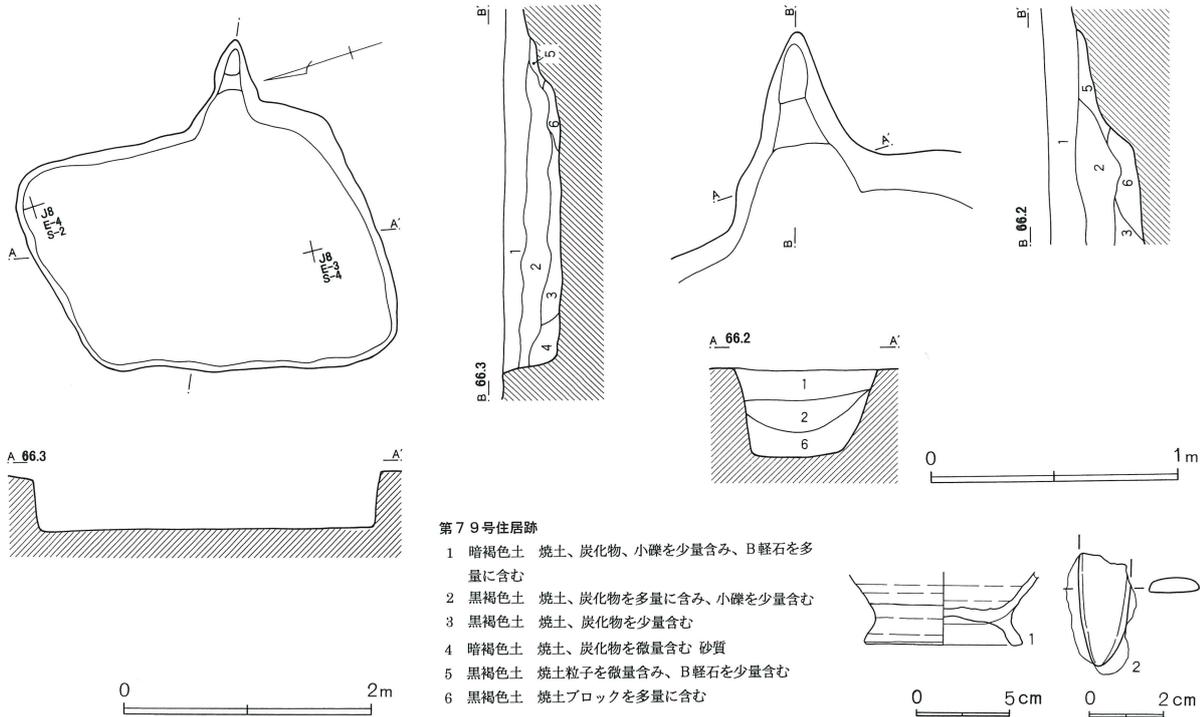
第78号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土粒子、炭化粒子、小礫を少量含み、B軽石を多量に含む
- 2 暗褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、小礫、B軽石を少量含む
- 3 黒褐色土 焼土粒子、B軽石を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土粒子、炭化粒子を少量含む
- 5 暗褐色土 焼土粒子を微量含み、炭化粒子を少量含む
- 6 暗褐色土 焼土粒子を微量含み、小礫を多量含む 砂質

第131表 第78号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	罅	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	11.5	4.5		5.0	A, B, E	良好	L	淡黄褐	25	
2	高台付椀	HS	12.0	4.8		5.9	B, E, I	普通	R	淡黄、黄灰	95	
3	高台付椀	HS	12.0	5.6		5.7	B, C, E	良好	R	外-黒。内-暗褐	40	
4	高台付大椀	NS	13.8	6.1		6.5	B, E, H	良好	R	灰白色	25	
5	高台付椀	NS				6.1	B, E, I	普通	L	灰白色	20	
6	高台付椀	K	13.5	4.1		7.0	K	良好		淡灰	40	
7	高台付椀	K	15.4	6.1		7.9	B	良好		淡灰	60	
8	須恵甕口縁	S					B	良好		灰	5	

第162図 第79号住居跡・出土遺物



第79号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土、炭化物、小礫を少量含み、B軽石を多量に含む
- 2 黒褐色土 焼土、炭化物を多量に含み、小礫を少量含む
- 3 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む
- 4 暗褐色土 焼土、炭化物を微量含む 砂質
- 5 黒褐色土 焼土粒子を微量含み、B軽石を少量含む
- 6 黒褐色土 焼土ブロックを多量に含む

9から11は、鉄製品である。9は、鉸具の一種と考えられる。10は火打金、11は刀子である。

以上、出土遺物から第78号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第79号住居跡（第162図）

J-8グリッドで確認した。周辺は土壌・溝・小穴など比較的密集していた。第14号区画溝と重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、歪んだ長方形であった。規模は、長辺2.75m・短辺1.98m・深さ0.17mであった。

主軸方位は、N-117°-Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、検出できなかった。燃焼部の掘り込みはなく、緩やかな段をもって煙道部へ移行していた。

遺構の切り合い関係は、第14号区画溝より新しかった。

た。

1は、須恵器（HS）の高脚高台付碗である。1は、口縁部が欠損している。

2は、鉄製品の鋤の脚部破片である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第79号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第80号住居跡（第163図）

K-8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壌など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の東半分を第82号住居跡が破壊したため、不明な点が多い。残存していた西壁は、長さ3.50m・深さ0.30mであった。

推定される主軸方位は、N-108°-Eであろう。

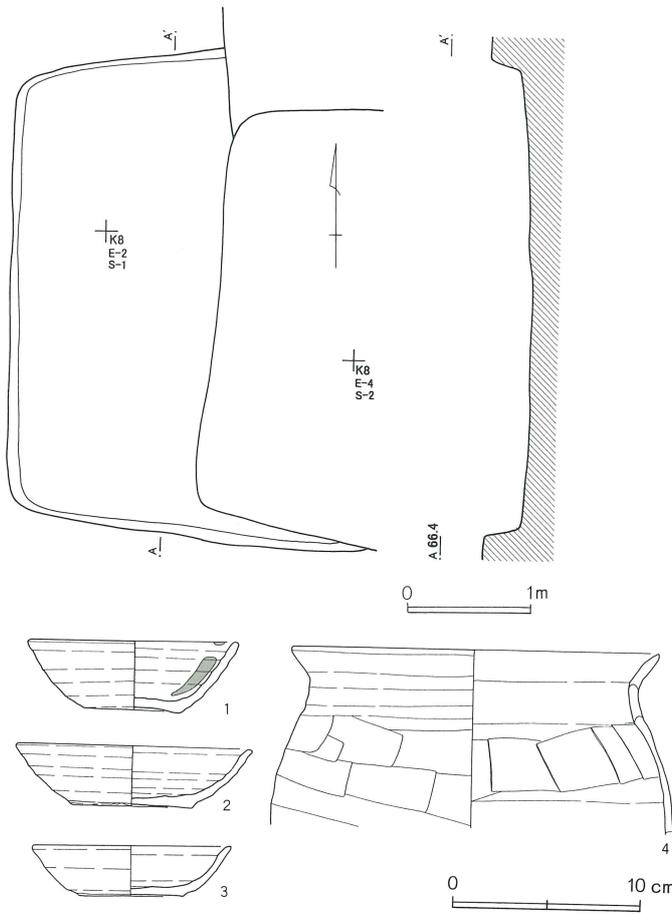
カマドは、東壁に造られていたと推定したい。

遺構の切り合い関係は、第81・82号住居跡より古か

第132表 第79号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	罅	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高脚高台付碗	HS				8.0	B, C, E, H	良好	R	淡赤褐	80	

第163図 第80号住居跡・出土遺物



った。

1から3は、須恵器（HS）の椀である。1は、内面体部に黒色の付着物が確認できる。

4は、土師器の甕である。4は、胴部中位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第80号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第81号住居跡（第164図）

J・K-8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壌など激しく重複し、確認に手間取った。住居跡の南西部を第82号住居跡が破壊していたため、全容は不明であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.68m・短辺3.27m・深さ0.47mであった。

主軸方位は、N-94°-Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。焚き口の両側に補強材の川原石が使用され、袖は造られていなかった。焚き口部から燃焼部にかけては、極く浅く窪んでいた。燃焼部から緩やかな段をもって煙道部に移行していた。煙道部は、長さ0.64mと細長く、地山を掘り抜いて造られていた。煙り出し部は、斜めに緩く傾斜したあと、垂直に立ち上がっていた。

遺構の切り合い関係は、第82号住居跡より古く、第80号住居跡、第226号土壌より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の坏（6）・羽釜（6・7）が出土した。

1から5は、高台付椀である。3は須恵器（HS）、他は、須恵器（NS）である。2・3は口縁部、4は高台、5は底部と高台が欠損している。1は、内面口縁部から底部にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

6・7は、羽釜である。6は須恵器（HS）、7は須恵器（NS）である。6・7は、胴部上位以下が欠損している。

8は、鉄製品の刀子基部である。

第133表 第80号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鏝	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	10.9	3.8		4.9	B, E, H	良 好	R	外-浅黄橙。 内-橙	60	カマド
2	椀	HS	12.1	3.2		6.3	B, E, I	良 好	R	にぶい橙	40	
3	椀	HS	10.4	2.7		5.6	B, E, I	普 通	R	橙	50	
4	甕 B III a	H	19.1				B, C, H	良 好		淡 橙	25	